

高宮八丁遺跡

(大阪府寝屋川市)

—寝屋川郵便局庁舎建設に伴う発掘調査

概要報告書

1 9 8 7 • 3

寝屋川市教育委員会

高宮八丁遺跡

(大阪府寝屋川市)

—寝屋川郵便局庁舎建設に伴う発掘調査
概要報告書—

1 9 8 7 • 3

寝屋川市教育委員会

序 文

寝屋川市は古代から水が豊富な土地であり、籠作農耕が発達したところです。稻作は弥生時代から開始されており、これによって日本独特の文化が大きく発展しました。北河内地方でも、古代河内潟に沿って多くの弥生時代の遺跡の分布がみられ、稻作農耕に理想的な土地であったと思われます。

今回発掘調査を行いました高宮八丁遺跡は、寝屋川郵便局庁舎建設予定地内において2700㎡を発掘調査し、弥生時代前期中ごろから中期中ごろに至る古代河内潟北岸の低地に立地した弥生集落の遺跡であることが確認された新発見遺跡であります。

昭和60年10月から昭和61年7月までの発掘調査により、弥生時代前期末から中期・前期中ごろから前期末までの、遺物包含層の状況や遺構等の構成から大きく2つの時期に区分できる遺物包含層を検出することができました。

遺跡からは、堅穴式住居跡や墓等の遺構は検出されなかったものの、多種・多様で豊富な土器、石器・木製品の出土をみると集落跡であったと思われます。また、花粉分析の結果から、この地で稻作が行われていたことも推察されました。

今回の調査により、多くの未解明な部分を残す弥生時代前期・中期の古代河内潟周辺の弥生社会の解明研究に大きく寄与することができましたことは大きな収穫であったと思われます。

この報告書は、これまでの発掘調査の概要をまとめたものであります。本書が郷土の歴史と文化を明らかにする一助となり、文化財に対する理解を深める基礎資料となれば望外の喜びであります。

なお、今回の調査の実施にあたり、事業主体者として調査経費の負担など多大のご協力をいただきました近畿郵政局をはじめ、関係各位には心よりお礼を申し上げますとともに、調査に従事していただきました多くのみなさまに対し深く感謝の意を表する次第です。

昭和62年3月

寝屋川市教育委員会

教育長 山 田 勝 久

例　　言

1. 本書は、近畿郵政局が計画した寝屋川郵便局庁舎新築工事に伴う寝屋川市初町332番1他所在の高宮八丁遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、寝屋川市教育委員会が近畿郵政局の依頼を受けて実施したものである。
3. 本調査に要した費用は、すべて近畿郵政局が負担した。
4. 調査は、昭和60年10月2日から昭和61年7月31日まで現地調査を実施し、出土遺物の基礎的整理を主とする遺物整理も発掘調査と並行して、昭和60年11月17日から昭和61年12月27日の間実施した。
5. 本書作成にかかる概略的な整理作業等は、昭和61年8月1日から昭和62年3月20日までの間実施した。
6. 調査は、大阪経済法科大学講師（考古学）瀬川芳則を調査顧問とし、寝屋川市教育委員会社会教育課・塙山則之が担当し、調査員として、オレゴン大学・片岡修、調査補助員として奥田達治、鶴林齊享、浜田幸司、籠本政道、新庄博文、亥野嘉洋、岩井清至、谷治郎、柳井富美、村田幸子、大坂徹、森幸三、村上敬司、浅田千成、福西啓仁があたった。
出土遺物の整理については、升谷喜世子、清水芳子、中田公子、畠中久子、松永茂子、須崎美千代、田中茂子、福西由美子、平谷麻由美、秋好真希子があたった。
7. 本書の作成については、塙山則之が執筆し、実測及びトレイスについては、塙山則之、片岡修、中原初美、鶴林齊享、川畑聰、柳井富美、露口真広、村田幸子があたり、写真撮影は塙山則之がそれぞれ行った。
8. 発掘調査の進行及び報告書作成にあたり次の各氏、各機関から御指導、御教示を得た。記して謝意を表する。
石神怡氏・堀江門也氏・玉井功氏・松岡良憲氏（大阪府教育委員会文化財保護課）、井藤晚子氏（但大阪府埋蔵文化財協会）、伊藤健司氏（創元興寺文化財研究所）、植田正幸氏（守口市大庭北遺跡発掘調査団）、宇治田和生氏・下村節子氏・三宅俊隆氏・谷川博史氏・西田敏秀氏（御牧方市文化財研究調査会）、柿沼菜穂氏・北野俊明氏（堺市博物館）、梶山彦太郎氏、下村晴文氏（東大阪市教育委員会）、野島稔氏（四條畷市立歴史民俗資料館）、増崎勝敏氏（大阪府立南寝屋川高校）、村川行弘氏（大阪経済法科大学）、森岡秀人氏（芦屋市教育委員会）、森田克行氏（高槻市立埋蔵文化財調査センター）、文珠省三氏（大阪市立博物館）（五十音順）
9. 発掘調査の実施にあたっては、近畿郵政局の全面的な協力を得、寝屋川郵便局、初町自治会・本町自治会・高宮自治会・島藤建設工業株式会社・安本建設株式会社・地元各位の協力を得た、記して厚く感謝の意を表する。

本文目次

序文

例言

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の位置と歴史的環境	3
III 調査の概要	3
IV 出土遺物	14
V 遺物観察表	30
VI まとめ	58

図版

挿図目次

挿図1 調査地位置図	2
挿図2 高宮八丁遺跡周辺遺跡分布図	4
挿図3 基本層序図	8
挿図4 第1期調査区断面図(西断面・北断面)	9~10
挿図5 D-3区出土編物実測図	13
挿図6 遺物実測図(勾玉・管玉)	29

図版目次

図版1 遺物実測図(蓋)	63
図版2 遺物実測図(甕)	65
図版3 遺物実測図(鉢・高杯・壺用蓋形土器)	67
図版4 遺物実測図(ミニチュア土器等)	69
図版5 遺物実測図(壺用蓋形土器)	71
図版6 遺物実測図(壺用蓋形土器)	73
図版7 遺物実測図(紡錘車)	75
図版8 遺物実測図(土製円板)	77
図版9 遺物実測図(石庖丁)	79
図版10 遺物実測図(石庖丁)	81
図版11 遺物実測図(石庖丁)	83
図版12 遺物実測図(石庖丁)	85
図版13 遺物実測図(石庖丁)	87
図版14 遺物実測図(石庖丁・大型石庖丁等)	89
図版15 遺物実測図(大型石庖丁)	91
図版16 遺物実測図(石鏽)	93
図版17 遺物実測図(石槍・石剣等)	95
図版18 遺物実測図(石斧)	97
図版19 遺物実測図(砥石)	99
図版20-1~20-3 遺物実測図(木製品)	101

図版21 調査地近景（調査前）	103
図版22 航空写真（上層遺構）	105
図版23 航空写真（下層遺構）	107
図版24 遺構写真	109
図版25 遺構写真（上層遺構）	111
図版26 遺構写真	113
図版27 遺構写真（上層遺構）	115
図版28 遺構写真（下層遺構）	117
図版29 遺構写真（下層遺構）	119
図版30 ドングリの貯蔵穴	121
図版31 遺物出土状況（壺）	123
図版32 遺物出土状況（甕・鉢）	125
図版33 遺物出土状況（石庖丁・大型石庖丁）	127
図版34 遺物出土状況（用材・又鍬）	129
図版35 遺物出土状況（鍔・鍔未製品）	131
図版36 遺物出土状況（石斧の柄）	133
図版37 遺物出土状況（權）	135
図版38 遺物出土状況（弓）	137
図版39 遺物出土状況（匙・編物）	139
図版40 遺物出土状況（鏃・井戸状遺構）	141
図版41 遺物写真（壺）	143
図版42 遺物写真（壺・無頸壺）	145
図版43 遺物写真（壺・甕）	147
図版44 遺物写真（鉢・高杯）	149
図版45 遺物写真（ミニチュア土器）	151
図版46 遺物写真（土製品・高杯・甕用蓋形土器・装飾品）	153
図版47 遺物写真（壺用蓋形土器）	155
図版48 遺物写真（壺用蓋形土器）	157
図版49 遺物写真（紡錘車）	159
図版50 遺物写真（土製円板）	161
図版51 遺物写真（土製円板・赤彩文土器）	163
図版52 遺物写真（石庖丁）	165
図版53 遺物写真（石庖丁）	167
図版54 遺物写真（石庖丁）	169

図版55 遺物写真（石庖丁）	171
図版56 遺物写真（石庖丁）	173
図版57 遺物写真（石庖丁）	175
図版58 遺物写真（石庖丁）	177
図版59 遺物写真（石庖丁等）	179
図版60 遺物写真（大型石庖丁）	181
図版61 遺物写真（石鏡）	183
図版62 遺物写真（石器類）	185
図版63 遺物写真（石器類）	187
図版64 遺物写真（木製品）	189
図版65 高宮八丁遺跡上層（弥生時代前期末～中期中葉）遺構概略図	191～192
図版66 高宮八丁遺跡下層（弥生時代前期中葉～前期末）遺構概略図	193～194

I 調査に至る経過

高宮八丁遺跡は、從来古代讃良郡の条里制遺構の一部に該当すると考えられているけれども、調査等まったく実施されていないため当該地に関する知見は皆無といつていいほどであった。

1985（昭和60）年2月、近畿郵政局より寝屋川市初町（はつちょう）332番1 他に（小字名北高田）において寝屋川郵便局庁舎新築を計画している旨の事前相談が寝屋川市教育委員会にあった。寝屋川市教育委員会は、当該計画地が、古代讃良郡の条里制遺構の一部にあたり、庁舎建築規模が大きく地下構造を有するため、協議の上 1985（昭和60）年3月6日に遺跡の範囲確認及び基本層順を正確に把握するため開発予定地内に約 6,000 m²に10メートルごとに5ヶ所のトレーン（試掘坑）を掘り試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、現地表下約2.5メートルに弥生時代前期から中期の遺物包含層が確認され、この層内より弥生時代前期から中期の壺、甕等の土器類及び磨製石剣、石鎧等の石器類が多数出土した。しかし、条里制遺構に関する遺物、遺構は、発見するに至らなかった。

寝屋川市教育委員会は、試掘調査により発見された遺跡を新発見遺跡として早急に大阪府教育委員会及び文化庁に遺跡発見を通知した。

試掘調査の結果をふまえて近畿郵政局と寝屋川市教育委員会は遺跡の保存について協議をかねた。その結果、寝屋川郵便局庁舎新築工事によって遺構の破壊が予想される約 2,700 m²を第1次（約 1,400 m²）、第2次（約 1,300 m²）にわけて調査を実施することが決定した。寝屋川市教育委員会は、近畿郵政局と 1985（昭和60）年7月29日に覚書を交換し、依頼により同年10月2日より現地における調査を実施した。なお、調査に用する全費用は全て近畿郵政局が負担し、寝屋川市教育委員会において調査記録及び出土遺物の保管をすることになった。

調査は、遺物包含層が厚いえ当初の予想以上の遺物の出土があり、さらに遺構が複雑であるため調査は難行し、期間延長を行って 1986（昭和61）年7月31日に現地における発掘調査を終了した。現地調査と並行して現地事務所において遺物の洗浄、復元等の整理作業を同年12月27日まで実施してきたけれども出土遺物の数量がコンテナパット二千数百箱におよびすべて整理することは不可能で、昭和62年度以降年次計画的に整理を行い、報告書作成作業にあたることとなった。



図1 調査地位置図

0 100m

II 遺跡の位置と歴史的環境

寝屋川市は大阪府の東北部に位置し、市の地形は、東西約6.89km、南北6.74km、面積24km²であり、大きく東部丘陵地帯と西部平坦地帯に別けることができる。

東部丘陵地帯は、大阪府と奈良県の府県境に連なる生駒山系の西側斜面から派生した洪積層で形成され、西部平坦地帯は沖積層によって形成されている。市内を流れる河川は、淀川、寝屋川、古川、瀬良川、前川、南前川、打上川、櫛根川等があり、淀川と古川以外はいずれもその源を東部の山間に発している。なかでも寝屋川は、本市の市名にもなっており市内を貫流している。今回調査を実施した高宮八丁遺跡は、寝屋川の左岸に位置している。

生駒山系の西側斜面に広がる台地は、そのほとんどが洪積層の大坂層群からなり、北は京都府八幡市の八幡丘陵（男山丘陵）、南は四條畷市の南野丘陵までの淀川左岸に形成された広大な丘陵及び段丘であり、枚方台地と総称されている。

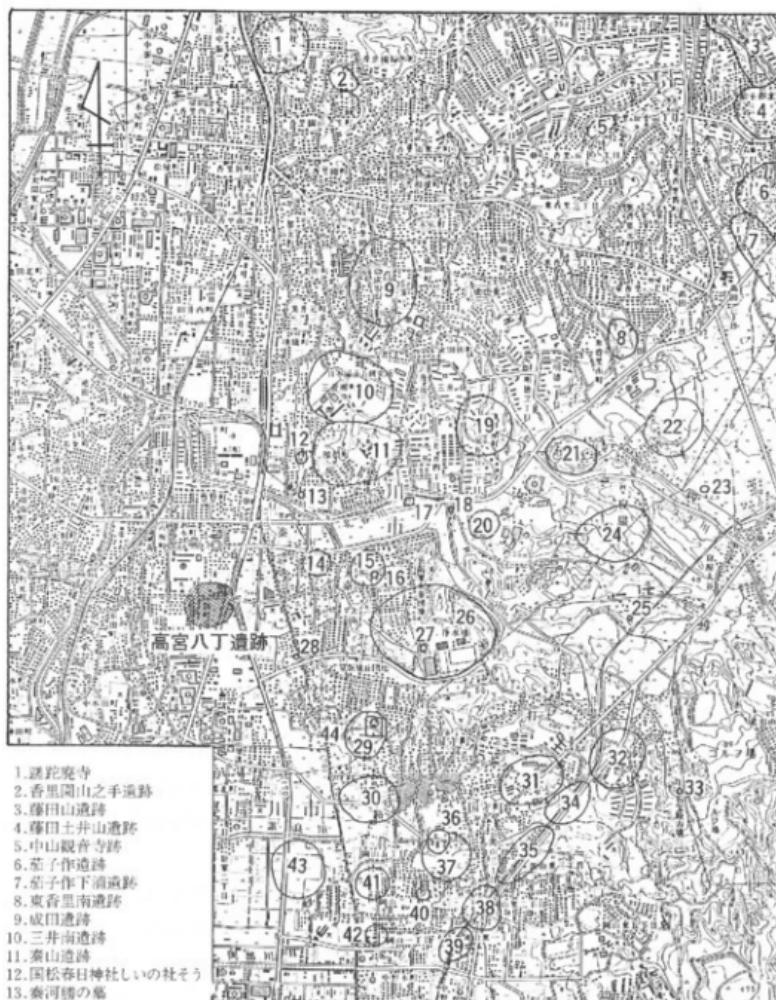
この枚方台地を横切るように中小河川が流れ、肥沃な土地を形成している。

枚方台地に人々が最初にその足跡を残したのは旧石器時代からである。

旧石器時代には、男山丘陵（八幡丘陵）の西麓の枚方市楠葉東遺跡で、国府型ナイフ形石器・有舌尖頭器・木葉状尖頭器・削器・水晶製ナイフ形石器が出土し、切り出し状の小形ナイフ形石器・国府型ナイフ形石器・搔器・石核などが出土した藤阪宮山遺跡、その藤阪宮山遺跡と穂谷川を挟んで対峙する位置にある津田三ツ池遺跡では、国府型ナイフ形石器・小型舟底形石器・搔器などが出土し、藤阪南遺跡からは木葉状尖頭器が出土している。船橋川水系の北山遺跡からはナイフ形石器・交北城ノ山遺跡からナイフ形石器・頁岩製の削器・楔形石器・出屋敷遺跡・津田トッパナ遺跡・津田城遺跡からはナイフ形石器が、小倉東遺跡で舟底形石器がそれぞれ出土している。天野川水系の星丘西遺跡ではナイフ形石器・舟底形石器、星丘遺跡で国府型ナイフ形石器・舟底形石器、村野遺跡から国府型ナイフ形石器・藤田土井遺跡から有舌尖頭器が出土している。

交野市の神宮寺遺跡からは、国府型ナイフ形石器・有舌尖頭器・石核等が出土し、神宮寺遺跡の西の倉治付近で尖頭器、星田付近でも尖頭器が出土しており、布懸遺跡から小型のナイフ形石器・剥器等が出土している。

寝屋川市では、高宮遺跡から国府型ナイフ形石器・翼状剥片等が出土し、太秦古墳群では古墳の盛土内からナイフ形石器、打上の市立第四中学校裏手の丘陵端でナイフ形石器、また淀川でもナイフ形石器がそれぞれ表面採集されている。寝屋川市と四條畷市の境界を流れる瀬良川床に形成された四條畷市更良岡山遺跡では、大型両刃の礫器・国府型ナイフ形石器を含むナイフ形石器類・削器・彫器・細石刃・舟底形石器・石刃・翼状剥片等が出土し、岡山南遺跡で木葉状尖頭器、南山下遺跡で有舌尖頭器、生駒山地内の田原遺跡で尖頭器、忍陵遺跡でナイフ形石器が出土するなど、枚方台地上には20を越える旧石器時代の遺跡の存在が確認されており、



1. 逃跡庵寺
2. 香里開山の手遺跡
3. 藤田山遺跡
4. 藤田土井山遺跡
5. 中山觀音寺跡
6. 茄子作遺跡
7. 茄子作下酒遺跡
8. 東首里南遺跡
9. 成田遺跡
10. 三井南遺跡
11. 畜山遺跡
12. 国松春日神社しいの社そう
13. 泰河勝の墓
14. 神宮寺跡
15. 太秦魔寺
16. 廣埴輪出土地
17. 遠喜式内繼屋神社
18. 麟塚
19. 泥の瀬遺跡
20. 太秦北遺跡
21. 寝屋遺跡
22. 寝屋東遺跡
23. 寝屋長者屋敷跡伝承地
24. 寝屋南遺跡
25. 寝屋古墳
26. 太秦遺跡・太秦古墳群
27. トノ山(高塚)古墳
28. 筒式土器出土地
29. 高宮魔寺跡(国史跡)・高宮遺跡
30. 小路遺跡
31. 国守西遺跡
32. 打上遺跡
33. 石の宝殿古墳(国史跡)
34. 国守遺跡
35. 玲井遺跡
36. 謙良寺跡
37. 廣岡山遺跡
38. 忍ヶ岡駅前遺跡
39. 南山下遺跡
40. 忍ヶ岡古墳
41. 北口遺跡
42. 余糞田遺跡
43. 砂遺跡
44. 遠喜式内高宮神社

插図2 高宮八丁遺跡周辺遺跡分布図

旧石器時代研究上重要なポイントになっている地域である。

繩文時代になると、畿内でも最古に属する土器文化をもつ人々の跡が確認されている。

「神宮寺式土器」として早期初めの編年基準となった尖底の押型文をもつ土器を出土した学史上有名な交野市神宮寺遺跡、淀川川床の枚方市磯島先遣跡、田原盆地の四條畷市田原遺跡、大東市寺川堂山下遺跡があり、神宮寺式に後続する「穂谷式」の名で知られる枚方市穂谷遺跡がある。前期には、山形文や神宮寺式の押型文土器片・チャートを用いた半磨製の魚形石鏃（所謂「とろとろ」）等を出土した枚方市穂谷遺跡をはじめ、土器の出土はないが横型石匙の採集が知られる津田三ツ池遺跡、磯島先遣跡、寝屋川市では、津田三ツ池遺跡出土の石匙に類似した横型石匙や土器の出土がみられる。中期になると、「キャリバー型土器」とよばれる中期の典型的な特徴をもつ土器を出土した交野市星田旭遺跡、五角形の星型の底部を有する土器が出土した枚方市磯島先遣跡、船元式土器を出土する四條畷市南山下遺跡、砂遺跡があり、後期・晩期には、大型の深鉢を土坑に収めた埋甕を出土した枚方市交北城ノ山遺跡、磯島先遣跡、船橋式の深鉢が採集されている枚方市船橋川河川敷、寝屋川市小路遺跡、中津式・滋賀里式・船橋式土器等を出土している四條畷市更良岡山遺跡が知られている。

弥生時代の遺跡、特に古い時期の遺跡は、天野川上流の田原盆地で畿内第Ⅰ様式（新段階）の壺を出土した田原遺跡以外は枚方台地ではほとんどなく、古代河内潟の縁辺において最近その報告例が増加してきている。淀川川床にある枚方市磯島先遣跡では、頭部に段をもつ壺形土器、削出し穴帯をもつ壺形土器等が出土し、四條畷市雁屋遺跡では、畿内第Ⅰ様式古段階の大型の壺が出土している。古代の交通ルートの要所にある大東市中垣内遺跡があり、門真市普賢寺遺跡からは畿内第Ⅰ様式新段階の壺の出土が知られている。中期には、堅穴式住居と高床式の掘立柱建物跡や井戸からなる集落の一部と、42基の方形周溝墓の墓域が発見された枚方市交北城ノ山遺跡、中期後半（畿内第Ⅲ様式新段階）に始まり炭化米等が出土し高地性集落として有名な田口山遺跡が知られ、木棺の残存状況の非常に良い方形周溝墓を検出した四條畷市雁屋遺跡、寝屋川市においては、壺の口縁端部に刻目がめぐる畿内第Ⅱ様式の土器を出土し、河内平野と枚方台地の接点の海拔60m前後の丘陵頂部に位置する高地性集落として学史上有名な太秦遺跡が所在している。

後期になると、淀川左岸流域、枚方台地上の遺跡の数は膨大な数にのぼる。その代表的な遺跡として、焼けおちた住居跡を検出した枚方市長尾西遺跡、津田城遺跡、集落と方形周溝墓の墓域を区画するV字溝等を検出した大野川水系の星丘西遺跡、シカを描いた土器片等を出土した藤田山遺跡、小型彷彿重圓文鏡・分銅形土器・手焙形土器・異形土器を出土し淀川と天野川を見おろす位置にある鷹塚山遺跡、六角形の堅穴式住居を検出した山之上天堂遺跡、淀川に面した低地の遺跡で近江系鉢形土器や朱塊のついた土器が出土した渚遺跡、弥生時代後期に成立し、古墳時代中頃まで継続する大集落の茄子作遺跡、海拔200mの生駒山系の山上に位置し通信基地的性格がつよい交野市南山遺跡、寝屋川市においては、太秦遺跡の南約1kmにある

小路遺跡が知られている。

古墳時代には、前期に天野川河口付近の淀川をのぞむ台地上に築かれ、水運との関係を考えられ、京都府格井大塚古墳出土の銅鏡と同范關係にある吾作館四神四獸鏡など八面の銅鏡を出土した枚方市万年寺山古墳、三基の粘土櫛をもち画文帶環状乳神獸鏡・銅鏡・碧玉製の鐵形石製品等を出土した藤田山古墳、粘土櫛内から硬玉製勾玉・ガラス製小玉・碧玉製管玉・鉄製品等を出土した交野市妙見山古墳、交野山西麓の海拔 100 m 前後に前方部が櫛型に広く雷塚をはじめとする前方後円墳 5 基・円墳 3 基からなる森古墳群、全長約 80 m の前方後円墳で長さ約 6.3 m、幅約 1 m、高さ約 0.7 m の竪穴式石室を有する四條畷市忍ケ岡古墳が知られている。中期になると、ノヅチ伝承をもつ枚方市禁野車塚古墳、二重の空濠をもつ牧野車塚古墳、方形の周濠をめぐらす円墳や筒形銅器・巴形銅器・家形埴輪・横矧軒留短甲を模した形象埴輪等が出土した交野市寺・車塚古墳群、四條畷市墓の堂古墳がある。後期になると、枚方市中宮古墳群、朱彩の横穴式石室をもつ白雉塚古墳、8 基の円墳からなる交野市倉治古墳群、漢道をもたない片袖式の横穴式石室をもつ古墳で形成されている寺古墳群、蓋形埴輪のほか多数の埴輪を出土した四條畷市更良岡山古墳群がある。

寝屋川市においては、「神武東征」と「野野宿彌の墓」の伝承をもち空の周濠をめぐらすトノ山(高塚)古墳、太秦 1 号墳・廻し塚・水晶製切子玉・金環・銀環等を出土したゲンゲン谷古墳を含み、シカの頭部埴輪・六鈴鏡・三環鏡・子持ち勾玉・盾の形象埴輪・銅鏡・漆塗りの革製盾の残片等を出土した太秦古墳群、北河内地方最大規模の横穴式石室(無槻式)をもつ円墳の寝屋古墳、江戸時代『河内名所図会』に「八十塚(やそつか)」として紹介されているが後世の開闢等のためほとんどその姿を消してしまった打上古墳群、長さ約 3 m、幅約 1.5 m の板状の花崗岩を下石とし、その上に直径約 3 m、高さ 1.5 m の巨岩を置き奥行約 2.3 m、幅約 0.9 m、高さ約 0.7 m、開口部幅 0.5 m の両槻式の横口式石槨がくりぬかれ、漢道をもち、金銅製の骸骨容器が出土したと伝えられる古墳時代終末期のものとして著名な石の宝殿古墳がある。古墳時代の集落跡の遺跡も多く、代表的なものとしては、穂谷川の旧河道右岸の自然堤防と氾濫原に営まれた枚方市藤阪南遺跡では、前期の竪穴式住居や後期の厩舎と考えられる 1 間 × 10 間の細長い掘立柱建物跡や掘立柱の倉庫跡が発見されている。弥生時代からつづく茄子作遺跡の住居跡からは、幹式系の平底の鉢等が出土し注目をひいている。切り妻造りの家形埴輪や円筒埴輪等を出土した四條畷市岡山南遺跡、人物埴輪の頭部や蓋形埴輪を出土した中期の忍ヶ丘駅前遺跡、馬形埴輪を出土した南手下遺跡、5 世紀後半の多量の製塙土器を出土した中野遺跡、石敷製塙炉や方形周溝状遺構の周構内から 4 体分の小型の古代馬(蒙古系馬)の骨を出土した奈良井遺跡などが知られている。寝屋川市においては、古墳時代後期に属する竪穴式住居が高宮遺跡で数棟発見されている。高宮遺跡は、海拔 28 m 前後の丘陵頂部とその南斜面一帯に広がる旧石器時代から中世に至る大集落跡で、特に飛鳥白鳳時代には、一辺約 1 m の巨大な柱穴をもつ掘立柱建物群や一辺約 4 m の竪穴式住居群が発見されており、掘立柱建物群と竪穴

式住居跡とは長い柵列によって区画されていたようである。この地に居住した人々によって白鳳時代初頭に東に隣接する高宮廃寺が創建されたと推察されている。

古代寺院関係の遺跡としては、四天王寺創建時の瓦を焼いた6基の瓦窯が発見されている八幡丘陵西麓の枚方市楠葉・平野山瓦窯、金銅製誕生仏が高句麗系の軒丸瓦が出土した九頭神廃寺、新羅系の軒丸瓦を出土した中山観音寺跡、百濟寺南遺跡、特別史跡百濟寺跡、交野市長法寺跡、寝屋川市高宮廃寺跡、太秦廃寺跡、高柳廃寺跡、寝屋川市と四條畷市にまたがる讚良寺跡、四條畷市正法寺跡などが知られており、その他中世以降の遺跡の数は膨大な数にのぼるようになる。

以上のように、淀川左岸（特に北河内地方）の各市においては、多くの注目すべき遺跡の分布がみられる。

III 調査の概要

今回調査を実施した寝屋川市初町（はっちょう）所在の高宮八丁遺跡は、寝屋川郵便局庁舎新築工事に先立って実施した試掘調査によって、弥生時代前期から中期に至る遺跡であることが確認された新発見遺跡である。このため開発予定地約6,000 m²の内約2,700 m²の寝屋川郵便局庁舎建設予定地について、第1期調査（約1,400 m²）・第2期調査（約1,300 m²）にわけて調査区を設定して本格調査を実施した。

調査は、東西南北に10m四方区画の基準杭を設定して区画設定を行い、東西方向を北から0ライン～10ライン、南北方向を東からAライン～Hラインと命名し、南東杭を基準杭としてA-1、A-2、A-3、……とした区画を設定して実施した。

a) 層序

V	V	V	V
I			
II			
III			
IV			
V			
VI			
VII	T.耕土		
VIII	II.床土		
IX	III.白色砂質土層		
X	IV.灰色砂質土層		
XI	V.淡灰色砂層		
XII	VI. . . (砂粒大)		
XIII	VII.黑色粘質土層(上層)		
XIV	VIII.暗灰綠色砂質土層		
XV	VII.暗青灰黑色粘質土層 (白色砂まじり)		
XVI	X.黑色粘質土層		
XVII	XI.灰黑色粘質土層		
XVIII	XII.黑色粘質土層		
XIX	XIII.明灰黑色粘質土層		
XV	XIV.青灰色砂層		

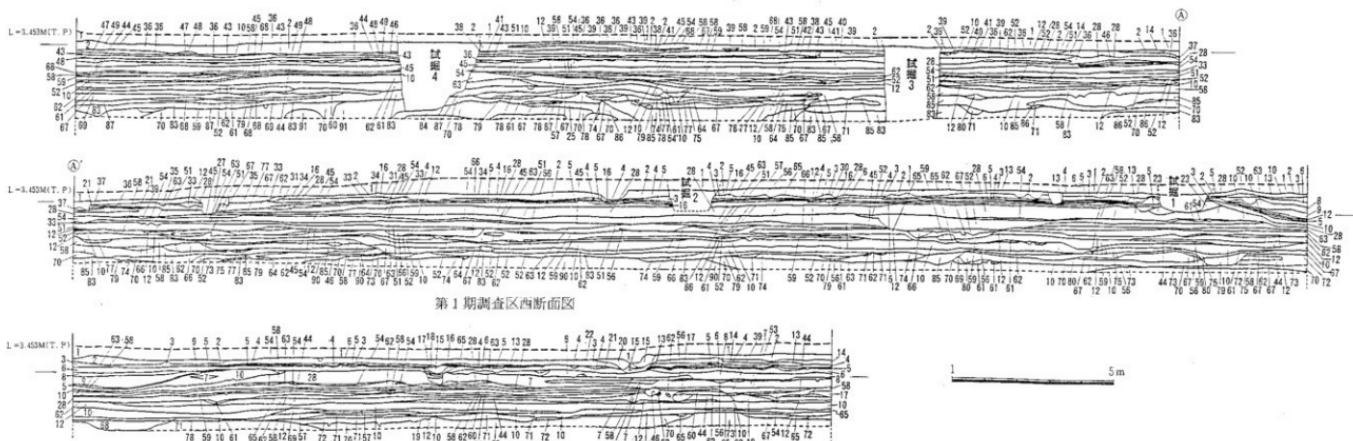
插図3 基本層序模式図

今回の調査地における基本的な層序は、補図3に示すとおりであるが、各層は北東から南西へゆるやかに傾斜しており、これは高宮八丁遺跡の立地条件によるものである。高宮八丁遺跡の所在する大阪平野の地形発達については、梶山彦太郎・市原実両氏のすぐれた研究成果が「大阪平野の発達史」及び「續大阪平野発達史」として発表せられ、ほぼ解明されている感がある。

それによると、高宮八丁遺跡は、河内渦の北東に位置し、寝屋川左岸に形成された低湿地に立地している。

第Ⅲ層上面において溝・自然河川・耕作痕・井戸を検出した。井戸以外の遺構の残存する深さはそれぞれ10～15cm程度の浅いもので、後世の削平をかなり受けしており、出土遺物は極めて少なくその出土遺物から中世以降のものと推察される。

第Ⅸ層中には調査地全域にわたって弥生時代前期末～中期中葉にわたる遺物が多量に包含されており、第Ⅸ層を



- | | | | | | |
|----------------------|---------------------|--------------------|---------------------|-------------------------|-----------------------------|
| 1. 樹土 | 18. 青灰色砂礫層 | 35. 黑褐色砂質土層 | 52. 黑褐色砂質土層 | 69. 黑加色砂質土層 | 86. 青灰色砂層(黒チヅ泥じり) |
| 2. 壕土(茶褐色砂質土層) | 19. 淡黃褐色砂質層 | 36. 淡青色砂質土層 | 53. 淡灰褐色砂質土層 | 70. 青灰色砂層 | 87. 黑色粘質土層(黒培チヅ泥じり) |
| 3. 白褐色砂質土層(茶褐色鉄分凝じり) | 20. 黑灰色砂質土層 | 37. 淡青色砂質土層 | 54. 从灰色砂質土層(小石混じり) | 71. 淡灰黑色砂質土層 | 88. 灰黑色砂質土層(粒子細い砂混じり) |
| 4. 深黃褐色砂層 | 21. 灰色粘質土層 | 38. 深褐色砂質土層 | 55. 雲褐色粘土層 | 72. 青黑色砂質土層 | 89. 青灰色粘土層 |
| 5. 青白色粘質土層 | 22. 灰色砂質土層 | 39. 淡白色砂質土層(粒子細かい) | 56. 明青色砂質土層(砂粒極密) | 73. 白黄色砂質土層(粒子粗い) | 90. 暗青色砂質土層 |
| 6. 灰色砂質土層 | 23. 白黃褐色砂質土層 | 40. 青灰色粘質土層 | 57. 淡青色砂質土層 | 74. 黑褐色砂質土層 | 91. 灰黃色砂質土層(小石多し) |
| 7. 灰綠色粘質土層 | 24. 灰茶褐色砂質土層 | 41. 淡灰茶色粘質土層 | 58. 淡青色砂質土層(白色砂混じり) | 75. 黑灰色粘質土層 | 92. 黑色粘質土層(ブロック状灰色砂層・小石混じり) |
| 8. 淡灰色砂層 | 25. 淡青色粘質土層 | 42. 淡褐色砂層 | 59. 淡黑色粘質土層 | 76. 白灰色砂層 | 93. 白灰色砂層(粘土混じり) |
| 9. 淡灰色砂層(砂粒大) | 26. 灰褐色砂質土層(小石混じり) | 43. 淡灰褐色砂層 | 60. 白灰色砂質土層 | 77. 黑色粘質土層(じりり泥じり) | 94. 灰黑色粘土層 |
| 10. 黑色粘質土層(幼牛糞含む) | 27. 灰褐色砂質土層 | 44. 淡灰褐色砂質土層 | 61. 黑灰褐色砂質土層 | 78. 黑褐色砂層(黒チヅ泥じり) | 95. 黑黑色粘土層 |
| 11. 青灰色粘質土層 | 28. 淡灰綠色砂質土層 | 45. 青灰色粘質土層 | 62. 黑黑色粘質土層 | 79. 暗黃褐色砂質土層(粘土混じり) | 96. 淡黃灰色砂層 |
| 12. 黑灰褐色砂質土層 | 29. 淡灰褐色砂質土層 | 46. 黃褐色砂層 | 63. 黑褐色砂質土層 | 80. 黑黑褐色粘質土層 | 97. 青黑色粘土層(砂凝じり) |
| 13. 淡黃褐色土層 | 30. 黃褐色砂質土層 | 47. 暗黃褐色砂質土層 | 64. 暗黑色砂質土層 | 81. 黑灰褐色粘土層(砂利混じり) | |
| 14. 淡茶褐色砂質土層 | 31. 黑黃褐色砂質土層 | 48. 成熟褐色砂質土層 | 65. 暗青色砂質土層 | 82. 暗灰色砂層 | |
| 15. 黑褐色砂質土層 | 32. 淡黃褐色砂質土層 | 49. 淡青色砂質土層 | 66. 暗青色砂質土層 | 83. 暗褐色砂質土層 | |
| 16. 宋褐色砂層 | 33. 淡灰茶褐色砂質土層(小石含む) | 50. 黑灰色砂質土層 | 67. 黑黃褐色砂層 | 84. 青褐色灰砂質土層(粒子細い小石混じり) | |
| 17. 黃白色砂層 | 34. 灰褐色砂質土層 | 51. 淡灰褐色砂質土層 | 68. 黑深灰褐色土層 | 85. 黑褐色砂質土層(木片多量に含む) | |

挿図4 第1期調査区断面図

掘り込んで遺構が検出されている。したがって第Ⅶ層が弥生時代前期末から中期中葉の遺構面と想定される。さらに下層の第Ⅷ層・第Ⅸ層には調査地全域において弥生時代前期中葉から前期末にわたる遺物が多量に包含されており、第Ⅸ層を掘り込んで遺構が検出されているため、第Ⅹ層が弥生時代前期中葉から前期末の遺構面と想定される。このように、本遺跡においては、弥生時代の2時期の遺構が検出されている。

弥生時代前期中葉から末の遺構は、約T.P. 3.1 mに、前期末から中期中葉の遺構は、約T.P. 3.2 mにそれぞれ位置している

b) 遺構

今回の調査で検出した主な遺構には、溝・落ち込み・自然河川・土壙・貯藏穴・柱穴等であり、それらはその遺構内より出土する土器等によって大きく弥生時代前期中葉から末の時期と前期末から中期中葉の時期の2時期に区分することができる

1) 弥生時代前期中葉から前期末の時期

ア) 溝

調査地の全域に複雑に交錯して検出している。溝は、北東から南西方向への流れを示している。

溝101

B-4区から西北方向にF-8区まで調査区を横ぎるように約70m検出した幅2~3m、深さ0.2~0.5mを測り、断面U字形の溝である。

調査区の北域では河川2を切り、中央部では溝102と重複し、西北端では溝240に北岸を切られ、落ち込み206に南岸を切られている。

溝102

調査区のほぼ中央部のE-6、D-8区で検出している。他の溝との切り合い、重複が複雑であるため正確な規模等は不明である。遺物についても、層位ごとに取り上げているが、遺構としては一括で取り扱っている。この溝の遺物も木製品が多く出土しており、西に隣接する溝240の掘り込み部分との関連を今後十分に検討する必要がある。

溝238

E-3~7、F-7区で検出した幅1.8~4m、深さ0.3~0.5mを測り、断面U字形の溝である。E-3区からE-6区までは南北に直線的に掘られ、E-6区で大きく西北方向へ曲がり調査区外へ延びる。溝内の堆積は下層より灰黒色粘質土層（木片多量に含む）・青黒色砂質土層・灰黒色砂質上層となっている。遺物は、多くの土器・石器・木器等が出土している。特に、F-7区の溝下層からは、口頸部間にヘラ状工具で押えて形成した段をもつ壺(1)が出土している。またE-3区の明黒灰色粘質上層内からは、着柄孔の左右に1辺約3.5cmの三角形の孔をそれぞれ穿った鍼が出土している。

溝239

F-7・8区で検出した幅1.2～1.6m、深さ約0.2mを測り、断面U字形の溝である。

E-6・7区及び第1期調査の排水溝によって切断されているが、後述の溝260からつづく溝であると考えられる。溝内の堆積は、下層より灰黒色粘質土層（木片多量に含む）・青黒色砂質土層・青灰色砂層となっている。遺物は多くの土器・石器・木器等が出土している。溝240

E-7・8、F-8区で検出した幅2～4.5m、深さ約0.5mを測り、断面U字形の溝である。溝端は、西の調査区外へ延びる。溝内の堆積は、下層から白灰色砂層（砂まじり）・灰黒色粘土層・黒色粘質土層（ブロック状灰色砂層・小石混り）・灰黒色粘質土層（木片多量に含む）となっている。特にE-7・8区では、溝底が約50cmほど深く掘り込まれ、その規模は約10mを測る。この掘り込み内からは、土器とともに鍔をはじめとする農具・弓・石斧の柄等多くの木製品及びその未製品が出土している。これは、その出土状況から、ここに木材を貯木していたものと考えられる。出土土器は、畿内第1様式中段階から新段階のものである。

溝260

E-4～6区で検出した幅1.0～1.2m、深さ約0.4mを測り、断面U字形の溝である。

E-6区においては溝238により切られているが、先述の溝239に続くものと思われる。北端は、調査区外へ延び傾斜は北から南への方向を示している。E-3区において長さ130cm、幅30cm、厚10cmの木製品（鍔）の粗加工材を出土している。その他、遺物は土器・石器が出土している。

イ) 落ち込み

調査地の全域で大小の落ち込みを検出している。落ち込みの遺構内からは、多くの遺物を出土している。

落ち込み214（下層）

C-3～5、D-3～5区で検出している東西6m×南北17m、深さ約0.6mを測る楕円形の遺構である。遺構内の堆積は、灰黒色砂層となっている。遺物は、非常に多く畿内第1様式中段階から新段階の土器及び、用途不明の石斧の柄状木製品（図版64）をはじめとする木製品類・石器類等を出土している。

ウ) 貯蔵穴

D-3区とE-5区でそれぞれ2基の貯蔵穴を検出した。D-3区で検出した貯蔵穴は、直徑約90cm、深さ約50cmを測る円形のものである。その中からコンテナバット10箱分の多量のドングリが出土した。出土した種実は、ぐぬぎが大部分を占めている。貯蔵穴の底部には、カゴ状の編物が敷かれてあった。（図版30）

E-5区で検出した貯蔵穴は、直徑約120cm、深さ約50cmを測る円形のものである。この貯蔵穴からは、少量のドングリの出土があった。この貯蔵穴は、簡単な素掘りの土括状のも

ので、内部にはD-3区で検出したような編物は見い出せなかった。

区で検出した底に編物をもつ貯蔵穴は、切り取り保存処理を実施した。

溝には、溝238に代表されるように多量の土器の堆積のあるものと、まっ

なお、D-3区で検出した底に編物をもつ貯蔵穴は、切り取り保存処理を実施した。

2) 弥生時代前期末から中期中葉の時期

ア) 溝

調査地の全域に複数に交錯して検出している。流路の方向は、下層の遺構と同様に北東から南西方向を示している。

溝には、溝238に代表されるように多量の土器の堆積のあるものと、まったく遺物を出土しないものがあり、下層の溝に比べると規模は小さくなっている。

イ) 落ち込み

調査地の全域で大小の落ち込みを検出している。落ち込みの遺構内からは、多くの土器・石器・木器等の遺物を出土している。

落ち込み 214

C-3～5、D-4、5区で検出している。東西1～6m×南北18m、深さ約0.7mを測る楕円形の遺構であり、北から南西方向にやや広がりをもっている。遺構内の堆積は下層より、灰黒色粘質土層（木片多量に含む）・青黒色砂質土層・明黄灰色砂質土層・黒色粘質土層（上層）、黒灰色粘質土層となっている。遺物は、木製品及びその未製品、自然木等が多量に出土しており、共伴する遺物は、畿内第I様式新段階から第II様式の土器類である。

落ち込み 216

D-6～8区で検出した東西5m×南北17m、深さ約0.5mを測る。やはり楕円形の遺構である。遺構内の堆積は下層より、白灰色砂層・白灰色砂層（粘土混り）・暗黃灰色砂質土層（粘土混り）・灰黒色粘質土層（木片多量に含む）となっている。

この落ち込みも先の落ち込み214と同様弓をはじめとする多くの木製品・未製品・自然木等を出土しており、両端に水かきのある櫛（図版37）、鋤（図版40）もこの落ち込み内から出土している。土器類は、畿内第I様式新段階から第II様式のものが同時に出土している。



插図5 D-3 区出土縄織物実測図

IV 出土遺物

今回の調査において出土した遺物の数量は、コンテナパット約2,000箱を優に越えるものであり、その大半が未整理であるため全てを報告するにはまだまだ相当な時間を要するものと推察されるので、今回はそのごく一部について報告する。

出土した遺物を時代別にみると、弥生時代前期（畿内第Ⅰ様式）と弥生時代中期（特に畿内第Ⅱ様式）がその大半を占め、弥生時代中期以降は少なく、古墳時代以降の遺物については、その数はきわめて減少する。土器以外では、石庖丁・石鎧等の石器類、鐵・鍛等の木器類、その他ドングリ等の自然遺物と多種多様の遺物が出土している。

1. 土器

弥生時代の土器のうち、畿内第Ⅰ様式古段階から第Ⅲ様式まで揃っており、その中心は第Ⅰ様式中段階から第Ⅱ様式のものである。

古墳時代以降中世までの遺物は、極少量の須恵器片・土師器片・瓦器片等が出土しているにすぎない。

器種としては、壺・無頸壺・甌・鉢・高杯・蓋形土器・その他の土器が出土している。

a) 蓋形土器（図版1・2・4・41・42・43・45-1~12・15・16・18~20）

段をもつもの、削出凸帯、貼付凸帯をもつもの、籠描沈線文・赤彩文を施すもの、無文のものが出土している。

(1~3)は、口頸部間に段をもち、外面はヨコヘラミガキ、内面は口縁部ヨコヘラミガキ、頸部ナデ調整を施している。(1)の復元口径16.8cm、(2)の復元口径15.1cm、(3)の復元口径12cmをそれぞれ測る。(4)は、口縁部は欠損し不明であるが、底径5.0cm、最大腹径11.7cm、残存高12.1cmを測る小形のものである。口頸間と頸胴間に1条と3条の籠描沈線文を施す。外面はヨコヘラミガキ、内面は口縁部ヨコヘラミガキ、頸部・胴部はナデ調整を施し、底部外面と頸部に部分的に指頭圧痕が残っている。(5)は、口縁部は欠損しているが、底径5.3cm、最大腹径9.7cm、残存高11.4cmを測る小形のものである。外面内面ともナデ調整を施し、内面頸部に指頭圧痕が残っている。(6)は、頸胴間に2条の籠描沈線文を施し、外面はヨコヘラミガキ、内面口縁部はヨコヘラミガキ、頸部・胴部はナデ調整を施している。復元口径7.1cm、最大腹径8.2cm、底径4.8cm、器高8.3cmを測る小形のものである。口縁部内面に煤の付着が認められる。(7)は、器高6.7cm、口径6.0cm、底径4.0cm、最大腹径7.8cmを測る小形のものである。口頸間と頸胴間に1条と2条の籠描沈線文を施す。外面は口縁部指押えの後ナデ、頸部はヨコヘラミガキ、胴部はナナメ方向のヘラミガキ、内面はナデ調整を施し、粘土帶接合部が明確に認められ、部分的に指頭圧痕が残っている。胴部には黒斑がみられる。(8)は、口縁部欠損、頸部・胴部の半分と底部が剥離のため法量は復元最大腹径6.6cm以外は不明であるが小形のものである。外面は頸部はヨコヘラミガキ、胴部はナデ調整を施している。底部に

直徑 3 mm の穿孔がある。(9)は、口縁部は欠損しているが、底径 5.2 cm、復元最大腹径 10.5 cm を測る小形のものである。頸胴間に 2 条の籠描沈線文を施し、外面は胴部下半以外はヘラミガキ、胴部下半はナデ、内面はナデと一部ヘラミガキを施しており、部分的に未調整のところもある。底部外面に指頭圧痕がみられる。即は、口径 6.3 cm、最大腹径 8 cm、底径 5.3 cm を測る小形のものである。頸部に 2 条の刻目のある貼付突帯を有している。外面は器壁の荒れのため明確な調整は不明であるが、ナデ調整が口縁外面で認められる。内面頸部は指頭圧痕が残り、胴部は一部ヘラ削りがなされている。即は復元口径 5 cm、最大腹径 5.8 cm、器高 7.7 cm、底径 3.6 cm を測る小形のものである。頸部に 1 条の刻目のある貼付突帯がめぐっている。口縁部に 1 ケ所の穿孔を有する。(相対する位置の穿孔の有無は口縁部欠損のため不明)。外面はナデ調整を施し、部分的に指頭圧痕が残る。内面はヨコナデ調整。即は、口径 14.1 cm、残存高 13.2 cm を測る。口縁端部の一部に刻目を有し、頸部には 5 列に刺突文がめぐらされている。外面は、ヨコヘラナデの後ナナメヘラナデ調整、内面は、口縁部ヨコナデ、他はナデ調整を施している。即は、太く長い頸部に短く外反する口縁部を有し、口径 15.6 cm、最大腹径 14.0 cm、器高 27.2 cm、底径 6.8 cm を測る。頸部から胴部にかけて 9 条の横描直線文を 2 帯、9 条の波状文を 1 帯、9 条の直線文を 3 帯、8 条(部分的に 9 条)の波状文を 1 帯施している。外面は、口縁部と帶間及び胴部上方にヨコヘラミガキ、胴部下半はナナメ方向のヘラミガキを施し、帶間には少々ナデ調整も施し、底部外面には指頭圧痕も残っている。内面は、口縁部と胴部下半はヨコヘラミガキ、頸部はタテヘラミガキ、他はナデ調整を施し、指頭圧痕も残っている。内面では粘土接合部が明確に認められる。即は、太く長い頸部に短く外反する口縁部を有し、口径 18.7 cm、残存高 22.9 cm を測る。頸部に 8 条の横描直線文を 8 帯施す。頸胴間に 7 条(部分的に 8 条)の相対する横描弧文を施し、口縁部に 2 つの刺突文を施している。外面は、口縁部ヨコヘラミガキ、頸部は器壁の荒れのため調整不明、胴部はナナメのヘラミガキを施している。内面は、器壁が荒れて調整は不明瞭であるが、口縁部はヨコヘラミガキ、頸部はタテヘラ調整を施している。即は、口縁部欠損しているが、最大腹径 5.6 cm、底径 3.2 cm を測る小形のものである。口頸間と頸胴間に、3 条と 2 条の籠描沈線文をそれぞれ施している。外面は、ヨコヘラミガキ、底部外面には指頭圧痕がみられ、内面はナデ調整を施している。即は口縁部欠損しているが、最大腹径 4.6 cm、底径 3.6 cm を測る小形の手づくねである。調整は器壁の荒れが著しいため不明である。即は、口縁部及び底部の一部が欠損しており、器壁の荒れも著しいため法量は不明であるが、残存最大腹径 5.2 cm を測る小形の手づくねである。調整は不明であるが、内外面ともに指頭圧痕が認められ、内面頸部にはしばり目痕が残されている。脚部中位に相対する位置に 2 孔 1 対の紐孔を焼成前に穿っている。

b)無頸壺形土器 (図版 1・42-13・14・17)

即は、内側する口縁部を有し口縁端部は丸みをもち、体部は球形に近い形状を呈し、相対

する位置に2孔1対の紐孔を有し、口径8.7cm、器高11.7cmを測る。器壁外面は大部分が表面剥離して調整は不明であるが、残存する口縁部付近の部分ではヨコヘラミガキ、内面はヘラミガキを施している。図は、内側する口縁部を有し口縁端部は丸みをもち、体部は球形に近い形を呈し、口径8.7cm、器高11.7cmを測り相対する位置に2孔1対の紐孔を有しているが、その内1孔は未貫通である。土器は、2次的に火にあたっており、外面器壁は荒れて調整は不明であるが、内面はヨコナデ調整を施している。即は、口縁部はわずかに内側し、端部は短く立ち上がり、体部が張る形状を呈し、口径8.4cm、最大腹径19.3cm、器高20.8cm、底径5.4cmを測る。口縁部から胴部にかけて7条（部分的に5～6条）の描描直線文12帶を施し、直線文帶のそれぞれの間に半截竹管による直線文を付加している。作りも丁寧で器壁も薄く外面全体及び内面口縁部に黒色物質の塗布がみられ、特に胴部下半には顕著に認められる。外面は、横方向の刷毛目その後、ナナメ方向の刷毛目調整を施しており、内面は口縁部及び頸部はナデ、底部付近はヘラミガキ、胴部はヘラナデ調整を施している。

(c)瓶形土器（図版2・43～22～27）

図は復元口径25.2cm、器高25.6cm、底径8.2cmを測る。口縁端部に刻目、頸部に4条（部分的に5条）の籠描沈線文を施す。外面はタテ刷毛目、内面は口縁部はヨコ刷毛目、頸部・胴部は乱方向の刷毛目、底部はヨコ刷毛目の調整をそれぞれ施す。

外面の胴部中央から口縁部に至るまで煤が付着している。図は口径21.2cm、器高24.2cm、底径7.7cmを測る。口縁端部に刻目、頸部に3条の籠描沈線文を施す。外面胴部下半は表面剥離のため調整は不明であるが、他はヘラナデの後、ナナメの刷毛目、頸部はタテ刷毛目、内面口縁部ヨコ刷毛目、頸部、胴部はナデとタテ刷毛目調整を施している。外面胴部上半から口縁部と、内面口縁部、頸部に一部煤の付着がみられる。図は、復元口径23.5cm、器高17.9cm、底径7.8cmを測る。外面は、頸部は指押えの後ヨコナデ、胴部下半は表面剥離のため調整は不明であるが、上半はナナメ方向の刷毛目調整、内面はナデで一部刷毛目調整が施されている。胴部上半に煤の付着がみとめられる。図は、口径18.2cm、器高18.1cm、底径7cmを測り、口縁端部に刻目、頸部に3条の籠描沈線文を施す。外面はタテヘラミガキ、一部荒いタテ刷毛目調整が施され、内面は口縁部は細かい刷毛目、他はナデ調整を施している。外面全体に煤の付着がある。図は、口径17.2cm、器高19.3cm、底径5.3cmを測る。外面は、磨滅及び表面剥離のため調整は不明であるが、一部タテ方向の刷毛目調整が施されているのが認められる。内面も器壁の荒れが著しく、タテ方向の刷毛目とナデ調整が一部みられる程度である。外面口縁部から胴部上半にかけて煤の付着が認められる。図は、口径21.5cm、器高24.2cm、底径6.2cmを測り、底部中央に直径14～8mmの穿孔がある。孔は、焼成後に外と内から穿っている。外面はタテ及びナナメヘラミガキ、口縁部はヨコナデ調整を施している。内面は、口縁部は指押えの後ヨコナデ、他はタテヘラミガキ調整を施している。外面頸部に煤の付着が認められる。

(d)鉢形土器（図版2・3・4・6・44・45-28~34・39）

図は、口径22.8 cm、器高15.4 cm、底径6.8 cmを測り、体部に12条の櫛描直線文を3帯施している。やや斜め上方へ伸びる口縁部を有し、口縁端部は平坦に面をもつ。体部はなだらかな曲線を描き裾すぼまりの形状を呈している。内外面ともにタテ及びヨコヘラミガキを施し、丁寧なつくりである。図は、台付鉢形土器である。口径13.0 cm、器高14.2 cm、底径6.0 cmを測り、7条（部分的に8条）の櫛描直線文を3帯施している。わずかに内彎する口縁部を有し、口縁端部は丸みをもっている。体部は丸みをもっている。短い中実の脚柱に、やや裾広がりの脚台がつき、脚台端部は丸みをもっている。体部外面はヨコヘラミガキ、脚部は指押えの後ナデ調整を施している。内面は、器壁が荒れていて明確ではないが、口縁部は刷毛目、他は指頃圧痕が認められる。図は、口径16.0 cm、器高11.5 cm、底径8.1 cmを測り、頸部で屈曲して外方へ開く口縁部を有し、口縁端部は面をなしている。外面は、頸部は指押え、体部はタテヘラミガキとヘラとナデと細かな刷毛目調整を施している。内面は、口縁部はヨコナデ、他はヘラナデを施している。体部上半から口縁部にかけて黒斑あり。図は、復元口径14.2 cm、器高9.3 cm、底径4.6 cmを測る小形のものである。体部は、底部から直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部に至っている。内外面とも器壁の荒れが著しく、調整は不明であるが、底部内面に刷毛目調整の痕跡が認められる。外面に煤の付着がみられる。図は、口径11.5 cm、器高8.2 cm、底径5.2 cmを測る小形のものである。頸部で屈曲して外方へ開く口縁部を有し、口縁端部は面をなしている。外面は口縁部及び頸部は指押えの後ヨコナデ、体部はタテ及びナメの刷毛目調整を施している。内面は、ヨコナデ調整を施している。外面口縁部から底部にかけて黒斑あり。図は、口径10.0 cm、器高6.8 cm、底径5.5 cmを測る小形のものである。頸部で屈曲して外方へ開く口縁部（一部立ち上がるところもある）を有し、口縁端部は丸みをもっている。外面はヨコナデ、内面は口縁部ヨコナデ、他はタテ方向のヘラナデ調整を施し、底部は未調整。図は、復元口径7.9 cm、器高3.9 cm、底径5.5 cmを測る小形のもので、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部に至っている。口縁端部は面をなしている。外面はタテ方向のヘラナデ、内面はヨコナデ調整を施し、粘土縫接合部が明確に認められる。

(e)高杯形土器（図版2・3・44・45・46-35~38）

図は、口縁部が欠損しているが、半球状の杯部をもつ。中空の短い脚柱で、脚柱から脚台にかけてなだらかな曲線を描く裾広がりの脚台部を有し、脚台端部は丸みをもっている。外面は、杯部はヨコヘラミガキ、脚部はタテヘラミガキ調整を施す。杯部内面はヨコヘラミガキを施しており、脚部内面磨滅のため調整不明である。杯部内面上方に黒斑あり。図は、杯部は欠損しており、中実の脚柱で、裾広がりの脚台部を有し、脚台端部は面をもちあがる。脚柱表面は、剥離のため調整不明であるが、わずかに刷毛目の痕跡が認められる。脚台端部はヨコナデを施している。脚台内面には、荒いヘラミガキが施されている。脚台端部外

面に煤の付着が認められる。側は、杯部は欠損しているが、中空の脚柱を有し、裾広がりの脚部は端部に面をなし下方へわずかに肥厚する。脚台部裾に2条の沈線文の痕跡が残っている。外面は、磨滅のため調整不明であるが、脚台端部はヘラ調整を施している。内面はヨコナデ調整を施し、しづり日の痕跡が認められる。(38)は、杯部欠損しているが、残存高3.6cm、脚台部径3.7cmを測るミニチュア土器である。中実の脚柱で裾広がりの脚台部を有している。内外面とも磨滅により調整不明であるが、指頭圧痕が多く認められる。

(イ)ミニチュア土器(図版2・3・4・45-39~53・94)

鉢形、台付鉢形、カップ形、壺形、鼓形、筒状等のミニチュア土器が出土している

(ア)鉢形土器(44~48)

側は、口径4.1cm、器高2.2cm、底径3.1cmを測る。外面指押えの後ヨコナデ、内面ナデ調整を施す。側は、口径4.8cm、器高2.7cm、底径3.0cmを測る。外面は磨滅のため調整不明、内面はナデ調整を施す。(46)は、復元口径5.2cm、器高3.2cm、底径3.2cmを測る。外面は一部ヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。側は、体部が欠損しており、底径3.3cm、残存高3.4cmを測る。内面はナデ調整を施している。外面は磨滅のため調整不明。側は、底部のみ残存しており、底径2.8cmを測る。底部外面に指頭圧痕が残っている。側は、底部、脚台部と体部の一部のみ残存しており、底径3.0cm、残存高2.2cmを測る。底部付近に3条の籠描沈線文を施し、脚部中位に焼成前に1孔1対の紐孔を穿っている。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整を施している。側は、口径7.0cm、器高4.2cm、底径4.2cmを測る。やや外彎する口縁部を有し、口縁端部は丸みをもっている。内外面ともナデ調整を施している。内面にはベンガラの付着が認められる。

(ウ)台付鉢形土器(39・42・52)

側は、鉢部欠損しており、復元底径4.0cm、残存高4.8cmを測る。短い中実の脚柱で、裾広がりで水平に伸びる脚台部を有している。側は、口径6.8cm、器高4.5cm、底径4.3cmを測る。口縁部は斜め外方に伸び、短い脚台部を有している。内外面ともナデ調整を施す。側は、鉢部は欠損しているが、脚裾径3.2cm、残存高4.6cmを測る。中実の脚部を有している。外面はタテヘラミガキを施し、内面はナデ調整を施した丁寧なつくりである。

(エ)カップ形土器(40・41・43・50)

側は、やや内彎する口縁部を有し、復元口径6.8cm、器高6.8cm、底径4.2cmを測る。内外面全体に指頭圧痕が残り、その後ナデ調整を施している。底部外面にヘラの角による傷跡がみられる。側は、底部と体部の一部のみ残存しており、底径3.2cmを測る。外面はタテヘラミガキ、内面はナデ調整を施している。(43)は、口径7.9cm、器高6.1cm、底径5.3cmを測る。やや内彎する口縁部を有し、体部は斜外方に伸び、口縁端部は丸みをもっている。外面はタテのヘラナデの後、ナデ、内面は体部下半はヨコ方向の刷毛目、上半から口縁部までヨコナデ調整を施している。体部外面に黒斑が残っている。側は、体部欠損し

ているが、底径 3.4 cm、残存高 3.2 cm を測る。内外面にわずかにナデ調整が残っている。

△壺形土器 (53)

これは、底部と体部の一部のみ残存、底部は 5 角形を呈し最大底径 3.0 cm を測る。外面はヘラ状工具で成形し、内面はナデ調整を施す。

△鼓形土器 (54)

これは、口径 5.3 cm、脚幅径 5.7 cm、器高 4.0 cm を測る。口縁部は頸部から斜外方に伸び、脚部は斜めに開く、口縁端部及び脚幅端部は丸みをもつ。口縁上位に焼成前に 2 孔を穿っている。外面は全面に指頭圧痕が残り、内面はナデ調整を施している。

△筒形土器 (51)

上部欠損のため全体の形状は不明であるが、底径 3.2 cm、残存高 5.5 cm を測る。残存部の上位に 2 条の篦描沈線文を施し、外面は磨滅のため調整は不明であるが、指頭圧痕が部分的に認められ、内面はしばり目も残っている。

g) 蓋形土器

蓋形土器としては、甕用と壺用の 2 種類が出土している。

△甕用蓋形土器 (図版 3・46-61~63)

笠形を呈しており、これは、表面に縱方向のあらい刷毛目調整を施してある。(61・62) は、つまみ付近に刷毛目が残っている。3 点とも蓋の内面外周にふきこぼれが炭化した付着がみられ、内側は 2 ~ 3 cm の幅でめぐっている。

△壺用蓋形土器 (図版 5・6・45・47・48-64~93)

その形状により 5 種類のものが出土している。ほとんどの蓋は、篦磨きを施していないなつくりである。

i) 筒形でつまみが突出するもの (64~67・72)

(64・67) は、突起の横に 1 孔 (65・66) は、相対する二方に 1 対の 2 孔、72 は、中心に 1 孔の紐孔をそれぞれ有する。

ii) 筒形で中凹み環口状のつまみをもつもの (68~71・93)

(68~71) は、中心に 1 孔の紐孔を有しており、図の孔数は不明である。

73 は、つまみから四方向に篦描で 3 本と 4 本 1 組の長線と外側長線に直角にそれぞれ 11~15 本の短線を描いている。

74 は、周縁とつまみの間に 2 段に連続した小突起をめぐらせてている。すべて中心に 1 孔の紐孔を有する。

iii) 筒形でつまみが突起状に二つにわかれたもの (73~76・191)

(73~76) は、二つにわかれた突起の中心に 1 孔の紐孔を有している。(191) は、二つにわかれた突起状のつまみに刻目、体部には流水文を施し、紐孔は周縁に 2 孔穿っている。

iv 立形のもの (77~85・89・90・92)

(77~83・85) は、その中心に 1 孔の紐孔を有している。(82・83) には、その表面に木葉文が施されている。即は、紐孔が無いが周縁に 1 孔あるいは 2 孔を有するものである。(90・92) は、周縁に 1 孔の紐孔を有している。即の表面には 2 列に赤彩鋸歯文が施されており、外側の鋸歯文は内側を向き、内側の鋸歯文は外側を向いている。即は、全体の 1/6 程度の破片であるため、紐孔は周縁に 1 孔が相対する二方に 1 孔 1 対を有するかは不明である。

v 円板状のもの (87・88・91)

即は、蓋全体の 1/6 程度の破片であるため不明である。即は、周縁に 2 孔、即は、中心に 1 孔の紐孔を有している。

vi 不明のもの (93)

つまみのみの出土であり、形状は不明である。

2. 土製品

今回出土した土製品には、紡錘車、土製円板、杓子形土製品、投弾、土壺形土製品がある。

a) 紡錘車 (図版 7・46・49~95~105)

紡錘車は、円板の中心に 1 孔を穿つもので紡錘車として焼成前に成形したもの (55・56・98~101・103~105) と、土器片を再加工したもの (97・102) がある。

紡錘車として焼成前に成形されたものは直径 3.4 ~ 5.0 cm・厚さ 1.1 ~ 1.8 mm と全体的にやや原味があり重さは 3.8 ~ 37.3 g である。いずれも径 6 mm 前後の 1 孔を穿っており丁寧なつくりである。

(101) は、孔の周辺が一段高く盛り上がっている。即は、周縁に粗跡が残っている。

(102) は、半分欠損しているけれども独楽状を呈している。

土器片を再加工した即は、周縁を打ち欠いた後丁寧に磨いている。孔は表と裏から穿孔している。(102) の周縁は打ち欠いたままで、一部磨かれている。孔は表と裏から穿っている。重さは、即が 20.7 g、(102) が 10.5 g (現存重量) である。

b) 土製円板 (図版 8・50・51~106~120)

土製円板は、土器片の周縁を円形になるように適当な大きさに打ち欠いたものであり、土器片を再加工したものである。用途については、紡錘車をつくる途中の段階のものなのか、あるいは別の目的をもってつくられたかは不明のものである。

大きさは直径 6.2 ~ 2.1 cm・厚さ 0.5 ~ 1 cm で重さも 8.8 ~ 37.3 g と多種多様である。周縁を打ち欠いた後一部あるいは全体を丁寧に研磨しているもの (106・107・110・114・115・118) とそのままにしているもの (108・109・111~113・116・117・119・120) がある。多くは壺の体部破片を再加工したものを使用している。壺の体部破片を再加工しているものには媒の付着が認められる。

c)杓子形土製品（図版4・46—55）

球形の杓部に中実の柄が着くものである。柄は接合部付近で欠損している。全体に磨滅が着しく調整は不明であるが、丁寧なつくりである。用途については不明である。

d)投弾（図版4・45—56・57）

土製のものが2点出土している。形態は2点ともフットボール状の楕円球を呈しており、それぞれ外面調整は磨滅により不明であるが、中央部に楕円形の凹みが認められる。56は、長径5.5cm、短径2.4cm、中径2.9cm、重さ32g、57は、長径4.6cm、短径2.6cm、中径3.0cm、重さ328gを測る。

e)不明土製品（図版4・46—59）

高さ4.9cm、直径2.7cm、重さ30gを測る円柱形のもので、上面から直径1.5～0.7cm、深さ1.5cmの円孔状のものを穿っているが貫通しておらず約半は中実である。

3. 石 器

今回出土した石器類は、石鎌、石錐、石庖丁、大型石庖丁、石剣、石槍、石斧、たたき石、砥石、石小刀、投弾等がある。多くは、遺物包含層からの出土である。

a)石庖丁（図版9・15～52～60～121～155）

石庖丁は、長方形、楕円形、杏仁形、直線刃半月形、内轉刃半月形の5種類の形態のものと、大型石庖丁が出土している。

ア長方形形態（121～123）

背部・刃部がほぼ直線であり、両端部に側刃をつくり出したタイプである。

（121）は、全体の1/2程度を欠いている。現存長8.1cm、幅3.6cm、厚さ0.5cmを測る。身幅は狭く、背部はやや彎曲気味である。刃先は刃こぼれが著しい。B面右孔に紐擦れ痕が認められる。石質は、粘板岩である。（122）は、全体の1/2程度を欠いている。現存長7.9cm、幅5.2cm、厚さ0.7cmを測る。刃部・背部とともにやや彎曲気味である。A面・B面ともよく研磨されている。両面に未貫通の穿孔痕があり、B面右孔に紐擦れ痕が認められる。石質は、粘板岩である。（123）は、全体の1/2程度を欠く。現存長9.7cm、幅4.7cm、厚さ0.8cmを測る。刃部はやや彎曲気味である。両面には、研磨のおよばない剥離面が残されており、刃部は研ぎ直しがみられ、刃先の一部に刃こぼれが認められる。石質は頁岩である。

イ楕円形態（124～127）

背部・刃部が浅く外轉し、端部が丸味をもつタイプである。

（124）は、両端を欠いているが、現存長9.3cm、幅4.4cm、厚さ0.7cmを測る。刃部・背部とともにやや彎曲気味で、刃面には研ぎ直しがみられ、刃先に刃こぼれが認められる。石質は、泥岩である。（125）は、全体の1/2程度を欠いているが、現存長7.4cm、幅4.3

cm、厚さ 0.7 cm を測る。刃部は彎曲気味である。火にあたっているため調整等は不明である。石質は泥岩である。（126）は全体の $\frac{1}{2}$ 程度しか残存していない。現存長 5.6 cm、幅 4.0 cm、厚さ 0.7 cm を測る。背部は彎曲気味である。刃部に左右の研磨がみられる。石質は、緑泥片岩である。（127）は両端を欠いている。現存長 8.6 cm、幅 4.9 cm、厚さ 0.7 cm を測る。B面は全体に磨滅しており、左 2ヶ所の穿孔に紐擦れ痕が認められる。刃部は研ぎ直しがみられる。4ヶ所の穿孔がある。石質は、粘板岩である。

ウ杏仁形態（128～136）

背部・刃部が同じくくらいに外彎し、端部の尖るタイプである。

（128）は、両端をやや欠いている。現存長 9.4 cm、幅 4.1 cm、厚さ 0.6 cm を測る。身幅は狭く、刃部は直刃に近い外彎刃で、刃部に研ぎ直しがみられる。紐孔は背寄りにある。石質は、緑泥片岩である。（129）は、 $\frac{1}{2}$ 程度を欠いている。現存長 10.5 cm、幅 4.7 cm、厚さ 0.7 cm を測る。身幅は広く、浅い外彎刃で紐孔は背寄りにある。A面左紐孔の右に未貫通の穿孔痕がある。両面ともかなり磨滅しており、刃先の一部に刃こぼれがある。石質は、緑泥片岩である。（130）は、全体の $\frac{1}{2}$ 程度を欠いている。現存長 9.2 cm、幅 4.2 cm、厚さ 0.7 cm を測る。刃先から B面にかけての磨滅がみられる。石質は、粘板岩である。

（131）は、全体の $\frac{1}{2}$ 程度を欠いている。現存長 8.2 cm、幅 5.3 cm、厚さ 0.8 cm を測る身幅の広いものである。両面とも研磨のおよばない剥離面があり、刃先から B面にかけて磨滅が認められる。B面右紐孔の上に未貫通の穿孔がある。石質は、緑泥片岩である。

（132）は、全体の $\frac{1}{2}$ 程度を欠いている。現存長 9.4 cm、幅 5.6 cm、厚さ 0.7 cm を測る身幅の広いものである。両面とも研磨のおよばない剥離面があり、刃先から B面にかけて磨滅がみられる。2孔は背部寄りにみられる。B面右紐孔に紐擦れの痕が認められる。石質は、泥岩である。（133）は、両端を欠いている。現存長 10.4 cm、幅 4.7 cm、厚さ 0.9 cm を測る。両面とも乱方向の研磨があり、刃部に研ぎ直しがみとめられる。背部には、背潰れ痕がある。石質は、粘板岩である。（134）は、全体の $\frac{1}{2}$ 程度の残存である。現存長 6.4 cm、幅 3.9 cm、厚さ 0.6 cm を測り、端部は鋭さがなく、端部にいくにつれてうすくなっている。刃部は研ぎ直しがあり、刃先に刃こぼれがみられる。石質は、緑泥片岩である。（135）は、端部を一部欠くがほぼ完形品である。現存長 11.0 cm、幅 5.2 cm、厚さ 1.2 cm を測る。両刃で穿孔はなく、背部と刃部に背潰れ痕があり、特に背部に著しく認められる。石質は、花崗岩質砂岩である。（136）は、全体の $\frac{1}{2}$ 程度を欠いている。現存長 11.9 cm、幅 5.5 cm、厚さ 0.8 cm の身幅の広いものである。両面に磨滅があり、刃先から B面にかけて磨滅が認められる。背部に背潰れ痕、B面右孔に紐擦れ痕がみられる。石質は、泥岩である。

エ直線刃半月形（137～145・148・149）

刃部が直線で、背部が外彎して弧を描くタイプである。

(137) は、全体の $\frac{1}{2}$ 程度を欠いている。現存長 6.4 cm、幅 3.5 cm、厚さ 0.6 cm を測る。刃先から B 面にかけて磨滅がみられ、刃部には刃こぼれ痕がある。石質は、緑泥片岩である。

(138) は、両端を欠いている。現存長 8.0 cm、幅 4.8 cm、厚さ 0.8 cm を測る。両面とも研磨のおよばない剥離面がある。紐孔は背寄りにあり、B 面両孔とともに紐擦れ痕が認められる。刃部の稜線は明確にみられる。石質は、砂岩である。

(139) は、全体の $\frac{1}{2}$ 程度の残存である。現存長 7.3 cm、幅 4.6 cm、厚さ 4.5 cm を測る身幅の広いものである。両面ともに研磨のおよばない剥離面があり、刃先に刃こぼれ痕がみられる。B 面孔に紐擦れ痕が認められる。石質は、緑泥片岩である。

(140) は、全体の $\frac{1}{2}$ 程度を欠いている。現存長 8.0 cm、幅 4.9 cm、厚さ 5.5 cm を測る。両面とも研磨のおよばない剥離面があり、刃部には左右方向のあらい研磨痕がみとめられる。石質は、粘板岩である。

(141) は、全体の $\frac{1}{2}$ 程度を欠いている。現存長 10.1 cm、幅 4.2 cm、厚さ 0.7 cm を測る身幅の狭いものである。刃部に刃こぼれが認められる。両面とも研磨のおよばない剥離面があり、刃部に左右方向のあらい研磨痕がみられる。B 面の孔に紐擦れ痕がある。石質は、粘板岩である。

(142) は、全体の $\frac{1}{2}$ 程度を欠いている。現存長 6.3 cm、幅 4.7 cm、厚さ 0.7 cm を測る身幅の広いものである。両面とも研磨のおよばない剥離面があり、刃先から B 面にかけて磨滅の痕がみられる。刃部に刃こぼれ痕がある。石質は、砂岩である。

(143) は、全体の $\frac{1}{2}$ 程度を欠いている。現存長 8.7 cm、幅 3.65 cm、厚さ 0.95 cm を測る。刃部及び背部とその周辺のみ研磨痕があり、刃先から B 面にかけて磨滅がみられる。

(144) は、端部を一部欠くのみであり、ほぼ完形品である。現存長 14.9 cm、幅 4.1 cm、厚さ 0.9 cm を測る身幅の狭いものである。両面とも研磨のおよばない剥離面があるが、刃部の稜線は明瞭に認められる。火にあたっているため、細かな研磨等は不明である。両面の孔に紐擦れ痕あり。石質は、頁岩である。

(145) は、両端を欠いている。現存長 9.0 cm、幅 5.3 cm、厚さ 0.7 cm を測る身幅の広いものである。刃部には左右方向の研磨痕があり、刃先には刃こぼれ痕がみられる。B 面両孔に紐擦れ痕が認められる。石質は、粘板岩である。

(146) は、ほぼ完形品であり、身幅の狭いものである。長さ 15.4 cm、幅 4.0 cm、厚さ 0.7 cm を測る。両面ともに研磨のおよばない剥離面がある。刃部は研ぎ直しがみられ、刃先は刃こぼれ痕、背部は背こぼれ痕が認められる。A 面左孔の左に未貫通の穿孔痕があり、B 面左孔に紐擦れ痕がみられる。石質は、粘板岩である。

(147) は、両端を欠き中央部分のみの残存である。現存長 4.4 cm、幅 5.1 cm、厚さ 0.9 cm を測る身幅の広いものである。刃先より B 面にかけての磨滅があり、刃先には刃こぼれがみられる。石質は、泥岩のものである。

内彎刃半月形態 (146 • 147)

刃部及び背部が彎曲するタイプである。

(146) は、全体の $\frac{1}{2}$ 程度を欠いている。現存長 8.9 cm、幅 4.2 cm、厚さ 0.6 cm を測る身幅の狭いものである。両面ともに研磨のおよばない剥離面がある。刃先は全て刃こぼれ

がみられ、研ぎ直しによる狭い幅の面がつくられている。B面両孔に縦擦れ痕がみられる。石質は、石英粗面岩である。（147）は、両端を欠いている。現存長9.4cm、幅4.7cm、厚さ0.7cmを測る身幅の広いものである。両面とも磨滅により光沢をもっている。刃部稜線は明確に認められ、刃先には刃こぼれの痕がみられる。B面に未貫通の穿孔痕がある。穿孔は扁平な円形を呈している。石質は、粘板岩である。

かその他（150～152）

（150）は、紐孔周辺のみ残存しているため形態は不明であるが、両面ともに研磨のおよばない剥離面がある。石質は、粘板岩である。（151）は、片刃の石庖丁の再加工品であろうか。体部をすり切りにより切断している。刃部には研ぎ直しがみられ、背部も数回の研磨が行われている。石質は、緑泥片岩である。（152）は、用途不明のものである。A面（図版左側）に未貫通の穿孔痕があり、孔は3ヶ所穿っている。両面ともに研磨は施されていない。石質は、粘板岩である。

か大型石庖丁（153～155）

（153）は、現存長12.8cm、幅6.85cm、厚さ0.75cmを測る。刃部は直刃の両刃で、背部は弧状を呈する。刃部から体部下半にかけて火にあたっており、研磨等は不明である。背部寄りに2孔を穿っている。石質は泥岩である。

（154）は、現存長9.0cm、幅8.8cm、厚さ1.2cmを測る。両端部を欠損している。刃部は片刃ぎみの両刃で、背部中央部は直線状にのびると思われるが肩部欠損のため不明である。背部寄りに2孔を穿っている。A面（図版左側）の右側の欠損部分は、欠損の後研磨し両面の境に角をもっている。刃部にススの付着がみられる。石質は、緑泥片岩である。

（155）は、現存長12.2cm、幅7.9cm、厚さ0.8cmを測る。刃部は外彎する両刃である。背部は半円形状に丸く彎曲しており、平坦面を呈し、両面の境に角をもっている。刃部は細かな左右方向の研磨がみられる。背部中央背寄りに穿孔の痕跡が残る。石質は、緑泥岩である。

b)石鎌（図版16・61—156～166）

石鎌は、凹基無茎式・平基無茎式・円基無茎式・尖基無茎式の4種類の形態が出土している。

か凹基無茎式（156～161）

（156～161）は、最大幅が基辺にある形態であり、基边の凹みは全体的に浅く、（160）以外は丸く彎曲して凹んでいる。（160）は、ややV字形に近い基辺の凹みを呈している。側辺は、先端から基辺へ直線的にのびるもの（157・160）と、ふくらみをもって基辺に至るもの（156）、ふくらみをもつ部分と内彎する部分が組み合わさるもの（158）、直線的にのびるが途中に段をもつもの（159）、外彎するもの（161）に分けることができる。

石材は、(158)の粘板岩以外は、すべてサヌカイトである。

c) 平基無茎式 (162)

普通サイズの平基無茎式石鎌も多数出土しているが、(162)は大型のものである。法量は、長さ4.9cm、幅5.6cm、厚さ0.5cm、重さ9.9gを測る。基辺は、中軸線に対してわずかに傾きをもっている。側辺は、わずかにふくらみをもつ形態のものである。両面に大剥離面を残し、わずかに彎曲している。

石材は、サヌカイトである。

c) 円基無茎式 (163)

側辺は、先端から直線的にのびて下り基辺に至っている。両面に大剥離面を残している。

石材は、サヌカイトである。

c) 尖基無茎式 (164~166)

(164・165)の側辺は、逆刺部が角をなさず、なだらかに下る形態のものである。

(166)は、先端付近に棘状突起を有しており、その部分の断面はレンズ状を呈している。両面に大剥離面を残すものの、側辺はていねいな剥離調整が施されている。

石材は、すべてサヌカイトである。

d) 石劍 (図版17・62~173・174)

石劍は、4点出土しており、いずれも磨製石劍である。(174)は、基部端部は斜めに切断し研磨しており、基部端から8cmの両側縁は研磨によりすりおとし、面をつくっている。断面は変形を呈し、鈍が明確である。両面とも丁寧な研磨を施している。石材は、粘板岩(高島石)である。

(173)は、刃身先端部を欠損しているが茎を有する形態のものである。両面とも丁寧な研磨を施しており、断面は菱形に近い杏仁形を呈している。茎部においても丁寧な研磨を施している。石材は、緑泥片岩である。

d) 石斧 (図版18・62・63~175~179)

大型蛤刃石斧と扁平片刃石斧・柱状片刃石斧が出土している。

ガ) 大型蛤刃石斧 (175~177)

本遺跡出土の大型蛤刃石斧は完形ではなく、すべて刃部あるいは基部のみの出土である。

(175・176)は、基部が欠損しており全体の形は不明であるが、基部の幅と刃部の幅がほぼ等しく、両側面もほぼ平行しやや基端から刃部にむかって広がる形態のものと思われる。全体に左上がりの丁寧な研磨が施されている。刃先には、それぞれ打撃痕が認められる。石材は、(175)が泥岩、(176)は輝石安山岩である。

(177)は、基端が小さく尖基を呈し、刃部に下るにつれて広がりをもち刃部に最大幅のある三角形の平面を呈する形態である。刃部でA面、基部でB面に大きく剥離欠損しており刃先は失われている。表面の研磨は丁寧である。両側面に凹みがある。石材は泥岩で

ある。

i) 扁平片刃石斧 (178・179)

(178) は、平面形は長方形で、断面は扁平な橢円形を呈している。両面に剥離面を留めている半磨製品である。刃部は両刃気味で刃先に小さな刃こぼれがみられる。石材はサヌカイトである。

(179) は、平面形が基端より刃部の方に広がる台形状で、断面は扁平な長方形を呈する薄手の扁平片刃石斧としては中型の部類に属するものである。平面は、両面とも丁寧な研磨が施されているが、側面は自然面を残している。石材は、砂岩である。

e) 石槍 (図版17・62-168~170)

石材は、すべてサヌカイトである。

(168) は、長さ 6.9 cm、幅 2.7 cm、厚さ 1.2 cm、重さ 23.3 g を測る。先端でわずかに彎曲している。両面ともあらく大きな剥離面よりなっている。両面両側辺ともステップ状剥離面が大半である。基部は欠損している。断面は菱形である。未製品。

(169) は、長さ 6.9 cm、幅 2.7 cm、厚さ 1.0 cm、重さ 23.2 g を測る。両面ともあらい剥離調整を施している。片側面に大剥離面を残し、その側辺沿いに剥離調整を施している。基部は欠損している。断面は菱形である。未製品。

(170) は、現存長さ 8.0 cm、幅 2.7 cm、厚さ 1.4 cm、重さ 34.7 g を測る凸基有茎式の石槍である。先端部と茎部端を欠損している。断面はレンズ状を呈する。逆刺はなだらかであり、抜りは明確である。1面はあらい剥離調整を施し、大剥離面を残している。他面は自然面を残し、その側辺を剥離調整している。

f) 石小刀 (図版17・62-171)

石材は、サヌカイトである。長さ 8.0 cm、最大幅 1.7 cm、最大厚 0.7 cm を測る小刀である。

全体がゆるやかに彎曲し、先端で大きく弧をえがく。断面は先端に向って薄くなる菱形を呈し、先端は鋭い。両面とも両側辺から丁寧な剥離調整を施している。基部は斜めに欠損している。

g) 磨石 (図版19・63-180~183)

荒砥から仕上まで、また玉磨砥石等多数出土している。

(180) は、残存長 8.6 cm、幅 9.2 cm、厚 3.0 cm を測り、長方体状を呈する。使用面は2面であるが、各面に打痕が認められる。石質は硬砂岩である。(181) は、破片であり全体の形状、法量は不明である。使用面は2面あり、1面は平坦で、他の1面は削面を使用している。石質は安山岩である。

(182) は、欠損しており全体の法量は不明であるが、残存長 6.7 cm、幅 5.6 cm、厚 3.5 cm を測り、長方形状のものと思われる。使用面は、剖面以外の5面を使用しており、特に平面と側面は凹面となっている。他面は擦痕は弱い。石質は火成岩である。(183) は、破片

のため全体の形状及び法量は不明である。使用面は上面と側面の2面で凹面となっている。裏面は剥離面を残している。石質は砂岩である。

b)投弾（図版4・45-58）

58は、楕円形の横断面をもった亜円錐で、長径3.4cm、短径2.3cm、中径2.8cm、重さ22.4gを測る砂岩系のものである。

i)石匙（図版16・61-167）

長さ2.9cm、幅3.5cm、厚さ0.5cm、重さ4.1gを測る。三角形の体部につまみが付く横長タイプである。全体を剥離調整し、体部とつまみの境に扶りを入れている。石材は、サヌカイトである。

j)用途不明石器（図版17・62-172）

現存長10.4cm、最大幅2.4cm、最大厚0.7cmを測る。欠損している辺以外の三辺をすり切りにより切り落し長方形を呈している。一辺に三ヶ所の半円形の扶りがあり扶りの部分はあらい研磨が施されている。表面はあらい研磨を施すが研磨のおよばない剥離面が残り、裏面は自然面が残る。石材は、粘板岩である。

4. 木 製 器

今回の調査地の溝及び落ち込み状遺構内より鍔、鍔の未製品、鋤、堅杵、弓、矢柄、石斧の柄、ヤス、高杯、容器、杭、織機具、両端に水かきのある櫂、櫂、匙、鉢、編物、用途不明木製品、板状原料等多くの木製品が出土している。

a)鍔（図版20・64-184～187）

狭鍔（185）と広鍔（184・186・187）がある。

（184）は、納穴の穿たれていない広鍔の未製品である。平面形は長方形を呈し、法量は長さ40.4cm、幅26cm、厚さ刃部で1cm、基部で1.5cm、最大厚4.4cmを測る。基部より1/3ほど両側縁を、浅く弧状にえぐっている。

舟形突起は筋錐形を呈し、突起上面は平坦につくられている。全体に丁寧なつくりであり、完成品に近い段階のものとおもわれる。遺存状態は非常に良好である。

（185）は、長さ33.9cm、基部幅15.5cm、刃部幅11.3cm、刃部端厚0.5cm、最大厚3.8cmを測る狭鍔の完形品である。

両側縁に小さな三角形の造り出しを有し、基部は二又に別れている。舟形突起上面は平坦につくられ、厚さが最大になる部分に3.3×4.3cmの方形の着柄孔を穿っている。舟形突起は、6×20cmで高く造り出されている。着柄角は約68度である。ていねいなつくりで、遺存状態は良好である。

（186）は、広鍔で半分欠損している。長さ26.9cm、推定最大幅約17cm、刃部の推定幅約12cm、刃部端の厚さ0.5cm、着柄部の厚さ2.2cmを測る。着柄部の突起は、低い楕円形を呈

しており、 4×4 cmの方形の着柄孔を穿っている。着柄角は約60度で、着柄孔内には着柄の際にいたと思われる磨滅痕がみられる。

(187) も広鍔で、体部下半分を欠損しており全体の法量は不明であるが、基部幅21.2 cm、最大厚3.5 cmを測る。舟形突起は紡錘形を呈し、突起上面は平坦につくられている。突起中央に 3.1×4.7 cmの楕円形の着柄孔を穿っており、その内面には着柄の際にいたと思われる磨滅痕がみられる。着柄孔の左右に1辺約3.5 cmの三角形の孔をそれぞれ穿っている。遺存状態は良くないけれども、非常にていねいなつくりで加工してある。

b)柱状片刃右斧の柄(図版20・64—188)

長さ50.6 cm、台部の長さ17 cm、台部の最大幅5.3 cm、一段削り込んだ石斧着装部の長さ9 cm、着装部の削り込みの深さ2.5 cm(残存)、着装部の幅3.6 cmを測る。台部は、上面がわずかに欠損しているものほぼ完形品で、断面形は長方形を呈し、握柄は中央付近で細くつくられ、断面形は 3×3.4 cmの楕円形を呈しており、着柄角は約65度である。

台部と柄部の接点に、石斧を着装するための紐孔が穿たれており、台部には紐ずれを防ぐ2 mm前後の段を削り込んでいる。そして、その紐孔のすぐ下(握柄側)の握柄端にも穿孔があり、肩かけ用紐の紐孔と思われる。台部及び握柄とも細かな面取りとていねいに削られた加工痕が施されており、遺存状態も非常に良い。台部端と握柄の大部分は、火にあたって一部炭火している。

5. 装飾品

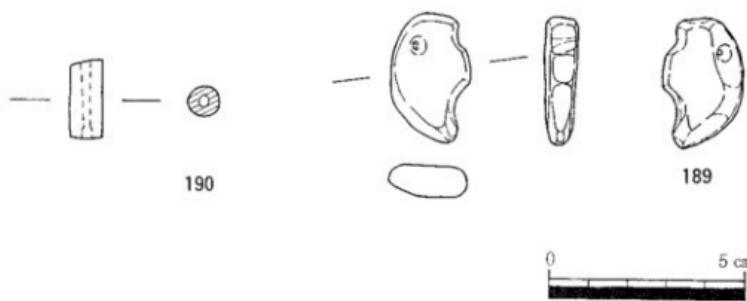
今回出土した装飾品には、勾玉と管玉がある。

a)勾玉(図版46・挿図6—189)

獸形勾玉が1点出土している。硬玉(ヒスイ)製のもので、淡緑色をしており、長さ3.3 cm、幅2 cm、厚さ0.8 cmを測り、幅広く厚く扁平な形を呈している。腹部には、2つのU字状の切り込みの凹みをもっている。両面からの穿孔である。

b)管玉(図版46・挿図6—190)

碧玉製のものが1点出土している。長さ20 mm、直径8 mm、孔径2.5 mmと2.9 mmを測る。両面からの穿孔で、一方から約17 mm、他方から約3 mm穿っている。



插図6 遺物実測図(勾玉・管玉)

V 遺物観察表

壹

図版番号	出土地区名 層位名	法環 (cm)	口縁 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
1・41 1	E-7 溝238 青黒色砂質土層	16.8 (復元口径) — 9.5 (残存高)	体部下半欠損。体部からゆるやかに外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸みをもつ。頸部に段をもつ。	• 外面はヨコヘラミガキ • 口縁部はナデ • 内面はヨコヘラミガキ • 頸部の段はヘラ状工具で押え成形する	胎土：1～3mmの小砂粒を含む 焼成：良好 色調：淡褐色	
1・41 2	E-7 溝238 暗黄灰色砂質土層(粘土まじり)	15.1 (復元口径) — 6.7 (残存高)	体部下半欠損。体部からゆるやかに外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸みをもつ。頸部に段をもつ。	• 外面はヨコヘラミガキ • 口縁端部はナデ • 内面はヨコヘラミガキ • 頸部の段はヘラ状工具で押えて成形	胎土：1～3mm大の小砂粒を含む 焼成：良好 色調：淡黄褐色	
1・41 3	F-8 溝223 灰黒色粘質土層(砂まじり)	12.0 (復元口径) — 5.0 (残存高)	体部下半欠損。体部からゆるやかに外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸みをもつ。頸部に段をもつ。	• 外面はヨコヘラミガキ • 口縁端部はナデ • 内面はヨコヘラミガキ • 頸部の段はヘラ状工具で押えて成形	胎土：緻密 焼成：良好 色調：淡褐色	
1・41 4	D-4 溝105 灰黒色粘質土層	— 11.7 5 12.1 (残存高)	口縁部欠損。 最大腹径が体部中位より少し下にある。	• 外面ヨコヘラミガキ • 内面口縁部ヨコヘラミガキ • 指頭圧痕(底部外面 頸部) • ヘラ描沈線 (頸部 1条 胴部 3条) • 頸部・胴部はナデ	胎土：緻密 0.1～0.5mmの砂粒を含む 焼成：良好 色調：淡茶褐色	
1・41 5	D-6 灰黒色砂質土層	— 9.7 5.3 11.4 (残存高)	口縁部欠損。 やや細長の体部を有する。	• 指頭圧痕(頸部内面) • ナデ(外面とも) • 粒上縁の痕跡明確 • 生駒西麓産	胎土：緻密 0.5～2mmの砂粒を含む 焼成：良好 色調：淡茶色	
1・41 6	E-7 溝238 青黒色砂質土層	7.1 (復元口径) 8.2 4.8 8.3	最大腹径が体部上位より少し下にある。 体部からゆるやかに外反する短い口縁部を有する。 口縁部内面に煤の付着。	• 外面ヨコヘラミガキ • 内面口縁部ヨコヘラミガキ • 胴部にヘラ描沈線2 条 • 頸部・胴部ナデ	胎土：0.1～3mmの大の 色砂粒を多く含 良好 焼成：良好 色調：淡茶褐色	

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm) 口徑 腹徑 底径 器高	形 態	技 法	備 考
1・41 7	E-4とE-5 の間観察用断面 淡黄灰色 砂質土層	6.0 7.8 4.0 6.7	球形の体部を有し、口 縁部は体部からゆるや かに外反する。 最大腹径は体部中位に ある。	<ul style="list-style-type: none"> ・指頭圧痕 ・外面口縁部は指押え の後ナデ、頸部はヨ コヘラミガキ、胴部 はナナメ方向のヘラ ミガキ ・内面はナデ ・ヘラ描沈線 （頸部 1条 胴部 2条） ・胴部～底部に黒斑 ・粘土帶接合部が明確 ・胴部に黒斑 	胎土：1mm以下の砂粒 を含む 緻密 雲母 焼成：良好 色調：淡褐色
1・41 8	E-6	— 6.6 — 5.7 (残存高)	口縁部欠損。 底部剥離。 球形に近い体部を有す る。	<ul style="list-style-type: none"> ・指頭圧痕 ・(外)ナデ+ヘラミガキ (内)ナデ ・底部のはく中心に穿 孔の痕跡ある ・頸部・胴部の半分・ 底部表面剥離 	胎土：緻密 2.5mm以下の砂 粒を多く含む 焼成：良好 色調：灰黒色
1・41 9	E-4 落ち込み203 明黒灰色 粘質土層	— 10.5 5.2 10.5 (残存高)	口縁部欠損。 最大腹径は体部上位に ある、扁平な体部を有 する。	<ul style="list-style-type: none"> ・指頭圧痕(内外共) ・外面胴部下半以外は ヘラミガキ、胴部下 半はナデ ・内面ナデと一部ヘラ ミガキ、部分的に未 調整のところがある ・胴部に2条のヘラ描 沈線 	胎土：緻密 2mm以下の砂粒 若干 焼成：良好 色調：淡茶褐色
1・42 10	E-5 黒色粘質土層	6.3 8.0 5.3 10.3	内彎ぎみの頸部から立 ち上がったのち外反す る口縁部を有する。 扁平な体部。 腹径は口径より大きい。	<ul style="list-style-type: none"> ・内面頸部指頭圧痕が 残り、胴部は一部ヘ ラケズリ ・外面器壁の荒れのた め調整不明であるが、 口縁部でナデ ・頸部に刻目のある2 条の貼付凸部 ・粘土繩の痕跡明確 	胎土：1～3mmの砂粒 焼成：良好 色調：淡灰褐色

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm) 口徑 腹径 底径 器高	形 態	技 法	備 考
1・42	E-5 落ち込み 205	5.0 (復元口徑) 5.8 3.6 7.7	口縁部一部欠損。 やや内側する頸部から 立ち上がったのち外反 する口縁部を有する。	<ul style="list-style-type: none"> ・指頭圧痕 ・外面ナデ ・内面ヨコナデ ・頸部に刻目のある1 条の凸帯 ・口縁部に1ヶ所?の 穿孔 ・黒斑あり(突堤より 下へ) 	胎土: 繊密 0.1~2mmの砂 粒を含む 焼成: 良好
12	灰黒色粘質土層 (砂まじり)				色調: 明灰色
1・42	D-5	14.1 — —	口縁部のみ残存。 ゆるやかに外反する口 縁部を有する。 口縁端部は面をもつ。	<ul style="list-style-type: none"> ・指頭圧痕(内面) ・外面ヘラ状工具で横 方向、ナメ方向の 順になでている。 ・内面口縁部横ナデ、 全体にナデ 	胎土: 3mm以下の砂粒 を含む 繊密
12	暗黒色粘質土層	13.2 (残存高)		<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部の一部分のみ に刻目 ・織維状又は小枝らし いもので突いた刺突 文が5列に施されて いる 	焼成: 良好 色調: 淡黄褐色
1・42	D-5	15.6 14.0 6.8 27.2	斜めに外反する口縁部。 口縁端部は面をもつ。 長い筒状の頸部。体部 は丸みをもち、頸部から 体部にかけてなだら かな曲線を描く。底部 突出し、やや上げ底。	<ul style="list-style-type: none"> ・指頭圧痕(内外面) ・外面ヘラミガキ ・内面ヘラミガキ+ナデ の痕跡あり(若干) ・口縁部磨滅のため不 明(ナデの痕跡?) ・くし描直線文5帯 (9条)、波状文2帯 (8~9条) ・粘土紐の痕跡あり 3ヶ所 ・内外面頸部~胴部に かけて黒斑 	胎土: 3mm以下の砂粒 を含む 繊密 焼成: 良好 色調: 灰褐色
16	D-4 溝 1	18.7 17.9 (残存) — 22.9 (残存高)	体部下部欠損。 斜めに外反する口縁部。 長い筒状の頸部。 体部は丸みをもち、頸 部から体部にかけてな だらかな曲線をえがく	<ul style="list-style-type: none"> ・指頭圧痕 ・外面ハケ調整+ヘラ 磨き ・内面ヘラ磨き+ナデ? ・頸部にくし描直線文 8条×8帯 ・肩部にくし描弧文2 つ、口縁下に刺突文 2つ 	胎土: 6mm以下の砂粒 を含む 繊密 焼成: 良好 色調: 暗褐色 牛飼西麓産

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm)	口徑 腹徑 底径 器高	形態	技法	備考
2・43 18	F-7 黒色粘質土層 (下層)	— 5.5 3.2 5.8 (残存高)	口縁部欠損。 腹径は口径よりも大きい。 最大腹径は、体部中位よりやや上に位置する。	・外側ヨコヘラミガキ ・内面ナデ ・ヘラ描沈線 ・頭部3条+? (制部2条) ・底部外面に指頭圧痕	胎土：緻密 0.1~3mm以下の砂粒を含む 焼成：良好 色調：淡褐色	
2・43 19	C-4 灰黑色粘質土層	— 4.6 3.6 5.5 (残存高)	口縁部欠損。 縦長の体部。	・指頭圧痕 ・粒土紐の痕跡あり ・磨滅のため調整不明	胎土：0.1~4mmの大砂粒 焼成：良好 色調：灰黒色	
2・43 20	E-6 溝201 灰黑色粘質土層	— 5.2 3.6 4.5 (残存高)	口縁部及び底部の一部欠損。 丸みをもった体部。	・指頭圧痕（内外面共） ・内面頭部にしばりの痕跡 ・外面磨滅して調整不明 ・内面指によるナデ？	胎土：2mm以下の砂粒 (長石・石英など) かなり含み粗雑 焼成：良好 色調：明灰褐色	
2・43 21	D-4 灰黑色粘質土層	— — 4.8 2.1 (残存高)	底部のみ残存。	・指頭圧痕 ・外面ヘラミガキ ・内面ナデ ・相対する位置に2孔 1対の穿孔	胎土：緻密 3mm以下の砂粒 焼成：良好 色調：黄灰褐色	
4・45 53	D-4 黒色粘質土層	— 3.0 2.6 (残存高)	底部と体部の一部のみ残存。 底部は5角形を呈している。 ミニチュア	・外側はヘラ状工具で成形 ・内面はナデ	胎土：2mm以下の砂粒を含む、緻密。 焼成：良好 色調：灰褐色	

無頭壺形土器

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm)	口徑 腹徑 底径 器高	形態	技法	備考
1・42 13	F-7 明黄色 砂質土層	8.7 13.7 5.8 11.7	内側する口縁部を有し、 口縁端部は丸みをもつ。 体部は球形に近い形状を呈する。 相対する位置に2孔1対の縫孔を有する。	・指頭圧痕 ・外側口縁部ヘラケズ リ、ヘラミガキ ・内面ヘラミガキ ・外側器壁は表面剥離のため調整不明	胎土：2~5mmの白砂 粒を含む 黒雲母を含む 表面は緻密 焼成：良好 色調：暗褐色 生駒西麓産	

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm)	口徑 腹徑 底径 器高	形 態	技 法	備 考
1・42	D-4 排水溝	8.8 13.3		内縛する口縁部を有し、 口縁端部は丸みをもつ。 体部は球形に近い形状 を呈する。 相対する位置に2孔1 対の縫孔を有している が、その内1孔は未貫 通である。	・外面は剥離のため凹 凸不明 ・内面口縁部より半分 は横ナデ ・2次的に火にあたっ ている	胎土：0.1～3mmの大 白砂粒を多く含む 黒雲母を多く含む
14	黑色粘質土層	6.0 10.2				色調：暗褐色 生駒西麓産
1・42	E-7 溝238	8.4 19.3		口縁部はわずかに内縛 し、端部は短く立ち上 がる。 体部が張る形状を呈し ている。	・口縁部から胴部にかけ て7条（部分的に 5～6条）の櫛搔直 線文12帯を施し、直 線文帯間に半截竹管 による直線文を付加 ・外腹全体及び内面口 縁部に黑色物質の塗 布	胎土：3mm以下の砂粒 を含むが緻密 焼成：良好 色調：淡灰褐色
17	灰黒色粘質土層 (木片多し)	5.4 20.8			・外面ヨコ方向の刷毛 目の後、ナナメ方向 の刷毛目 ・内面口縁部及び頸部 はナデ、底部付近は ヘラミガキ、胴部は ヘラナデ	

壺用蓋形土器

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm)	口徑 器高	形 態	技 法	備 考
5・47	E-5 溝260	— —		笠形でつまみが突出す る。 つまみの横に1孔を穿 つ。	・外面はつまみ以外は タテヘラミガキ。つ まみはナデ ・内面はヨコヘラミガ キ	胎土：2mm以下の砂粒 をわずかに含む 緻密 焼成：良好 色調：灰黒色
64	暗黒色砂質土層					
5・48	E-7	10.3		笠形でつまみが突出す る。 周縁の相対する二方に 1対の2孔を穿つ。	・口縁端部はヨコナデ ・外面はつまみ以外は タテヘラミガキ、一 部ヨコヘラミガキ ・つまみはナデ ・内面はヨコヘラミガ キとナデ ・5方向に放射状に櫛 搔直線文がわずかに残 っている（ヘラミガキに より消されている。）	胎土：1mm以下の少量 の細砂を含む。 緻密 焼成：良好 色調：暗褐色 生駒西麓産
65	灰黒色砂質土層	4.3				

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm)	口径 器高	形 態	技 法	備 考
5・48 66	E-9 灰黒色粘質土層 (砂まじり)	11.0 3.8		周縁の一部を欠く。笠形でつまみが突出する。周縁の相対する二方に1対の2孔を穿つ。	・内外面とも磨滅のため調整不明	胎土: 0.1 ~ 4 mmの大砂粒を含む。 緻密 焼成: 良好 色調: 明橙褐色
5・47 67	E-3 溝238 明黒灰色 粘質土層	11.8 3.2		笠形でつまみが突出する。 つまみの横に1孔を穿つ。	・周縁端部はヨコヘラミガキ ・つまみから周縁にかけてタテヘラミガキ ・指頭圧痕 ・内面はヨコヘラミガキとナデ ・外面周縁に黒斑	胎土: 1 ~ 2 mmの大砂粒を含む。 緻密 焼成: 良好 色調: 淡灰褐色
5・48 68	E-3 落ち込み204 明黒灰色 粘質土層	13.5 3.0		周縁の一部を欠く。笠形で中凹み環口状のつまみ。 つまみの中心に1孔穿つ。	・周縁端部はヨコヘラミガキ ・内外面とも指頭圧痕 ・外面はナデとナメヘラミガキ ・内面はナデとヨコヘラミガキ ・内面に煤の付着	胎土: 2 mm以下の細砂粒をわずかに含む。 緻密 焼成: 良好 色調: 暗褐色 生駒西麓産
5・48 69	E-7 灰黒色粘質土層 (砂まじり)	10.6 2.7		完成品。笠形で中凹み環口状のつまみ。つまみの中心に1孔を穿つ。	・周縁端部はヨコヘラミガキ ・内外面ともヨコヘラミガキ ・つまみから4方向に3本と4本1組の長線とその外側の長線に直角にそれぞれ11 ~ 15本の短線を隠描した文様 ・内外面とも黒色物質の塗布	胎土: 1 ~ 8 mmの大砂粒を含む。 緻密 焼成: 良好 色調: 灰黒色
5・48 70	F-7 溝238 青黒色砂質土層	11.3 3.8		笠形で中凹み環口状のつまみ。つまみと周縁端部の間に2段に連続した小突起をめぐらす。 つまみの中心に1孔穿つ。	・外面ヨコヘラミガキ。 周縁端部はヨコヘラミガキ ・内面はナデとタテ・ヨコヘラミガキ	胎土: 2 mm以下の砂粒(雲母・長石・石英)を含む。 緻密 焼成: 良好 色調: 灰褐色
5・47 71	F-7 溝208 黒色粘質土層	13.2 4.5		笠形で中凹み環口状のつまみ。 つまみの中心に1孔穿つ。	・内外面指頭圧痕 ・周縁端部はナデ ・つまみから周縁までヨコヘラミガキ ・内面ヨコヘラミガキ	胎土: 0.5 ~ 2 mmの大砂粒を含む。 緻密 焼成: 良好 色調: 淡褐色

岡版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm)	口径 器高	形 態	技 法	備 考
5・48 72	E-6 落ち込み7	14.6 4.4		笠形でつまみが突出する。 つまみの中心に1孔穿つ。	・周縁端部はヨコヘラミガキ ・つまみから周縁にかけてヨコヘラミガキ ・内面はヨコヘラミガキ ・内面周縁に煤の付着	胎土: 4 mm以下の砂粒を含む。 緻密。 焼成: 良好 色調: 淡褐色
5・47 73	F-7 明黄灰色 砂質土層	12.5 (復元口径) 3.3		笠形でつまみが突起状に2つにわかれれる。 突起の中心に1孔穿つ。	・つまみはナデ ・内外面とも指揮えの後タテ、ヨコのヘラミガキ ・周縁端部ヨコヘラミガキ	胎土: 2 mm以下の白色砂粒をわずかに含み、緻密。 焼成: 良好 色調: 灰褐色
5・47 74	E-7 黒色粘質土層	11.4 (復元口径) 3.5		笠形でつまみが突起状に2つにわかれれる。 突起の中心に1孔を穿つ。	・周縁端部はヨコヘラミガキ ・つまみはナデ ・内外面とともに指頭圧痕 ・外底はタテヘラミガキ ・内面はヨコヘラミガキ ・内外面とともに黒斑	胎土: 3 mm以下の白色砂粒(長石・石英)などを含む。 緻密。 焼成: 良好 色調: 灰褐色
5・47 75	E-6, 7の 観察用断面 灰黑色砂質土層	11.8 (復元口径) 3.0		笠形でつまみが突起状に2つにわかれれる。 突起の中心に1孔を穿つ。	・周縁端部はヨコヘラミガキ ・つまみはナデ ・内外面とともに指頭圧痕 ・外面はタテとナナメのヘラミガキ ・内面はヨコヘラミガキ ・外面周縁に煤の付着	胎土: 1 mm大の砂粒を含む。緻密。 焼成: 良好 色調: 淡灰褐色
5・47 76	E-3 溝238	15.4 (復元口径) 3.2		笠形でつまみが突起状に2つにわかれれる。 突起の中心に1孔を穿つ。	・周縁端部はナデ ・内外面とともに指頭圧痕 ・外面はナナメヘラミガキ ・内面はナナメヘラミガキ ・内面全体と外面周縁に黒斑	胎土: 4 mm以下の砂粒を含む。緻密。 焼成: 良好 色調: 灰褐色
5・47 77	F-6 黒色粘質土層 (下層)	11.2 2.0		周縁の一部を欠くがほぼ完形品。笠形。 中心に1孔を穿つ。	・内外面とも磨滅のため調整不明、一部ヘラミガキの痕跡	胎土: 0.1 ~ 3 mm大の砂粒を含む。 緻密。 焼成: 良好 色調: 淡茶褐色

閲覧番号	出土地区名 層位名	法量 (cm)	口径 器高	形 態	技 法	備 考
5・47 78	E-7 灰黒色粘質土層	12.6 (復元口径) 2.6		笠形。中心に1孔を穿つ。	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面ともに指頭圧痕 ・外面はタテヘラミガキとナデ ・内面はナメヘラミガキとナデ ・周縁端部はナデ ・内面に煤の付着 	胎土：2mm以下の砂粒を含む。緻密。 焼成：良好 色調：暗褐色 生駒西麓産
5・47 79	E-8 灰黒色粘質土層	10.7 2.3		笠形。中心に1孔を穿つ。	<ul style="list-style-type: none"> ・周縁端部はヨコヘラミガキ ・内外面とも丁寧なヘラミガキ 	胎土：2mm以下の砂粒をわずかに含む。緻密。 焼成：良好 色調：淡褐色
6・48 80	F-7 明黄灰色 砂質土層	13.6 2.9		笠形。中心に1孔を穿つ。	<ul style="list-style-type: none"> ・周縁端部はヨコヘラミガキ ・内外面とも丁寧なヘラミガキ ・内外面ともに指頭圧痕 	胎土：3mm以下の白色砂粒（長石・石英など）含む。緻密。 焼成：良好 色調：暗褐色 生駒西麓産
6・47 81	D-9 晴黄灰色砂層	10.4 2.4		完形品。笠形。中心に1孔を穿つ。	<ul style="list-style-type: none"> ・周縁端部ヨコヘラミガキ ・内外面ともに指頭圧痕 ・外面はタテとヨコのヘラミガキの後、一部ナデ。 ・内面はヨコ刷毛目 	胎土：0.1～4mm大の砂粒を含む。緻密。 焼成：良好 色調：暗褐色 生駒生麿産
6・47 82	E-7 北側觀察用断面 黒灰色粘質土層	13.2 (復元口径) 2.4		笠形。中心に1孔を穿つ。	<ul style="list-style-type: none"> ・周縁端部ヨコヘラミガキ ・内外面ともにナデの後ヘラミガキ ・鉛錠による木葉文 	胎土：4mm以下の砂粒を含む。緻密。 焼成：良好 色調：灰褐色
6・48 83	F-9 青灰色砂層	10.7 2.8		完形品。中心に1孔を穿つ。笠形。	<ul style="list-style-type: none"> ・周縁端部にヨコヘラミガキ ・外面ヘラミガキ。鉛錠による木葉文 ・内面ナデ ・全体につくりは粗雑 	胎土：2mm以下の砂粒を含む。緻密。 焼成：良好 色調：灰黒色
6・47 84	E-3 落ち込み210 黒色粘質土層	12.9 (復元口径) 4		笠形。全体の1/3残存のため紐孔は不明。周縁は水平ぎみにのびる。	<ul style="list-style-type: none"> ・周縁端部はヨコヘラミガキ ・内外面とも磨滅のため調整は不明であるが、一部ヘラミガキが残る 	胎土：0.5～2mm大の砂粒を含む。緻密。 焼成：良好 色調：明暗褐色

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm)	口径 器高	形 態	技 法	備 考
6・47	E-7 黑色粘質土層	12.6 (復元口径) 2.6 (残存高)		笠形。中心に1孔を穿つ。	・内外面に指頭圧痕 ・外面はナデとナナメヘラミガキ ・内面はナデとヨコヘラミガキ	胎土：2mm以下の砂粒をわずかに含み緻密。 焼成：良野 色調：灰褐色
6・47	E-5 溝260 暗黒色砂質土層	13.8 (復元口径) 2.2 (残存高)		笠形？。破片であるため全体の形状は不明。周縁に縫孔の痕跡。	・周縁端部はヨコヘラミガキ ・外面はタテヘラミガキ ・内面はナナメヘラミガキ ・外面上に5条（以上）の箇擻文様の一部あり。丁寧なつくり。	胎土：3mm以下の砂粒を含む。緻密。 焼成：良好 色調：灰褐色
6・47	D-3 西側觀察用断面 黒色粘質土層	10.4 (復元口径) 1.4		円板形。上面はやや中央部がふくらみ、下面は平坦面をなす。	・周縁端部はヨコヘラミガキ ・上面はヨコヘラミガキ。数本の細い沈線文。縫孔の一部残存 ・下面は磨滅のため調整不明	胎土：微砂粒を含む。緻密。 焼成：良好 色調：暗褐色 生駒西龍座
6・48	E-8 溝240 灰黒色粘質土層	10.2 1.3		円板形。完形品。周縁端部はやや丸みをもつ。上面中央部がややふくらみ、下面中央部は凹み、弧状をなす。周縁に2孔1対の縫孔。	・周縁端部はヨコヘラミガキ ・上面はヘラミガキとナデ ・下面是ナデ	胎土：3mm以下の砂粒を含む。緻密。 焼成：良好 色調：明橙褐色
6・47	E-6・7 観察用断面 暗黒色砂層	10.1 (復元口径) 1.6 (残存高)		笠形。周縁に1孔穿つ。	・周縁端部はヨコヘラミガキ ・内外面ともナデの後、ヘラミガキ。 ・外面に黒斑	胎土：2mm以下の砂粒を含む。緻密。 焼成：良好 色調：灰褐色
6・48	F-8 南側觀察用断面 灰黒色粘質土層 (砂まじり)	7.9 2.3		完形品。笠形。周縁に1孔を穿つ。内面中央に未貫通の穿孔痕あり。	・内外面とも磨滅のため調整不明。内面に一部ナデの痕跡	胎土：3mm以下の砂粒を含む。緻密。 焼成：良好 色調：淡褐色
6・48	E-7 溝238 灰黒色粘質土層	15.4 0.9		円板形。中央に1孔を穿つ。周縁に1条のヘラ箇沈線文	・周縁端部はヨコヘラミガキ ・上下面に指頭圧痕 ・上下面ともナデとヘラミガキ	胎土：2mm以下の砂粒を含む。緻密。 焼成：良好 色調：灰褐色

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm)	口径 底径 器高	形態	技法	備考
6・48 92	E-8 暗黄灰色砂層	11.8 3.1		笠形。周縁に相対する位置に2孔1対の紐孔を穿つ。外面に2列の赤彩繩文がめぐる。外側の鋸齒文は内側を向き、内側の鋸齒文は外側を向き対称している。	<ul style="list-style-type: none"> 周縁端部はヨコヘラミガキ 外面はナデの後、ヘラミガキ 内面はナデの後、ヨコヘラミガキ 	胎土：2mm以下の砂粒をわずかに含む。 緻密。 焼成：良好 色調：明橙褐色
6・45 93	E-5 落ち込み205 黒灰色粘質土層	— 2.5 (残存高)		つまみのみの残存で全体形状不明。中凹み環口状のつまみをもつ笠形のものとおもわれる。	<ul style="list-style-type: none"> ナデ 	胎土：0.2～2.5mmの大砂粒を含む。 緻密。 焼成：良好 色調：明灰褐色
47 191	D-4 黒色粘質土層	11.2 4.7		笠形でつまみが突起状に二つにわかれる。つまみ（双頭）上面に刻目。外面に輪描流水文を施す。2孔1対の紐孔を周縁に穿つ。	<ul style="list-style-type: none"> 周縁端部はヨコヘラミガキ 外面はナデの後輪描流水文を施す 内面はナデと刷毛目 	胎土：最大5mmの大砂粒を含むものの緻密 焼成：良好 色調：灰褐色

甕形土器

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm)	口径 底径 器高	形態	技法	備考
2・43 22	E-5 黒色粘質土層 (下層)	25.2 8.2 25.6		外反する口縁部。倒錐形の体部。口径と器高はほぼ等しい。	<ul style="list-style-type: none"> 指頭圧痕（内外面共） 外面はタテ刷毛目、内面口縁部はヨコ刷毛目、頸部・胴部は乱方向の刷毛目・底部はヨコ刷毛目 口縁部に刻目 頸部に4条（部分的に5条）の輪描沈線文 	胎土：1～6mmの砂粒を含む 焼成：良好 色調：淡褐色
2・43 24	E-7 黒色粘質土層 (下層)	21.2 7.7 24.2		外反する口縁部。倒錐形の体部。	<ul style="list-style-type: none"> 指頭圧痕（内面） 口縁部に刻目 頸部下に3条の輪描沈線文 内外面にすす付着 外面はヘラナデの後 ナメ方向の刷毛目 	胎土：3mm以下の白色砂粒（石英・長石・雲母など） 焼成：良好 色調：灰褐色

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm)	口径 底径 器高	形 態	技 法	備 考
2・43 25	E-7 灰黒色粘質土層	23.5 7.8 17.9		外反する口縁部。 口径は器高を上回る。	<ul style="list-style-type: none"> 指頭圧痕（内外にあるが、外側はほとんど消えている） 外面は頭部指揮えの後ヨコナデ。頸部下半は剥離のため不明。 上半はナメの刷毛目 内面はナデ、一部刷毛目 底部上半に煤の付着 	胎土：2～4mmの砂粒を含む 焼成：良好 色調：暗褐色 生駒西麓産
2・43 26	E-4 溝260 青黒色砂質土層	18.2 7.0 18.1		大きく外反する口縁部。 倒錐形の体部。 口径と器高はほぼ等しい。	<ul style="list-style-type: none"> 外面全体に煤の付着 内面に指頭圧痕 外面はタテヘラミガキ、一部荒い刷毛目 内面は口縁部は細かい刷毛目、他はナデ 口縁部に刻目、頸部下に3条の籠彫沈線文 	胎土：1～3大の砂粒を含む 焼成：良好 色調：暗褐色 生駒西麓産
2・43 27	D-3 黒色粘質土層	17.2 5.3 19.3		外反する口縁部。	<ul style="list-style-type: none"> 指頭圧痕 外面タテとナメ方向の刷毛目 内面タテ方向の刷毛目とナデ 	胎土：0.1～3mm大の白色砂粒を多量含む。 焼成：良好 色調：淡灰褐色
2・43 28	E-5 黒色粘質土層 (下層)	21.5 6.2 24.2		外反する口縁部。 体部が張る。 底部は△中央に穿孔。	<ul style="list-style-type: none"> 指頭圧痕（口縁部内面） 内外共約3mm幅のヘラによる調整 底部から底部にかけスス付着 底部内面に片痕あり 外面口縁部はヨコナデ 内面口縁部は指指えの後ヨコナデ 	胎土：4mm以下の砂粒を含む。繖密。 焼成：良好 色調：暗褐色 生駒西麓産

壺用蓋形土器

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm)	口径 底径 器高	形 態	技 法	備 考
3・46 61	E-6 灰黒色粘質土層	19.6 5.5 10.0		笠形。大きく外方へ開く体部。周縁端部は面をもつ。内面外周に幅2cmでふきこぼれが炭化して付着。	<ul style="list-style-type: none"> 周縁端部はヨコヘラミガキ 外面はタテ方向の刷毛目。後ヘラミガキ。つまみ周辺に刷毛目が顯著に残る 内面は丁寧なヨコナデ 	胎土: 3mm以下の砂粒を含む。緻密。 焼成: 良好 色調: 灰褐色
3・46 62	E-6 黑色粘質土層	21.8 (復元口徑) 6.9 7.1		笠形。大きく外方向へ開く体部。周縁端部は面をもつ。内面外周に幅2cmでふきこぼれが炭化して付着。	<ul style="list-style-type: none"> 外面とともに磨滅により調整不明。つまみ周辺にたての刷毛目が一部残る。 	胎土: 2mm大の砂粒を含む。緻密。 焼成: 良好 色調: 喧褐色 生物: 西董座
3・46 63	E-6 灰黒色粘質土層 (木片多し) (残存高)	— 6.2 9.8		笠形。大きく外方向へ開く体部。周縁端部は面をもつ。つまみ部は体部から横方向に突出。内面外周にふきこぼれが炭化して付着。	<ul style="list-style-type: none"> 外面はタテ方向の刷毛目 つまみと体部の接点はヨコナデ 内面はヨコ刷毛目の後、ヨコナデ 	胎土: 4mm以下の砂粒を含む。緻密。 焼成: 良好 色調: 淡灰褐色

鉢形土器

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm)	口径 底径 器高	形 態	技 法	備 法
3・44 28	E-3 黒色粘質土層 (下層)	22.8 6.8 15.4		やや斜め外方へ伸びる口縁部。口縁端部は平坦に面をもつ。体部はだらかな曲線を描き裾すぼまり。	<ul style="list-style-type: none"> 外面指頭压痕、口縁端部をヘラで成形 内面ナデ+ていねいなヘラミガキ 12条単位の勘描直線文3帯 	胎土: 2mm以下の砂粒を含み。緻密。 焼成: 良好 色調: 淡褐色
3・44 29	D-5 黒色粘質土層	13.0 6.0 (脚幅径) 14.2		台付。わずかに内側する山縁部。口縁端部は丸みをもつ。短い中実の脚柱に、やや幅広がりの脚台端部は丸みをもつ。	<ul style="list-style-type: none"> 指頭压痕 外面ヘラミガキ+ナデ 内面ヘラミガキ+横ナデ(上半)、ナデ(下半) 内面口縁部は刷毛目 勘描直線文、上より7条に(部分的に8条)4帯時計まわり方向に施文 	胎土: 3mm以下の砂粒。緻密。 焼成: 良好 色調: 明灰褐色

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm)	口径 底径 器高	形 態	技 法	備 考
3・44	F-8	16.0 8.1		平底ぎみの底部。 体部は丸みをもつ。 頭部で屈曲して外方へ 開く口縁部。口縁端部 は面をなす。	<ul style="list-style-type: none"> 指頭圧痕（内外面共） ヘラ削り（内側口縁部） 外面タテヘラミガキと ナデ、細かな刷毛目 （内外面共）板状工具 によるナデ調整 内面ヘラ状工具によ る調整ヨコナデ（内 側口縁部） 体部上半から口縁部 にかけて黒斑 	胎土：2mm以下の白砂 粒を含む。緻密。 焼成：良好 色調：淡橙褐色
30	黒灰色粘質土層	11.5				
3・44	E-8 溝100 暗黄灰色砂質土 層(粘土まじり)	14.2 4.6 9.3		体部は直線的に外上方 へ立ち上がり、口縁部 に至る。	<ul style="list-style-type: none"> 指頭圧痕 底部内面に刷毛目の 刷跡 外面に煤の付着 	胎土：6mm以下の砂粒を 多く含む。緻密。 焼成：良好 色調：灰褐色
3・44	E-8 灰黒色粘質土層 (白色砂まじり)	11.5 5.2 8.2		頭部で屈曲して外方へ 開く口縁部を有し、口 縁端部は面をもつ。	<ul style="list-style-type: none"> 外面は口縁部及び頭 部は指押えの後ヨコ ナデ。体部はタテ及 びナメの刷毛目 内面はヨコナデ 外面口縁部から底部 にかけて黒斑 	胎土：3～4mmの砂粒 焼成：良好 色調：淡黄褐色
3・44	F-8	10.0 5.5		頭部で屈曲して外方へ 開く口縁部（一部若干 立ちあがるところもあ る）を有する。口縁端 部は丸みをもつ。	<ul style="list-style-type: none"> 指頭圧痕 粒土緑の痕跡明確 外面はヨコナデ 内面は口縁部ヨコナ デ、他はタテ方向の ヘラナデ 底部内面は未調整 	胎土：0.1～8mmの砂 粒 焼成：良好 色調：明橙褐色
3・45	E-6	7.9		体部は直線的に外上方 へ立ちあがり、口縁部 に至る。	<ul style="list-style-type: none"> 粘土緑の接合部が明 確である 外面はタテ方向のヘ ラナデ 内面はヨコナデ 	胎土：2mm以下の白色 砂粒を多く含む。 緻密。
34	青灰色砂層	5.5 3.9		口縁端部は面をもつ。		焼成：良好 色調：淡灰褐色
2・45	D-5 明灰黒色 砂質土層	— 4.0 4.8 (脚部径) (残存高)		台付。鉢部欠損。短い 中実の脚柱。裾広がり で水平に伸びる脚台。 ミニチュア。	<ul style="list-style-type: none"> 外面はナデと一部刷 毛目 内面はナデ 	胎土：4mm以下の砂粒 を含む。緻密。 焼成：良好 色調：灰黒色
3・45	D-6 暗黄灰色 砂質土層	7.1 (復原口径) 4.3 4.8 (脚部径) (残存高)		台付。 斜め外方に伸びる口縁 部。 短い脚台部。 ミニチュア。	<ul style="list-style-type: none"> 内外面ともナデ 	胎土：0.1～4mm大の 砂粒を含む。 焼成：良好 色調：淡灰褐色

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm)	口径 底径 器高	形 態	技 法	備 考
4・45 44	E-4 明黄色 砂質土層	4.1 3.1 2.2	完形品。 斜め外方に伸びる口縁部。 口縁端部は面をもつ。 ミニチュア。	・内外面とも指押えの後、ナデ	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰黒色	
4・45 45	E-6 灰黒色粘質土層 (砂まじり)	4.8 3.0 2.7	完形品。 斜め外方に伸びる口縁部。 口縁端部は丸みをもつ。 ミニチュア。	・外面は磨滅のため調整不明。指頭圧痕が残る。 ・内面はナデ	胎土：0.1～0.4mmの砂粒を含む。 緻密。 焼成：良好 色調：淡灰褐色	
4・45 46	E-8 (復元口径) 灰黒色粘質土層	5.2 3.2 3.2	直線に伸びる体部。口縁端部は丸みをもつ。 ミニチュア。	・外面は一部ヘラミガキとナデ ・内面はナデ	胎土：0.5～2mmの大白色砂粒を含む。 焼成：良好 色調：灰褐色	
4・45 47	D-6 明灰色砂質土層	— 3.3 3.4 (残存高)	体部欠損。底部と体部の一部のみ残存。 ミニチュア。	・外面は磨滅のため調整不明 ・内面はナデ	胎土：1～2mmの大白色砂粒を含む。 緻密。 焼成：良好 色調：灰褐色	
4・45 48	B-4 灰黒色粘質土層	— 2.8 1.6 (残存高)	底部のみ残存。 底部突出し上げ底。 ミニチュア。	・外面に指頭圧痕 ・ナデらしき痕跡	胎土：0.5～3.5mmの大砂粒を含む。緻密。 焼成：良好 色調：灰褐色	
4・45 49	E-7,8間 規格用断面 暗黄色 砂質土層 (砂まじり)	— 3.0 2.2 (残存高)	底部、脚台部と体部の一部のみ残存。 底部突出し上げ底。 ミニチュア。	・外面はヘラミガキ ・内面はナデ ・底部付近に3条の籠彫沈線文 ・脚部中位に1孔1対の組孔を穿っている	胎土：2～3mmの大白色砂粒を含む。 焼成：良好 色調：灰褐色 壺の可能性あり	
4・45 52	E-7 暗黄色砂層	— 3.2 (脚底径) 4.6 (残存高)	台付。脚台部と体部の一部のみ残存。 中実の脚台。 ミニチュア。	・外面はタテヘラミガキ ・内面はナデ ・脚台端部へラ削り	胎土：0.5～1mmの大砂粒を含む。 緻密。 焼成：良好 色調：淡茶褐色	
6・45 94	E-3 落ち込み210 黒色粘質土層	7.0 4.2 4.2	完形品。 やや外反する口縁部。 口縁端部は丸みをもつ。 ミニチュア。	・内外面ともにナデ ・内面にベンガラ付着 底部にベンガラのたまりが残っている	胎土：0.5～2mmの大砂粒を含む。 焼成：良好 色調：淡茶褐色	

高杯形土器

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm)	口 径 脚根径 器 高	形 態	技 法	備 考
3・44 35	E-4 落ち込み 203 明黒灰色 粘質土層	— 12.2 8.3 (残存高)	口縁部欠損。 半球状の杯部。中空の 短い脚柱。脚柱から脚 台にかけてなだらかな 曲線を描く。 裾広がりの脚台部。脚 台端部は丸みをもつ。	外面部ヨコヘ ラミガキ、脚部はタ テヘラミガキ 内面ヨコヘラミガキ 脚部内面磨滅のため 調整不明 杯部内面上方に黒斑	胎土：7mm以下の砂 粒。粗雑。 焼成：良好 色調：黄灰褐色	
3・44 36	E-6 上部 209 黒色粘質土層 (下層)	— 11.6 8.8 (残存高)	杯部欠損。 中実の脚柱。裾広がり の脚台部。脚台端部は 面をもちたちあがる。	外面部表面剥離 の為調整不明 若干の刷毛目の痕跡 あり、脚台端部ヨコ ナデ 内面、脚台にあらい ヘラミガキ 脚台にもろい痕跡あ り 脚台端部外面に煤の 付着	胎土：4mm以下の砂 粒を含む。 緻密。 焼成：良好 色調：淡灰褐色	
3・46 37	E-7 黒色粘質土層	— 10.4 7.3 (残存高)	杯部欠損。 中空の脚柱。裾広がり の脚部は端部に面をも ち下方へわずかに肥厚 する。	外面部磨滅のため調 整不明 脚台端部はヘラナデ 内面はヨコナデ しづり日の痕跡 脚台部据に2条の沈 線文の痕跡	胎土：3mm以下の砂 粒を含む。 緻密。 焼成：良好 色調：灰褐色	
2・45 38	F-6 灰黑色砂質土層	— 3.7 3.6 (残存高)	杯部欠損。 中実の脚柱。裾広がり の脚台部。	内外面とも磨滅によ り調整不明 指頭圧痕が多く残る ミニチュア	胎土：3mm以下の砂 粒。 やや粗雑。 焼成：良好 色調：明灰色	

鼓形土器

図版番号	山土地区名 層位名	法量 (cm)	口 径 脚根径 器 高	形 態	技 法	備 考
4・45 54	D-7 灰黑色粘質土層 (沙まじり)	— 5.3 5.7 4.0	口縁部は頭部から斜外 方に伸びる。脚部は斜 めに開く。口縁端部及 び脚根端部は丸みをも つ。口縁上位に焼成前 に2孔を穿っている。 ミニチュア。	外面部全面に指頭圧 痕 内面はナデ	胎土：3mm以下の砂 粒を含む。緻 密。 焼成：良好 色調：灰褐色	

筒形土器

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm)	底径 器高	形 態	技 法	備 考
4・45	E-4		3.2 5.5	上部欠損のため全体の 形状は不明。	・外面は磨滅のため調整 不明であるが、部分的に 指頭圧痕が残る ・残存部上位に2条の施 描沈線文 ・内面にしづら目痕跡	胎土：0.5～2mm大の 砂粒を含む。 緻密。 焼成：良好 色調：明橙褐色
51	暗黄灰色砂層		(残存高)			

コップ形土器

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm)	口徑 底径 器高	形 態	技 法	備 考
3・45	E-8 溝100 暗黄灰色 砂質土層		6.8 4.2 6.8	やや内彎する口縁部。 口縁端部は丸みをもつ。	・内外面全体に指頭圧 痕が残る。指押えの 後ナデ。底部外面に ヘラ状工具の角によ る傷跡。	胎土：2mm以下の砂粒 を含む。緻密。 焼成：良好 色調：灰褐色
41	D-4 灰黑色砂質土層	— 3.2 5.0 (残存高)		底部と体部の一部のみ 残存。 ミニチュア。	・外面はタテヘラミガ キ ・内面はナデ	胎土：0.1～3mm大の 砂粒を含む。緻 密。 焼成：良好 色調：灰褐色
3・45	E-8 灰黑色粘質土層		7.9 5.3 6.1	やや内彎する口縁部。 口縁端部は丸みをもつ。 体部は斜め外方に伸び る。	・外面はタテ方向のヘ ラナデの後、ナデ ・内面は体部下半はヨ コ方向の刷毛目、上 半から口縁部にまで ヨコナデ ・体部外面に黒斑	胎土：0.5～1mm大の 砂粒を含む。 緻密。 焼成：良好 色調：淡灰褐色
4・45	E-4 灰黑色粘質土層	— 3.4 3.2 (残存高)		底部と体部の一部のみ 残存。 ミニチュア。	・内外面とも指頭圧痕 ・内外面ともわずかに ナデの痕跡	胎土：4mm以下の砂粒 を含む。 焼成：良好 色調：灰褐色

筋鉢車

図版番号	出土地区 層位名	法量(mm)			重量 (g)	備考
		直径	厚さ	孔径		
7・46・49 95	D-7 井戸3 黒色粘質土層 (ブロック状) (灰色砂層) 小石混り	45	17	6	37.3	模様あり
7・49 96	E-3 灰黑色粘質土層	47	12	6	33.6	
7・49 97	C-5 暗黄灰色 砂質土層	51	7	6~10	20.7	再加工
7・49 98	F-6 黒色粘質土層 (下層)	48	13	6~7	31.2	
7・49 99	D-3 黒色粘質土層	49	14	7	(32.4)	一部欠損
7・49 100	D-4 明黄灰色 砂質土層	45	11	4~7	(27.5)	一部欠損
7・49 101	E-4 灰黑色砂質土層	(48)	15	(12~14)	(18.0)	半欠
7・49 102	E-6	47	7	(12)	(10.5)	再加工 半欠 周縁研磨
7・49 103	D-4 溝105 灰黑色粘質土層 (木片多し)	(48)	18	(6~10)	(16.2)	半欠
7・49 104	D-4 黒色粘質土層	50	14	(6~7)	(20.4)	半欠
7・49 105	F-8 黒灰色粘質土層	34	13	6~7	13.8	

土製円板

図版番号	出土地区名 層位名	法量				備考
		長径 (mm)	短径 (mm)	厚み (mm)	重さ (g)	
8・50 106	C-4 溝1 灰黑色粘質土層	47	44	8	20.7	周縁一部研磨 一部欠損?

図版番号	出土地区名 層位名	法 量				備 考
		長 径 (mm)	短 径 (mm)	厚 み (mm)	重 さ (g)	
8・50 107	D-5 暗黃灰色砂層	51	45	8	27.3	周縁研磨
8・50 108	D-5 灰黒色粘質土層	52	48	8	25.4	
8・51 109	C-4 黒色粘質土層	62	56	10	37.3	
8・51 110	D-4 灰黒色粘質土層	42	38	9	20.7	周縁一部研磨
8・50 111	D-3 灰黒色砂質土層 (砂まじり)	42	38	10	17.7	
8・51 112	F-9 灰黒色粘質土層	41	39	6	13.1	外面スス付着
8・50 113	C-4 灰黒色粘質土層	41	34	8	14.7	
8・50 114	D-5 灰黒色粘質土層 (木片多し)	36	33	7	10.9	周縁研磨 外面スス付着
8・50 115	D-4 暗黃灰色 砂質土層	36	34	5	8.8	周縁一部研磨 外面スス付着
8・51 116	D-4 灰黒色粘質土層	42	39	9	13.3	
8・51 117	F-9 落ち込み 206 灰黒色砂層	40	32	8	13.7	
8・50 118	D-5・6 間 観察用断面 暗黃灰色砂層	35	29	10	13.8	周縁研磨
8・50 119	F-9 灰黄色砂礫層 (小石多し)	40	21	9	10.5	一部欠損?
8・50 120	F-9 灰黒色粘質土層	40	36	7	15.2	両面スス付着 口縁部を残す

投 弹

図版番号	出土地区名 層位名	法 量				備 考
		長 程 (cm)	中 程 (cm)	短 程 (cm)	重 さ (g)	
4・45 56	C-5, C-6 闇観察用断面	5.5	2.9	2.4	32.8	土製
4・45 57	E-8 西側 観察用断面 暗黄灰色 砂質土層	4.6	3.0	2.6	32.0	土製
4・45 58	F-9 落ち込み 206 灰黑色砂層	3.4	2.8	2.3	22.4	石製

石 壺 丁

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm) (g)	長 さ 幅 厚 紐孔間距離 重 量	特 徵	備 考 (石材)
9・52 121	E-7 灰黑色粘質土層	8.1(残存長) 3.6(最大) 0.5(〃) 2.5 25.6		<ul style="list-style-type: none"> 長方形態 片刃。身幅が狭い長方形。背部はやや彎曲氣味 B面右孔に縦擦れ痕あり 刃先は細かな剥離によりつぶれ、そのエッジに背擦れ痕が著しい B面斜め方向の研磨痕 刃部は左右の研磨痕 	粘板岩
9・52 122	D-5 黑色粘質土層	7.9(残存長) 5.2 0.7 2.6 45.0		<ul style="list-style-type: none"> 長方形態 両刃。刃部・背部はやや彎曲氣味 A面に右上一左下、左上一右下、上下の研磨痕 A面左孔の右下及び右孔の左上に未貫通の穿孔痕あり B面右上一左下の研磨痕 B面右孔の右に未貫通の穿孔痕あり B面右孔に縦擦れ痕あり 	粘板岩
9・52 123	E-7 灰黑色粘質土層 (木片多)	9.7(残存長) 4.7 0.8 2.5 64.0		<ul style="list-style-type: none"> 片刃、刃部はやや彎曲氣味 両面に研磨のおよばない剥離面あり 刃頭端部は研ぎ直しがみられる 刃先の一部に刀溝れあり A、B両面とも全体に磨滅している 	頁岩

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm) (g)	長さ 幅厚 縫孔間距距離 重 量	特 徴	備 考 (石 材)
9・52	D-5 黒色粘質土層	9.3(残存長) 4.4 0.7 2.6 49.9	• 片刃。刃部・背部はやや彎曲気味 • 刃面は研ぎ直しがみられる • 刃先に刃潰れあり • 肉面とも磨滅している	泥岩	
9・53	D-4 淡黄灰色 砂質土層	7.4(残存長) 4.3 0.7 1.9 50.4	• 両刃。刃部は彎曲気味 • 火にあたっている為、調整等不明	泥岩	
9・53	E-8 灰黒色砂質土層	5.6 (残存長) 4.0 0.7 2.6 25.3	• 片刃。背部は彎曲気味 • 刃部は左右の研磨がみられる • B面に左上→右下、左右の研磨痕あり • 刃先からB面にかけての磨滅あり	緑泥片岩	
10・53	D-4 灰黒色粘質土層 (砂まじり)	8.6(残存長) 4.9 0.7 2.3 50.8	• 両刃。刃部・背部ともやや彎曲 • 4ヶ所の穿孔あり • 刃部は研ぎ直しがみられる • 刃先からB面にかけての磨滅あり • B面左2ヶ所の穿孔に紐擦れ痕あり • A面左下→右上、左右方向の研磨がみとめられる • B面全体に磨滅	粘板岩	
10・53	E-6 灰黒色砂質土層 (砂まじり)	9.4(残存長) 4.1 0.6 2.7 35.7	• 片刃。身幅は狭く、刃部は直刃に近い外側刃 • 刃部は研ぎ直しがみられる • 刃先からB面にかけて磨滅あり • B面左下→右上方向の研磨あり	緑泥片岩	
10・54	C-4 灰黒色粘質土層	10.5 4.7 0.7(最大) 1.9 56.2 g	• 片刃。身幅は広く、浅い外側刃で縫孔は背寄りにある • A面左縫孔右に未貫通の穿孔痕あり • 両面とも磨滅あり • 刃先の一部に刃潰れあり • 両面とも研磨のおよぼない剥離面あり	緑泥片岩	
10・54	D-4 黒色粘質土層	9.2(残存長) 4.2 0.7 1.7 31.3	• 片刃。A面大きな剥離あり縫孔穿孔の後剥離 • 刃先からB面にかけて磨滅あり • A面左下→右上、上下方向の研磨痕あり	粘板岩	

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 紐孔間距離 重 量	特 徴	備 考 (石 材)
10・54 131	D-5 黒色粘質土層		8.2(残存長) 5.3. 0.8 2.5 56.9	・片刃。両面とも研磨のおよばない剥離面あり ・両面とも磨滅あり ・刃先からB面にかけて磨滅あり ・B面右紐孔の上に未貫通の穿孔痕あり ・身幅は広い	緑泥片岩
10・54 132	B-4 灰黑色粘質土層		9.4(残存長) 5.6 0.7(最大) 2.1 58.9	・片刃。両面とも研磨のおよばない剥離面あり ・刃先からB面にかけて磨滅あり ・両面とも磨滅あり ・B面右紐孔に縦擦れ痕あり ・身幅は広い	泥 岩
10・55 133	F-6 黒色粘質土層		10.4(残存長) 4.7 0.9 1.9 63.9	・片刃。背部に背潰れ痕あり ・両面とも乱方向の研磨あり ・刃部に研ぎ直しがある ・片理を多く残す	粘板岩
11・55 134	D-5 黒色粘質土層		6.4(残存長) 3.9 0.6(最大) — 22.8	・片刃。端部は鋭さがなく、端部にいくにつれてうすくなる ・刃先は刃潰れ痕あり ・A面は上下、左下→右上方向の研磨痕あり ・刃部に研ぎ直しあり	緑泥片岩
11・55 135	E-7 黒色粘質土層		11.0(残存長) 5.2 1.2 — 72.9	・両刃。穿孔なし ・背部と刃部に背潰れ痕あり、特に背部で著しい ・両面とも磨滅あり	花崗岩質砂岩
11・55 136	F-6 排水溝 青灰色砂層		11.9(残存長) 5.5 0.8 2.6 89.6	・片刃。背部に背潰れ痕あり ・両面に磨滅あり ・刃先からB面にかけて磨滅あり ・B面右孔に縦擦れ痕あり	泥 岩
11・56 137	E-6 灰黑色粘質土層		6.4(残存長) 3.5 0.6(最大) — 18.5	・片刃。刃先からB面にかけて磨滅あり ・刃部に刃潰れ痕あり ・A面に左右方向の研磨痕あり ・B面に左下→右上方向の研磨痕あり	緑泥片岩
11・56 138	E-7 溝 24 暗黄灰色砂層		8.0(残存長) 4.8(最大) 0.8() 2.0 51.9	・片刃。両面とも研磨のおよばない剥離面あり ・刃部被明確 ・B面両孔とともに縦擦れ痕あり ・B面上下方向の研磨痕あり	砂 岩

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm) (g)	長さ 幅 紐孔間距・離 重量	特 徴	備考 (石 材)
11・56	E-6		7.3(残存長) 4.6 0.7 — 41.8	<ul style="list-style-type: none"> 片刃。身幅の広いタイプ 両面とも研磨のおよばない剥離面あり 刃部は左下→右上方向の研磨痕あり B面刃部付近左右方向のあらい研磨痕あり 刃先に刃潰れ痕あり B面孔に紐擦れ痕あり 	
139	灰黒色粘質土層 (砂まじり)				緑泥片岩
12・56	D-3 排水溝		8.0(残存長) 4.9 5.5	<ul style="list-style-type: none"> 片刃。刃部左右方向のあらい研磨痕あり B面に左下→右上方向の研磨痕あり 両面とも研磨のおよばない剥離面あり 	
140	黑色粘質土層		2.7 35.1		粘板岩
12・57	D-3		10.1(残存長) 4.2	<ul style="list-style-type: none"> 片刃 身幅の狭いタイプ 刃部に背潰れ痕あり 両面とも研磨のおよばない剥離面あり 	
141	黑色粘質土層		0.7 2.6 44.8	<ul style="list-style-type: none"> 体部中央で斜めにすり切りがおこなわれて いる 刃部に左右方向のあらい研磨痕あり B面に左下→右上方向の研磨痕あり B面の孔に紐擦れ痕あり 	粘板岩
12・57	D-5		6.3(残存長) 4.7(最大) 0.7(〃)	<ul style="list-style-type: none"> 片刃 両面とも研磨のおよばない剥離面あり 身幅の広いタイプ 	
142	黑色粘質土層		— 30.8	<ul style="list-style-type: none"> 刃先からB面にかけて磨滅あり 刃部に刃潰れ痕あり 	砂岩
12・57	C-3		8.7(残存長) 3.65 0.95(最大)	<ul style="list-style-type: none"> 片刃 刃部及び背部とその周辺のみ研磨痕あり 刃部は左右方向のあらい研磨痕あり 刃先からB面にかけて磨滅あり 	
143	黑色粘質土層		— 37.4		泥岩
12・57	E-6		14.9(残存長) 4.1 0.9	<ul style="list-style-type: none"> 片刃 身幅の狭いタイプ 刃部稜明確 両面とも研磨のおよばない剥離面あり 	
144	灰黒色粘質土層 (砂まじり)		2.1 89.9	<ul style="list-style-type: none"> 火にあたっている 両面の孔に紐擦れ痕あり 	頁岩
13・58	D-9, E-9 間觀察用断面 暗黃灰色砂層		9.0(残存長) 5.3 0.7 2.0 55.0	<ul style="list-style-type: none"> 両刃 身幅の広い形態 刃部に左右方向の研磨痕あり 刃先には刃潰れ痕あり B面両孔に紐擦れ痕あり 背部に研磨痕あり B面に研磨の及ばない剥離面あり 	粘板岩
145					

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm) (g)	長さ 幅厚 縦孔間距離 重量	特徴	備考
13・58 146	B-5 灰黒色粘質土層	8.9 (残存長) 4.2 0.6 2.1 41.1		<ul style="list-style-type: none"> 片刃 身幅の狭い形態 両面ともに研磨の及ばない剥離面あり 刃先は全て刃潰れ痕あり 刃先には研ぎ直しによる狭い幅の面がつくれている B面両孔に孔擦れ痕あり 	石英粗面岩
13・58 147	D-4 淡黄灰色 砂質土層	9.4 (残存長) 4.7 0.7 2.5, 6.0 50.4		<ul style="list-style-type: none"> 片刃 刃部縁線は明確 穿孔は扁平な円形 刃先に刃潰れ痕あり A面に研磨の及ばない剥離面あり B面に未貫通の穿孔痕あり 両面とも磨滅により光沢をもつ 	粘板岩
13・58 148	E-9 灰黒色砂質土層	15.4 4.0 0.7 1.3 59.6		<ul style="list-style-type: none"> 片刃 身幅の狭い形態 両面ともに研磨の及ばない剥離面あり 刃部は研ぎ直しがみられる 刃部は左右方向の研磨痕あり 刃先は刃潰れ痕、背部は背潰れ痕がある A面左孔の左に未貫通の穿孔痕あり B面左孔に紐擦れ痕あり 	粘板岩
13・59 149	C-4 落ち込み 214 灰黒色粘質土層	4.4 (残存長) 5.1 0.9 (最大) 3.2 22.8		<ul style="list-style-type: none"> 片刃 身幅の広い形態 刃部に左右方向の研磨痕あり 両面とも上下、左下→右上方向の研磨痕あり 刃先よりB面にかけての磨滅あり 刃先に刃潰れ痕あり 	泥岩
14・59 150	B-4 灰黒色粘質土層	7.3 (残存長) 3.7 (〃) 0.9 (最大) — 29.9		<ul style="list-style-type: none"> 刃形不明 形態不明 両面ともに研磨の及ばない剥離面あり A面に左下→右上方向の研磨痕あり 	粘板岩
14・59 151	F-8 灰黒色砂質土層 (粘土まじり)	6.5 (残存長) 5.6 (最大) 1.0 (〃) — 61.7		<ul style="list-style-type: none"> 片刃の石庖丁の再加工品(?) 体部半分をすり切により切断 元の刃部には左下→右上方向の研磨痕あり 刃部は研ぎ直しがみられる B面に乱方向の研磨痕あり 背部も数回の研磨がみられる 	緑泥片岩

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm) 重 量 (g)	長さ 幅 厚 縫孔間距・縫 隙 重 量	特	備考 (石 材)
14・59	E-8		9.0 4.6 0.7 2.4, 2.4 34.8	• 用途不明 • A面に未貫通の穿孔痕あり • 両面とも研磨は施されていない	
152	明青灰色 砂質土層				粘板岩
14・60	D-4		12.8(残存長) 6.85(残存幅) 0.75	• 両刃。直刃。 • 中央部背寄りに1孔、端部付近に1孔を穿っている。 • 孔を切って背頂部は欠損。 • 孔は両面から穿孔されている。	
153	黒色粘質土層		4.5 76.5 (残存重)	• 背面は平坦面を呈し、両面との境で角をもつ • 背部付近に一部左上→右下方向の研磨痕あり • 刃部から体部下半にかけて火にあたっているため研磨等は不明	大型石庖丁 泥岩
15・60	D-5		9.0(残存長) 8.8 1.2	• 両刃。直刃。両端部欠損。 • 背部よりに2孔を穿孔。 • 両面に研磨のおよばない剥離面がある。 • 背面は平坦面を呈し、両面との境で角をもつ • A面(圓面左側)の欠損面は、欠損後再研磨し、両面との境で角をもつ。	
154	暗黄灰色砂層		5.9 152.0 (残存重)	• 両面とも全面に光沢があり、左右方向の研磨がみられる。 • 刃部において左右方向の研磨 • 刃先は刃こぼれ状の剥離痕	大型石庖丁 綠泥片岩
15・60	C-3 溝状透構 灰黑色粘質土層		12.2(残存長) 7.9(残存幅) 0.8 — 110.0 (残存重)	• 両刃。 • 刃部は外彎し、背部は半円形状に丸く彎曲する。 • 背部は平坦面を呈し、両面との境に角をもつ • 刃部は両面とも繊かな左右方向の研磨痕 • 体部は左下→右上方向の研磨 • 刃先は刃こぼれ痕がみられる。 • 両面とも研磨のおよばない剥離面が残っている。 • 中央部背寄りに1孔が穿孔されている。	大型石庖丁 綠泥片岩

石 錐

図版番号	出土地名 層位名	法量 (mm) (g)	現長 幅 厚 重 量	特 徴	備 考
16・61 156	D-5 青灰色砂層	26 18 6 2.5		<ul style="list-style-type: none"> 基辺の凹みは浅い。 両面ともに基部中央に大剥離面を残す。 側辺の調整剥離はある。 中央断面は扁平な六角形。 	凹基無茎式
16・61 157	D-3 黒色粘質土層	25 18(最大) 2(〃) 1.1		<ul style="list-style-type: none"> 基辺の凹みは浅い。 先端及び逆刺部分の片方欠損。 両面ともに基部に大剥離面を残す。 側面沿いに細かな調整剥離を施す。 両面ともやや風化している。 中央断面は扁平な六角形。 	凹基無茎式
16・61 158	D-3 黒色粘質土層	24 21(最大) 3(〃) 1.5		<ul style="list-style-type: none"> 基辺の凹みは浅い。 片面の基部に大剥離面を残し、他方には自然面が残る。 側辺は、未調整。 中央断面は扁平な菱形。 全体的に風化(?) 	凹基無茎式
16・61 159	E-4 落ち込み 203 黒色粘質土層	29 13 3 1.1		<ul style="list-style-type: none"> 基辺の凹みは浅い。 両面ともに大剥離面を残す。 両面両側辺には、細かな調整剥離が施されている。 側辺に段を有する。 中央断面は菱形。 	凹基無茎式
16・61 160	E-5 落ち込み 206 灰黒色粘質土層 (木片多し)	38 20 6 3.3		<ul style="list-style-type: none"> 基辺はややV字形に近い凹みを有する。 片面は鎌が通っているが、他方はステップ状を呈する剥離が混在する。 両面両側辺には、細かな調整剥離が施されている。 逆刺は鋭い。 中央断面は菱形。 	凹基無茎式
16・61 161	E-5 黒色粘質土層	33.5 23.5(最大) 7(〃) 4		<ul style="list-style-type: none"> 基辺の凹みは浅く平基無茎式に近い。 側辺は外彎して下る。 両面ともに主要剥離面が残る。 側辺に不ぞろいの鋸歯状剥離を施している。 中央断面は扁平な菱形。 	凹基無茎式
16・61 162	E-3 落ち込み 204 黒灰色粘質土層	49 56(最大) 5(〃) 9.9		<ul style="list-style-type: none"> 母岩から打ち割ってできた剥片を成形した後、刃部を調整している。 両面ともに大剥離面を残す。 基辺はわずかに斜基である。 片面にステップ状の剥離面が残る。 側辺の付近のみ調整剥離を施す。 先端から基端は彎曲している。 中央断面は台形。 	平基無茎式

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (mm) (g)	長 幅 厚 重 量	特 徴	備 考
16・61	F-7	45 17	6 2.9	・側辺は先端から直線的にのびる。 ・両面とも鎬が通っている。 ・両面ともに基部中央に大剥離面が残る。	円基無茎式
163	黒色粘質土層	6 2.9		・両面両側辺には細かな調整剥離を施している。 ・中央断面は菱形。	
16・61	D-4	47 18	5 3.9	・両平面とともに剥離は全体におよぶが、わずかにステップ状の剥離が混在する。 ・両面両側辺沿いには細かな調整が施されている。	尖基無茎式
164	黒色粘質土層	5 3.9		・中央断面はレンズ状。	
16・61	E-6 暗黄灰色 粘質土層 (粘土まじり)	37 19 6 3.2		・両平面とともに剥離は全体におよぶが、わずかにステップ状の剥離が混在する。 ・両面両側辺沿いには、不ぞろいではあるが細かな調整が施されている。 ・中央断面は菱形	尖基無茎式
16・61 166	D-6 溝 23 暗黄灰色砂層	49.5 17(最大) 4(〃) 2.9		・両面ともに基部中央に大剥離面が残す。 ・両側辺先端付近に・状突起を有している。 ・両面両側辺沿いには、あらい剥離の後細かな調整を施している。 ・・状突起の断面はレンズ状を呈し、逆剥離の断面は扁平な六角形である。	尖基無茎式

石 剣

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (mm) (g)	長さ 幅 厚 重 量	特 徴	備 考
17・62	E-7	9.0 (残存長)	3.6 1.0 51.7	・有茎。 ・区と茎は略直角をなす。 ・両面ともなだらかで鎬はない。 ・中央断面は杏仁形を呈する。	石材：緑泥片岩
173	黒色粘質土層	3.6 1.0 51.7		・両側辺のエッジはうすく鋸い。 ・両面とも丁寧な研磨。 ・先端部欠損。	
17・62 174	F-8 灰黒色砂質土層	10.4 (残存長) 3.4 1.0 42.2		・基部破片。 ・細身。 ・鎬は両面中央を通る。 ・基部端部は斜めに切斷し研磨。 ・基部端から cm の両側縁は研痕により面をもつ ・断面は菱形。 ・両面とも丁寧な研磨。	石材：粘板岩 (高島石)

石斧

図版番号	出土地名 層位名	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重 量	特徴	備考
18・62 175	F-8 観察用断面 灰黑色粘質土層	6.5 (残存長) 5.6 4.0 23 (残存重)		<ul style="list-style-type: none"> 最大幅は刃部。 基部中央部付近で直横に破損。 基部四面には、打撃による凹みがあり、四箇所ともほぼ同様にある。 刃部先端には打撃痕がある（幅3mm） 	大型蛤刃石斧 石材：泥岩 底石に転用
18・62 176	F-8 排水溝	6.5 (残存長) 7.4 4.4 284 (残存重)		<ul style="list-style-type: none"> 最大幅は基部中央部。 刃部は丸みをもつ。 刃先全体に磨滅がある。 刃先には両面とも再研磨された痕跡がある。 表面は両面とも全体に丁寧に研磨されている。 刃先中央部に打撃痕あり。 	大型蛤刃石斧 石材：輝石安山岩
18・63 177	D-4 溝105 灰黑色粘質土層 (木片多し)	14.7 (残存長) 6.35 4.75 541		<ul style="list-style-type: none"> 最大幅は刃部。 A面で刃部、B面で基部が大きく剥離欠損。 両側面に凹みがある。 表面は両面とも全体に丁寧に研磨されている。 	大型蛤刃石斧 石材：泥岩
18・63 178	F-6 黑色粘質土層	4.2 2.9 1.2 22.5		<ul style="list-style-type: none"> 基部壊欠損。 平面は基部中央付近に最大幅をもち刃部に下がるに従いやや狭まる長方形状。 断面は扁平な橢円形。 刃部は両刃気味で、刃先には小さな刃こぼれがみられる。 両側面は打ち欠きを行った後研磨して整形している。 全体に丁寧な研磨が施されているが、剥離が深く研磨のおよばない部分がある。 	扁平片刃石斧 石材：サヌカイト
18・63 179	C-4 黑色粘質土層	9.0 3.5 1.3 49.8		<ul style="list-style-type: none"> 完形品。 平面は基部より刃部の方へ広がる台形状。 断面は扁平な長方形で薄手である。 平面は両面とも丁寧な研磨を施しているが、両側面は自然面を残す。 	扁平片刃石斧 石材：砂岩

石 槍

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚 重量	特徴	備考
17・62 168	E-6 黒色粘質土層 (下層)	6.9 2.7 1.2 23.3		<ul style="list-style-type: none"> 先端でわずかに彎曲。 両面ともあらかじめ大きな剥離面よりなる。 両面両側面ともステップ状剥離面。 基部欠損。 断面は菱形。 	石材: サスカイト 未製品
17・62 169	D-3 黒色粘質土層	6.9 2.7 1.0 23.2		<ul style="list-style-type: none"> 基部欠損。 両面ともあらい剥離調整。 片面には大剥離面を残し、その側面沿いに剥離調整を施す。 断面は菱形。 	石材: サスカイト 未製品
17・62 170	E-6 (残存長) 黒色粘質土層	8.0 2.7 1.4 34.7		<ul style="list-style-type: none"> 凸然有茎。 先端部と基部端を欠損。 一面はあらい剥離調整を施し、大剥離面を残す。 他面は自然面を残し、その側面を剥離調整。 逆側はなだらかで、抉りは明確。 断面はレンズ状。 	石材: サスカイト

石 小 刀

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (cm) (g)	長さ 幅 厚	特徴	備考
17・62 171	E-5 黒色粘質土層	8.0 1.7 0.7		<ul style="list-style-type: none"> 全体がゆるやかに彎曲し、先端で大きく弧を描く。 先端は鋭い。 断面は先端に向って薄くなり菱形を呈する。 両面とも両側面から丁寧な剥離調整を施している。 基部は斜めに欠損。 	石材: サスカイト

石 匙

図版番号	出土地区名 層位名	法量 (mm) (g)	現長 幅 厚 重量	特徴	備考
16・61 167	E-5 淡黄灰色 砂質土層	29 35 5 4.1		<ul style="list-style-type: none"> 平面形は正三角形を呈し、背頂部につまみあり。 全体を剥離調整。 刃部は両面加工により、両刃の内等刃を呈す 	石材: サスカイト

VII まとめ

高宮八丁遺跡は、安屋川郵便局庁舎建設に伴い発見された遺跡である。今回の調査は、庁舎建設予定の約2,700 m²について実施したものである。今回の調査によって高宮八丁遺跡は、弥生時代前期（畿内第Ⅰ様式中段階）から中期中葉（畿内第Ⅲ様式）に至る古代河内潟北岸の低地に形成された弥生集落であることが判明した。しかし、ここにまとめとするのは、今後の周辺発掘調査において新たな事実も判明する可能性もあり、今回検出した遺構は複雑に交錯しており、遺物もコンテナパット2,000箱を優に越える膨大な量にのぼり、現在も整理作業を継続中で、全ての資料を短期間で完了することは困難であるため、概報としてまとめたものである。個々の遺構及び遺物については、今後の整理の完了をまって逐次報告する計画である。従って、今回の報告は現段階で判明している遺跡の様相であり、今後の遺物整理等の整理作業の進行に伴い修正加筆されることがあることをあらかじめお断りしておきたい。

高宮八丁遺跡の立地する大阪平野の発達については、梶山彦太郎・市原实両氏のすぐれた研究成果（『大阪平野の発達史』及び『續大阪平野発達史』）により、ほぼ解明されているといつても過言ではない。

その研究によると、高宮八丁遺跡は、河内潟の北東に位置し、寝屋川左岸に形成された低湿地に立地している。このことは、今回実施した調査における断面観察及び、検出した膨大な数の溝は、基本的には北東から南西方向の傾斜を示していることからも立証される。

高宮八丁遺跡は、その出土遺物から先述のごとく弥生時代前期（畿内第Ⅰ様式中段階）から中期（畿内第Ⅲ様式）の間生活が営まれていた遺跡である。

各時期のあり方は、遺物包含層の状況や遺構等の構成から大きく2時期に区分することができる。

第1の時期としては、弥生時代前期中葉から前期末までの畿内第Ⅰ様式中段階から第Ⅰ様式新段階の時期であり、第2の時期は、弥生時代前期末から中期中葉までの畿内第Ⅰ様式新段階から第Ⅲ様式の時期である。

これら2時期は、多種・多様で豊富な土器、石器、木製品の出土及び良好な遺物包含層の存在等から、今回の調査区域では住居跡や墓等の遺構は検出していないけれども、弥生前期に始まり中期中葉に至る集落の存在が考えられる。

今日の調査では、D-3~5、E-3~7、F-6・7区の地域（調査区域の北西域）は微高地となっており、その区域での遺構の遺存状況も東側に比べて良く、この西及び北西に広がる微高地に集落が形成されていたものと推察される。しかし、その大部分は調査対象区域外であるため詳細については今後の調査に期するものである。

高宮八丁遺跡で発見されている最も古い段階の土器は、頸部に明確に段をもつ畿内第Ⅰ様式古段階に属している。しかし、出土は溝238下層のみであり、その数は少量である。したがっ

て、現時点では当遺跡の集落成立の時期は畿内第Ⅰ様式中段階にとどめておきたい。

当遺跡の最盛期は、その遺物の出土量からみて弥生時代前期畿内第Ⅰ様式新段階から中期第Ⅱ様式の時期であり、第Ⅲ様式の遺物は少なくなる傾向にある。畿内第Ⅱ様式の時期には、当遺跡の東約800mの海拔60m近い丘陵の頂上附近に太秦の高地性集落が出現する。太秦遺跡は、本格的な発掘調査が実施されていないためその実体は不明であり、今後の調査に期するところが大であるが、その実体が明らかになるとにより高宮八丁遺跡との関連も解明されるものと考えられる。

すべての土器の洗浄、復元が出来ていない現在、土器の問題について論じることは早計の感が否めないところで、生駒主産土器、近江系土器、攝津系土器等他地域の土器の出土も多くみられるため今後十分な検討が必要である。

木製品については、豊富な資料を得ることができ、原材料→粗加工→未製品→完成品という加工工程を示す遺物が出土している。またその中心は鍤、鋤等の農耕具であるが、弓などの狩猟具、石斧の柄などの工具類や容器類も出土している。特に両端に水かきのある櫂の出土は古代河内潟における漁撈あるいは舟の構造を考える上において重要な資料となるであろう。

一般に、集落周辺に広がる後背湿地は水田域として利用されたと考えられており、今回の調査では明らかな水田跡は検出することはできなかったけれども、調査区の南側は、明確な遺構も存在せず、低湿地が広がっていたと推察される。

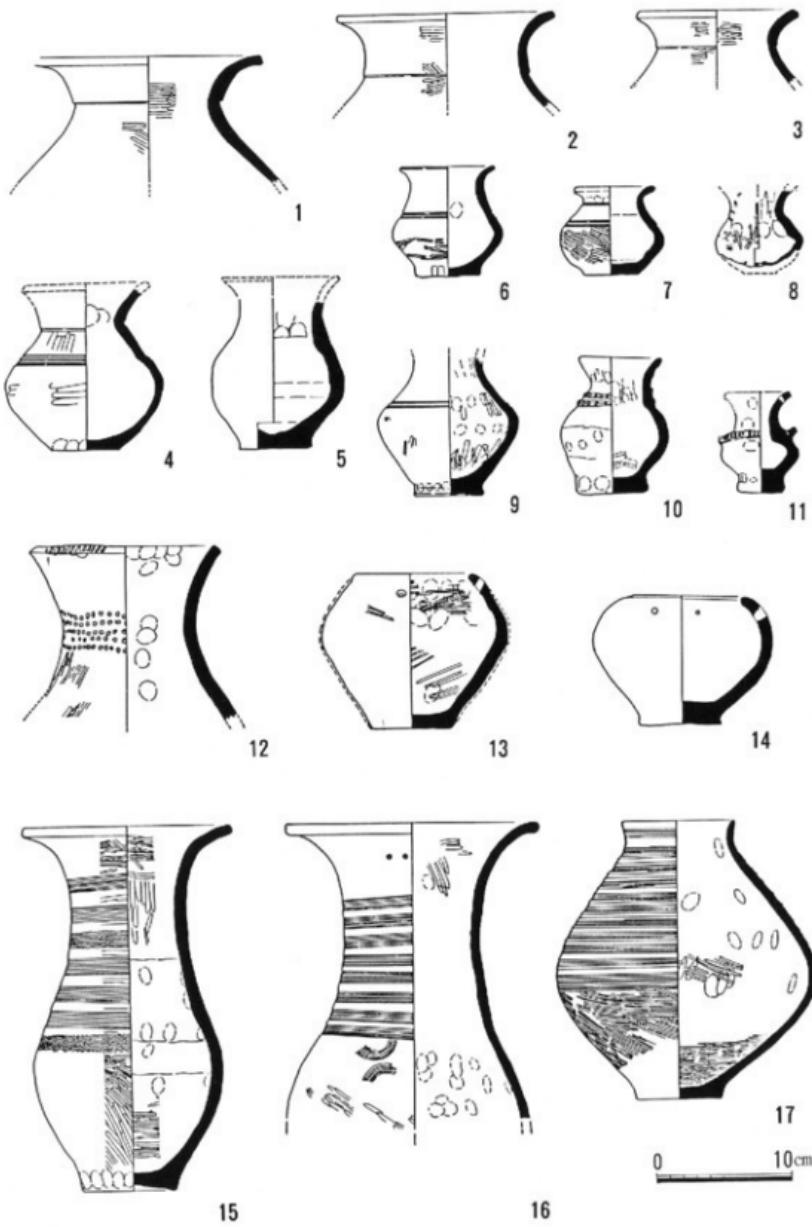
今回実施した植物珪酸体分析の結果において稲の栽培種 (*Oryza sativa*) が検出されており、何よりも炭化米の出土がこの地で弥生前期において稻作が行われていたことを示している。

そして、一方においては、ドングリの貯蔵穴を2ヶ所検出しており、特にD-3区で検出した貯蔵穴からはコンテナパット約10箱分の多量のドングリを出土している。この貯蔵穴の底には、カゴ状の編物が敷かれてあり、ドングリ専用に掘られアクリ抜きのためのものと推察される。このことは弥生人にとってドングリ類の堅果類がいぜんとして重要な食料であることを物語っており、今回の発見は弥生時代における食生活研究についての貴重な資料を提供するものであろう。

最近の発掘調査により、古代河内潟周辺の弥生時代前期の様相は徐々にではあるが解明されつつある。しかしながら北河内地方においては低地の調査例がまだ少なく、弥生時代前期に始まる遺跡についても数例が知られているにすぎず、その大半が採集遺物によっているのが現状である。このようなことからも、今回実施し発見された高宮八丁遺跡のもつ意義は大きく、調査で得られた成果は、多くの未解明な部分を残す弥生時代前期、中期の河内潟周辺における弥生社会の解明研究に寄与するものと考えられる。

図 版

図版1 遺物実測図





18



19



20



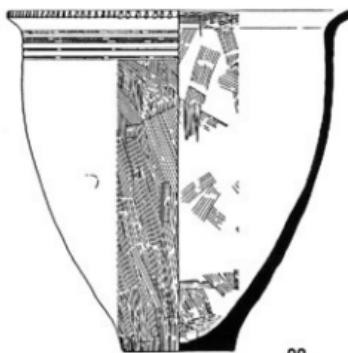
21



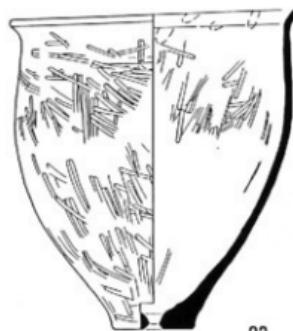
38



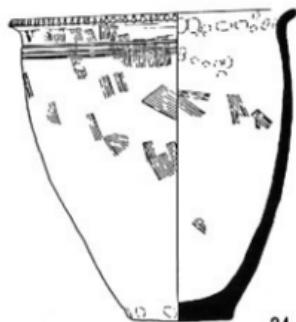
39



22



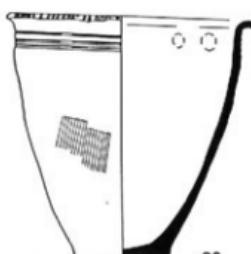
23



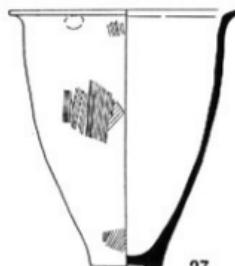
24



25



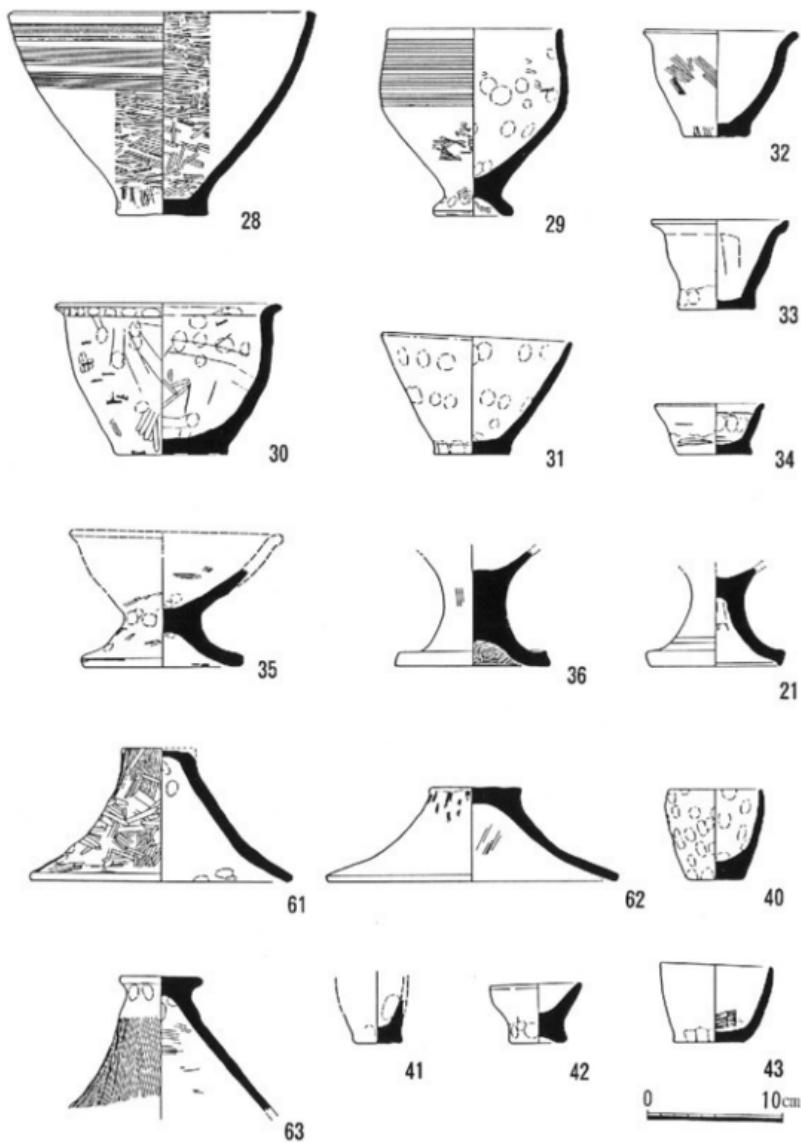
26

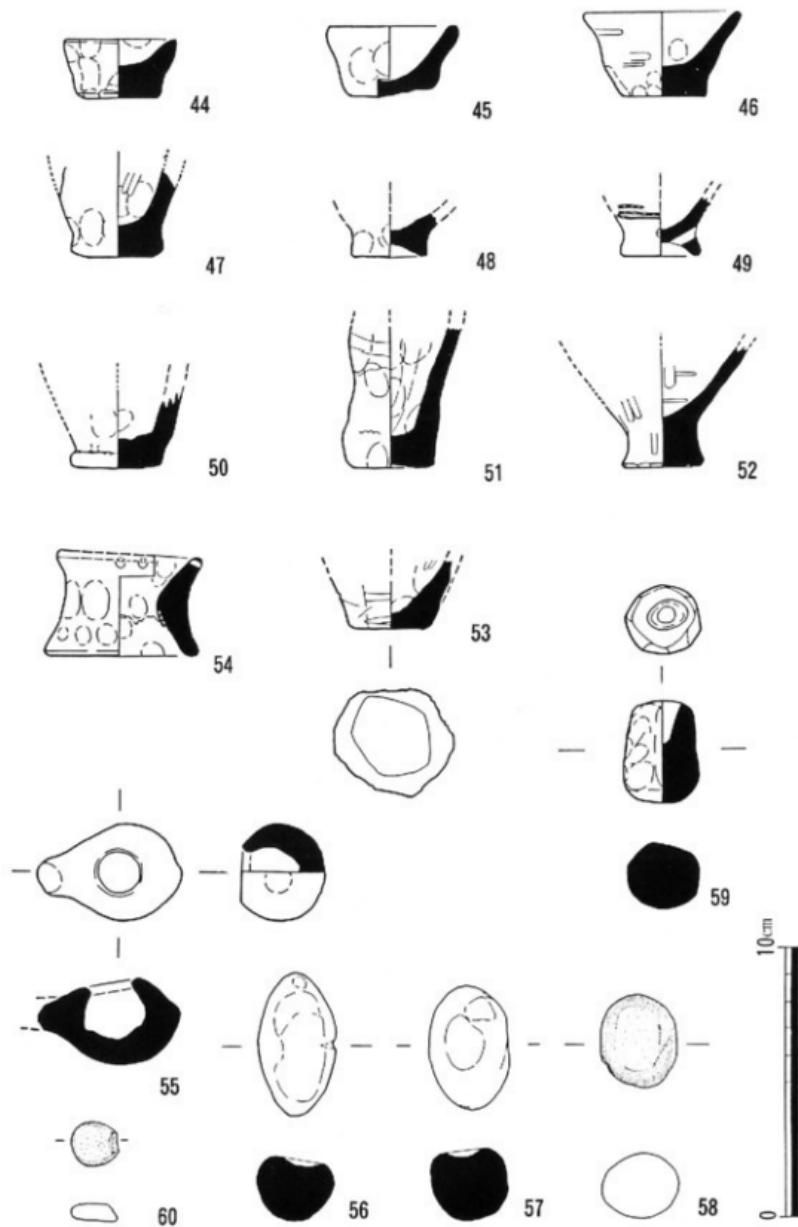


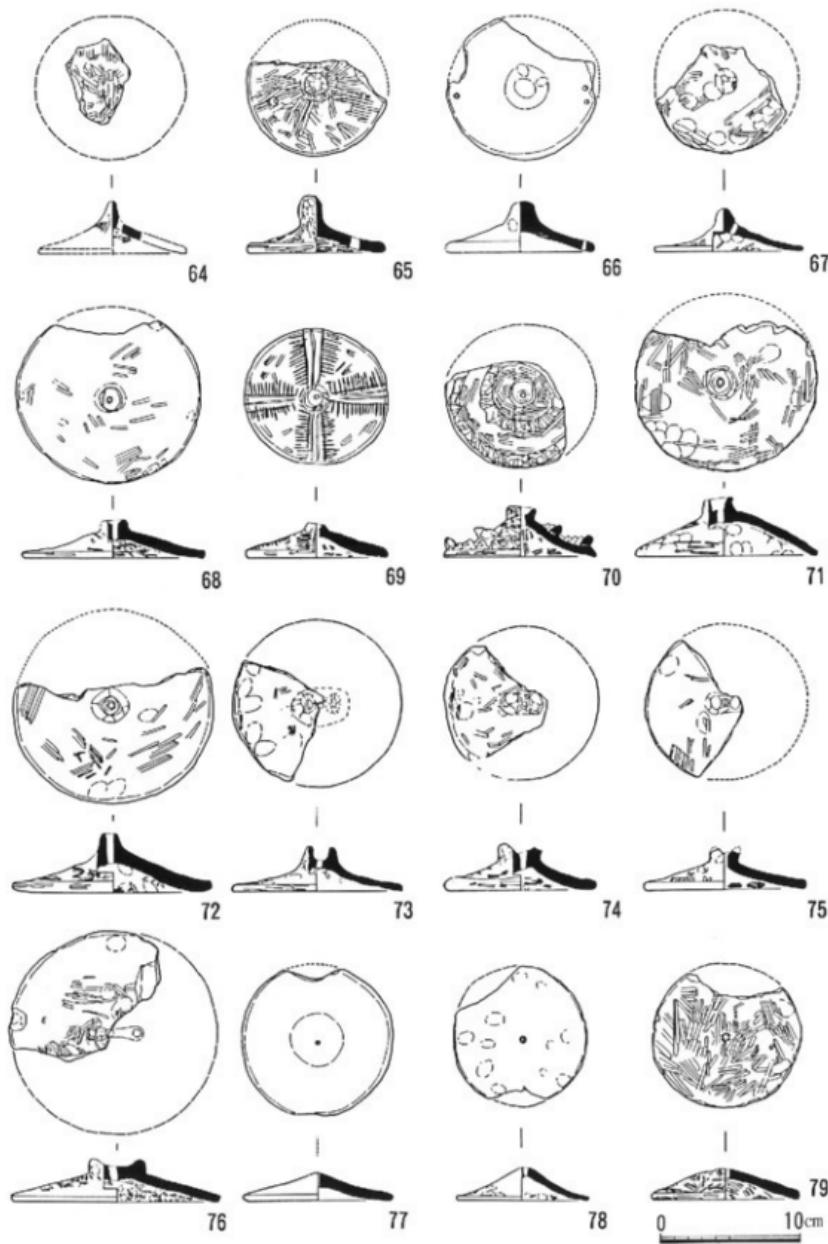
27

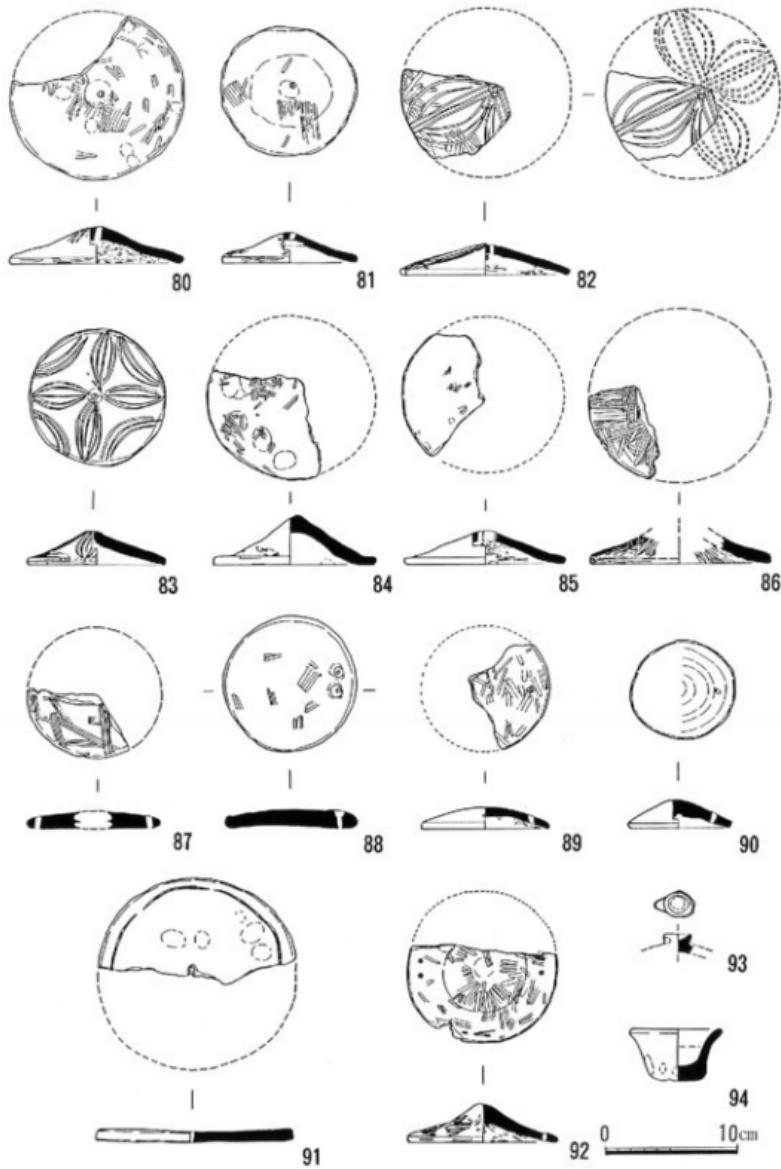
A scale bar indicating 10 cm.

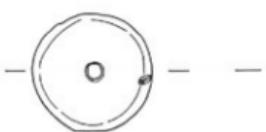
図版3 遺物実測図











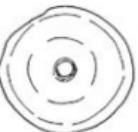
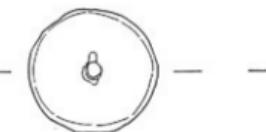
95



96



97



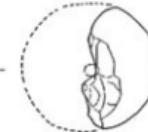
98



99



100



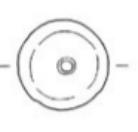
101



102



103



104



105



106



107



108



109



110



111



112



113



114



115



116



117



118

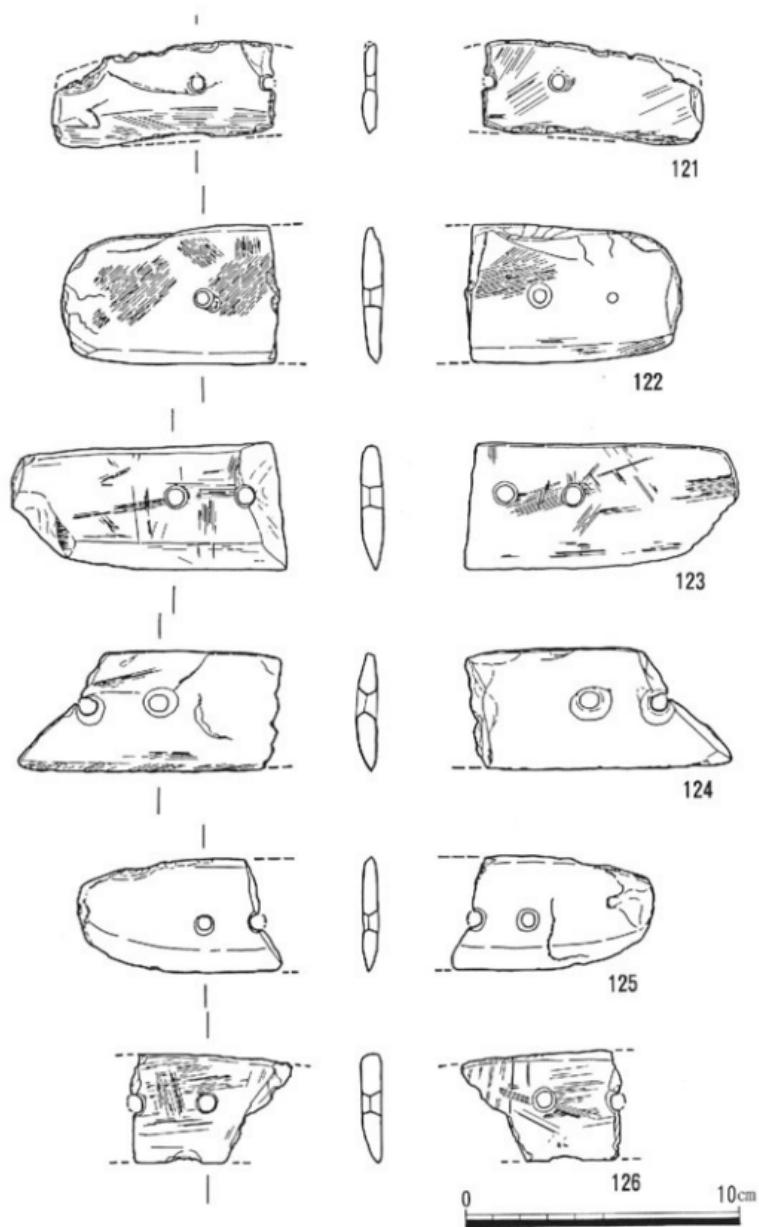


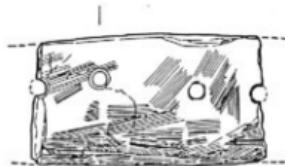
119



120

0 5cm

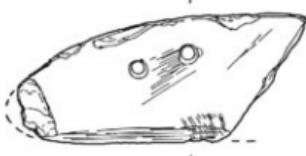




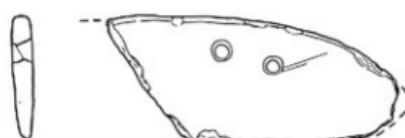
127



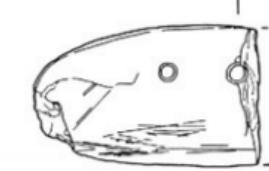
128



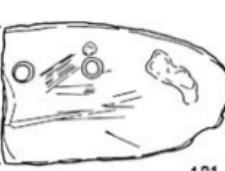
129



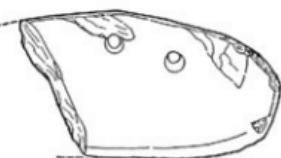
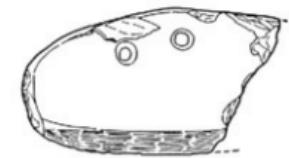
130



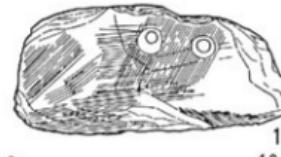
131



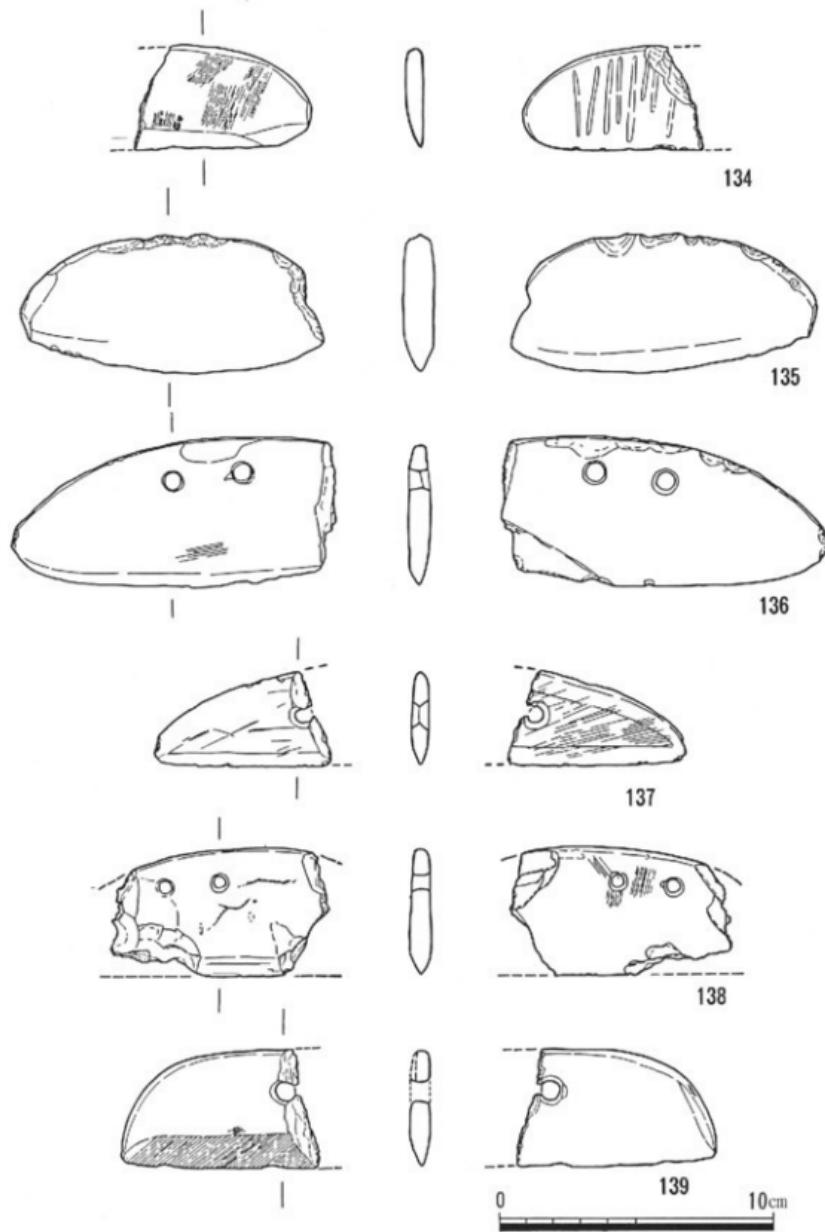
132

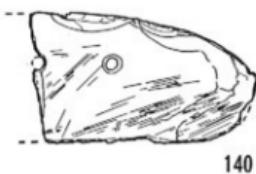
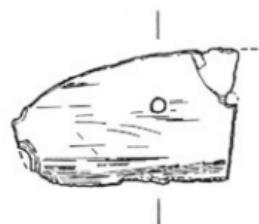


133

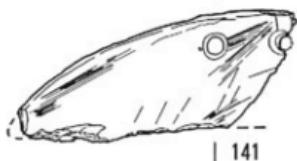


0 10cm

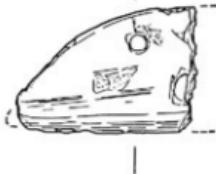




140



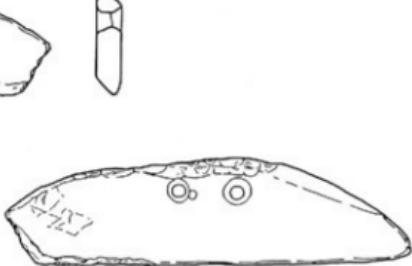
141



142

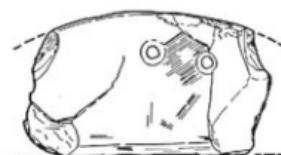
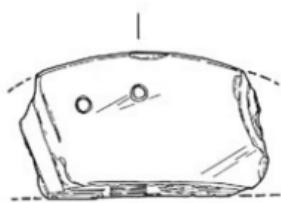


143

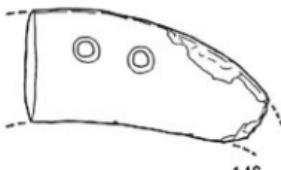
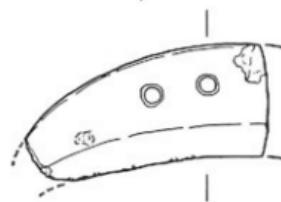


144

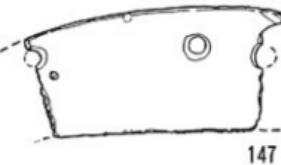
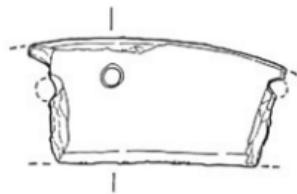
0 10cm



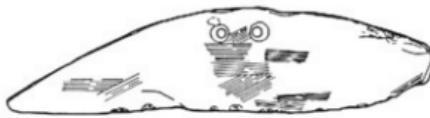
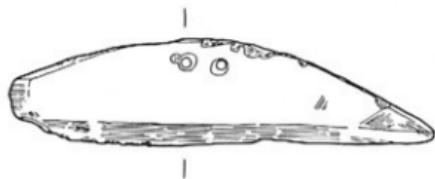
145



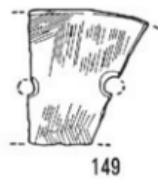
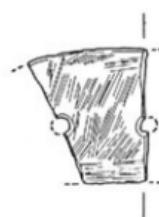
146



147



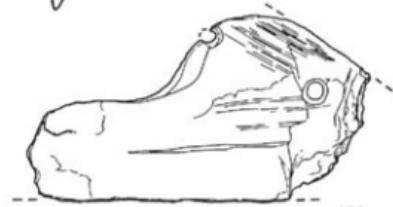
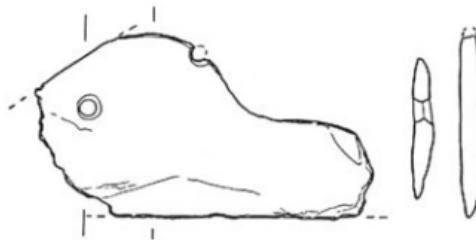
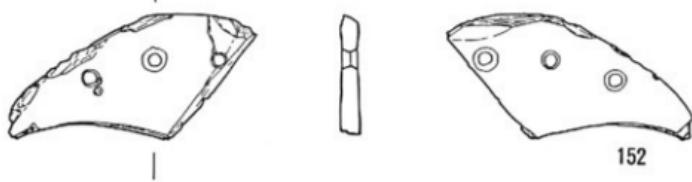
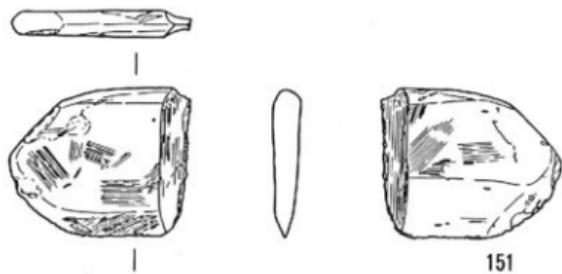
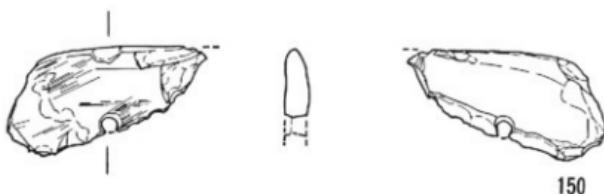
148



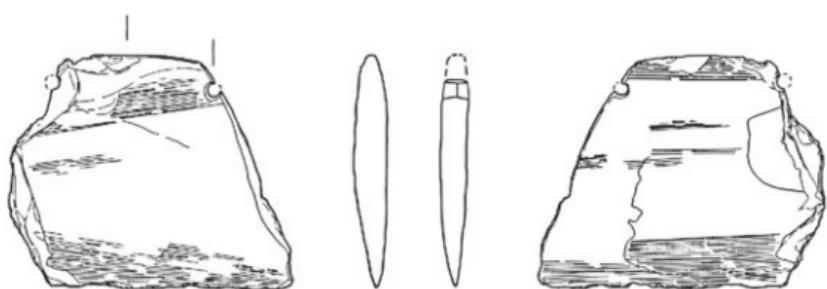
149

0

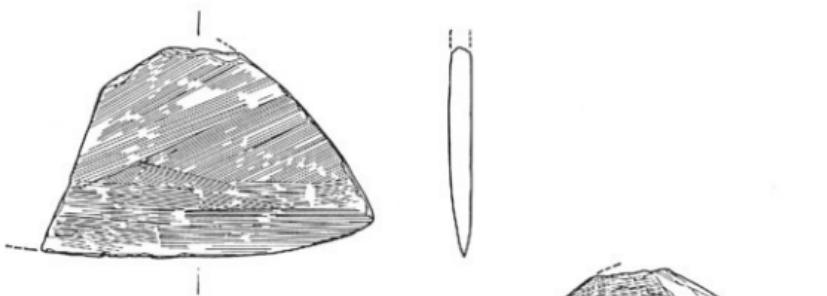
10cm



0 10cm

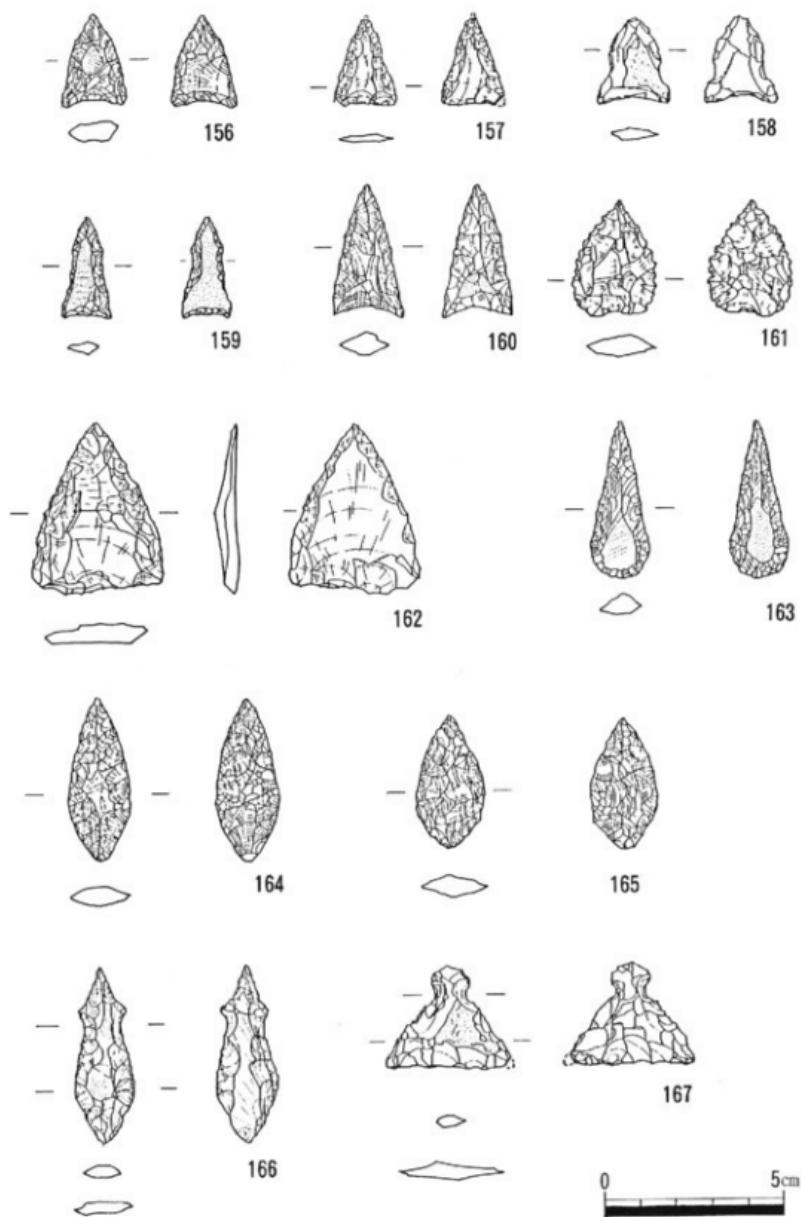


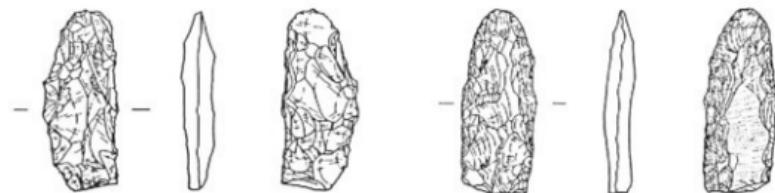
154



155

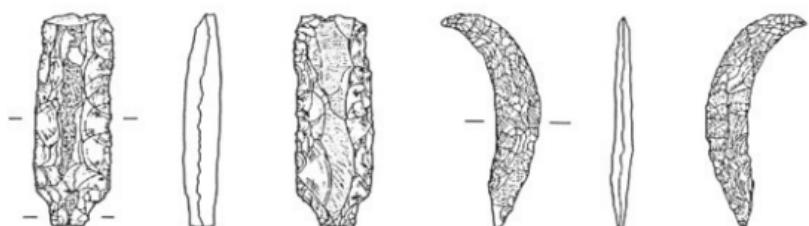
0 10cm





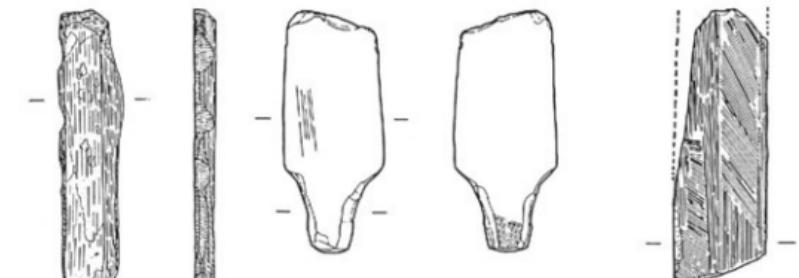
168

169



170

171



172

173

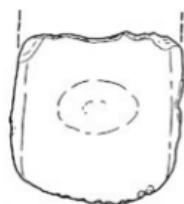
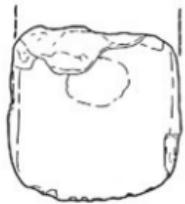
174



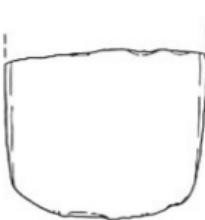
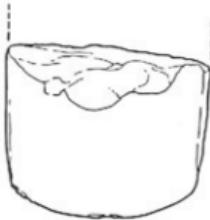
0

10cm

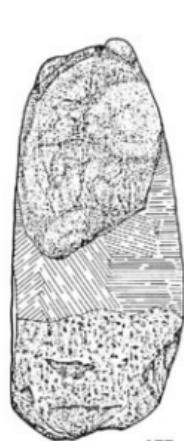
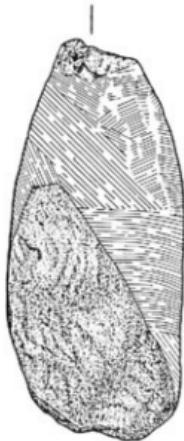




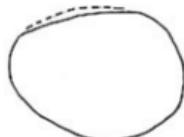
175



176



177



10cm

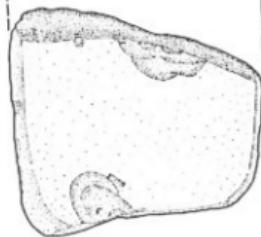
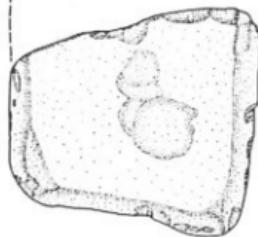


178

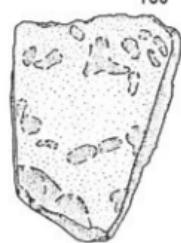
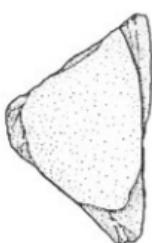


179

0



180



181



182

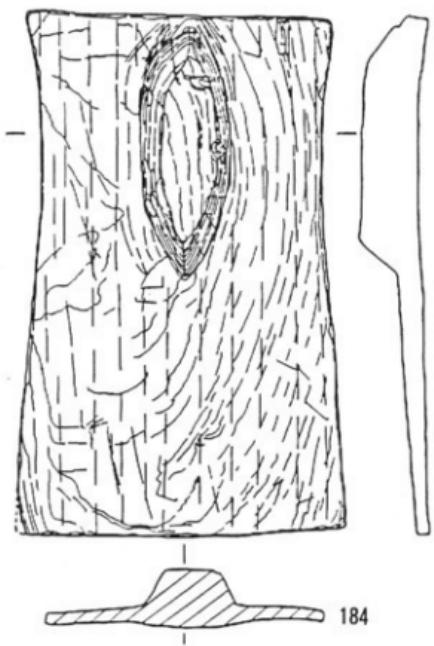


183

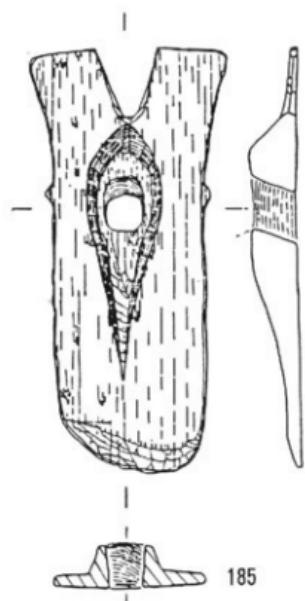


0

10cm

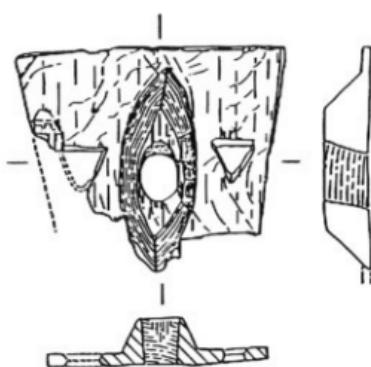
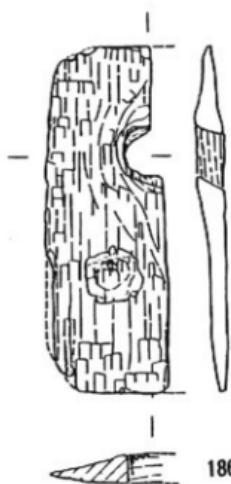


184

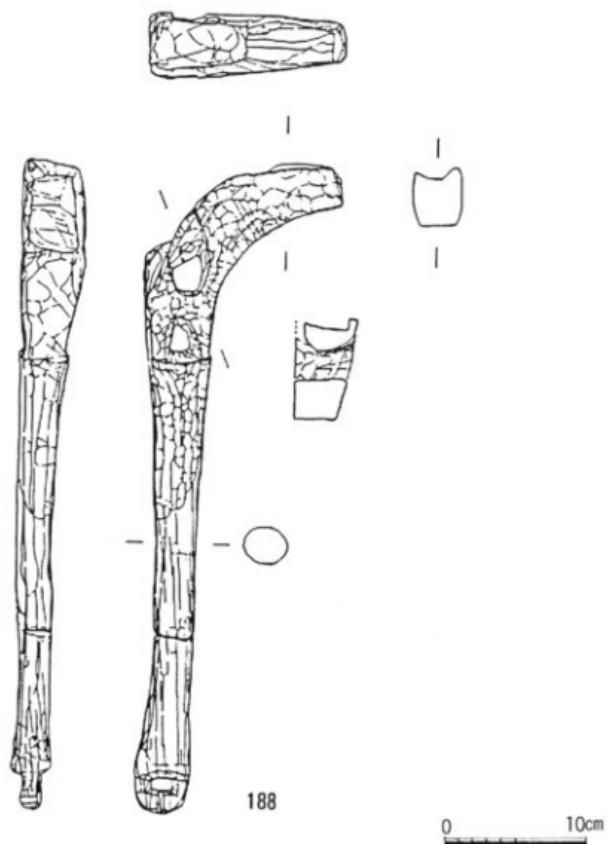


185

0 10cm

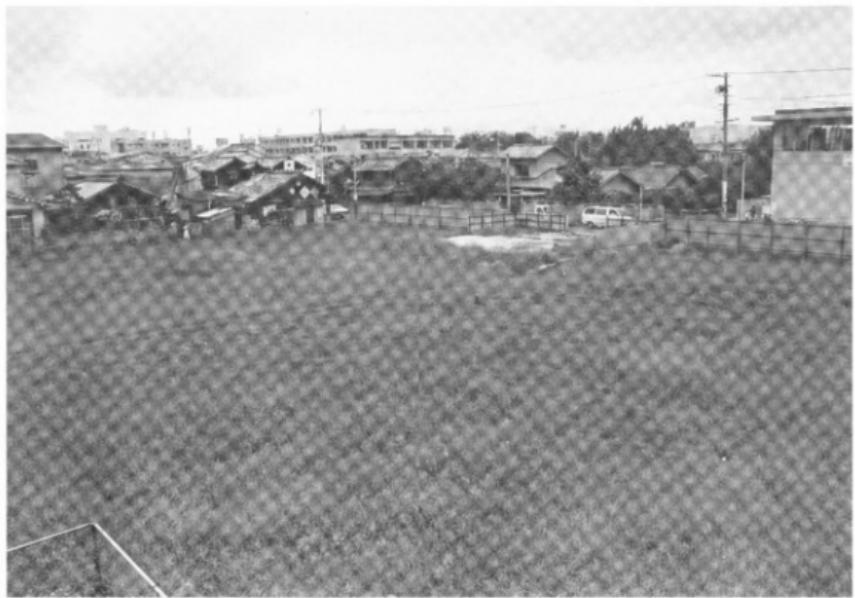


0 10cm



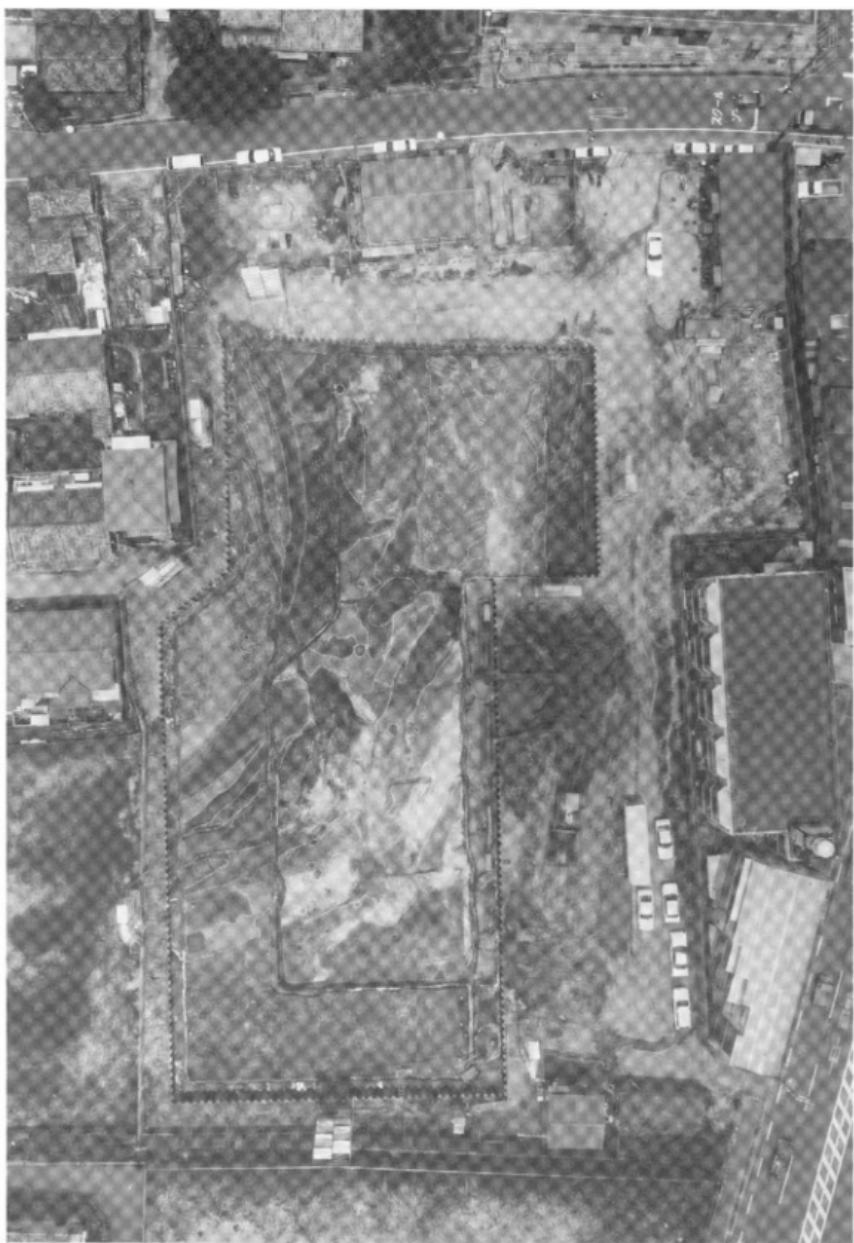


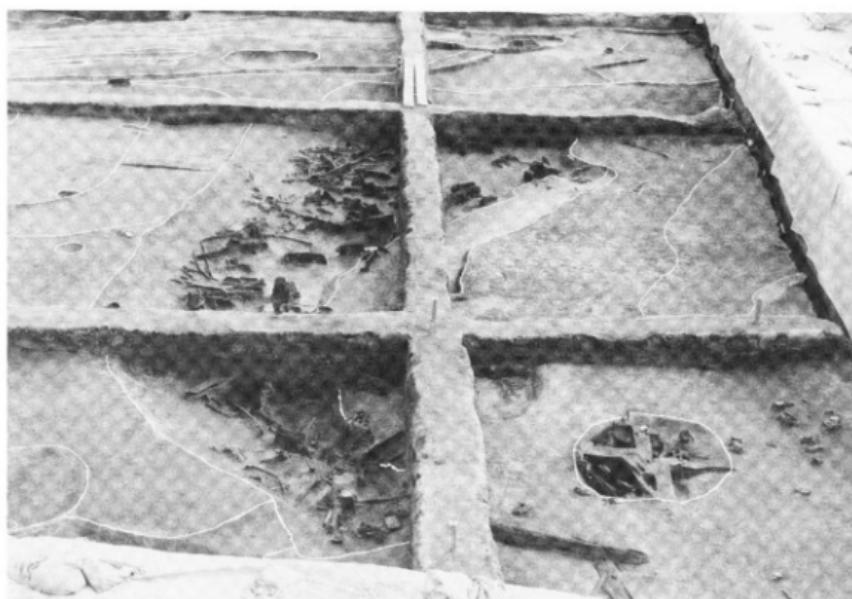
(南より)



(南東より)



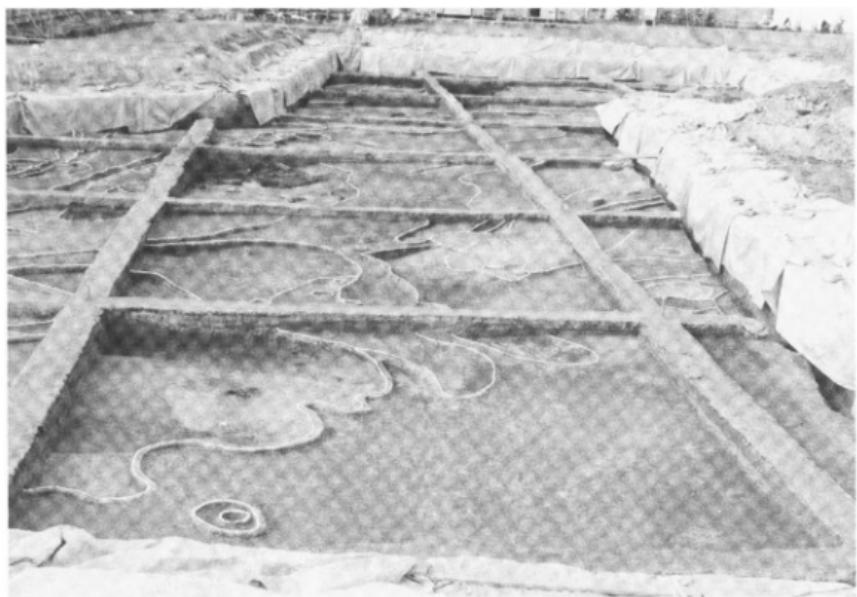




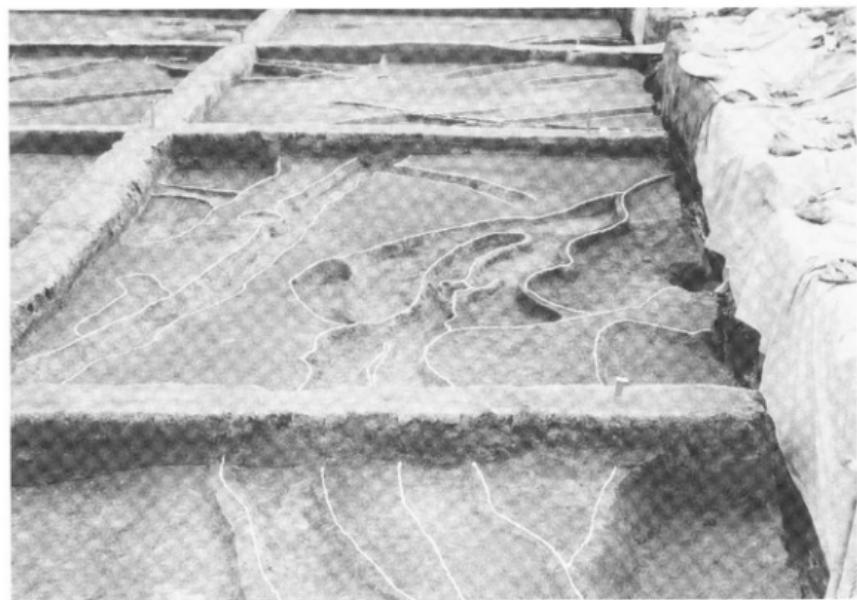
(上層遺構落ち込み214)



(上層遺構木器溜め)



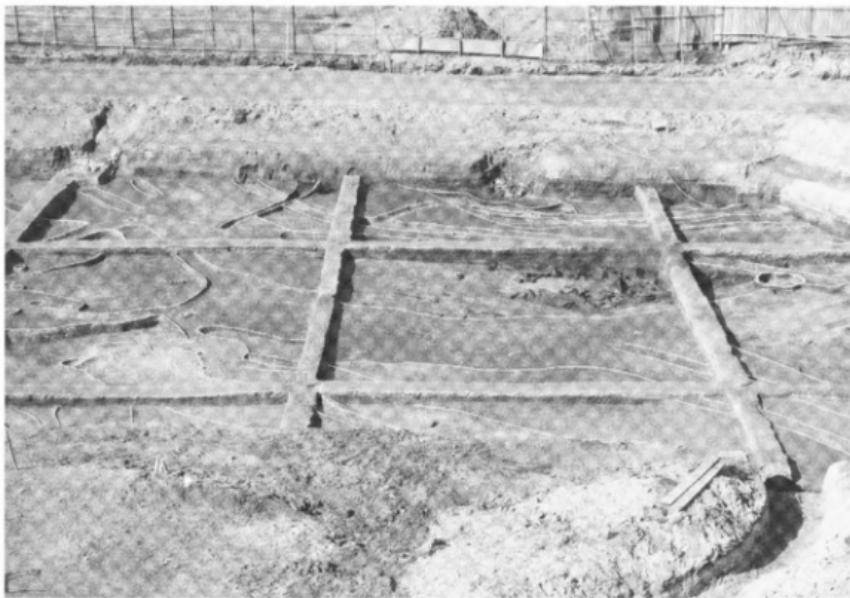
(南より)



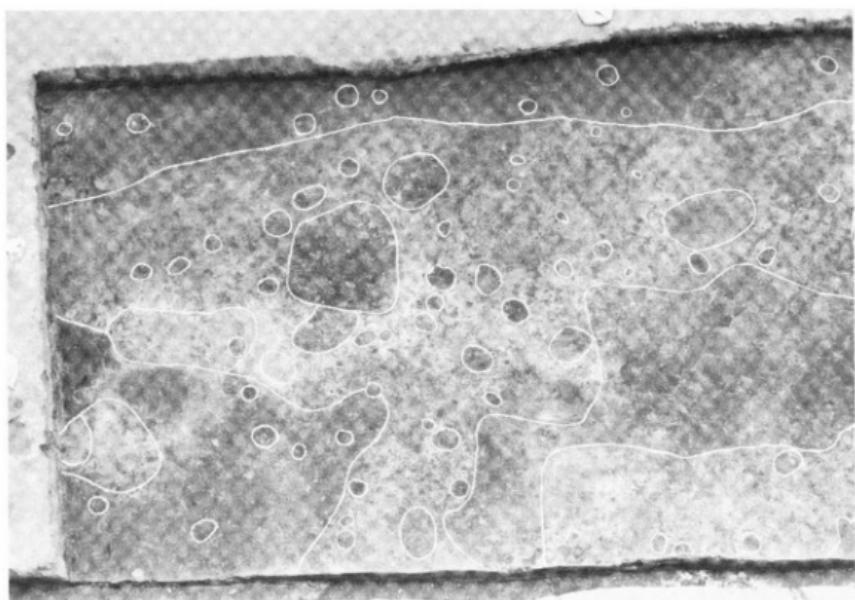
(北より)



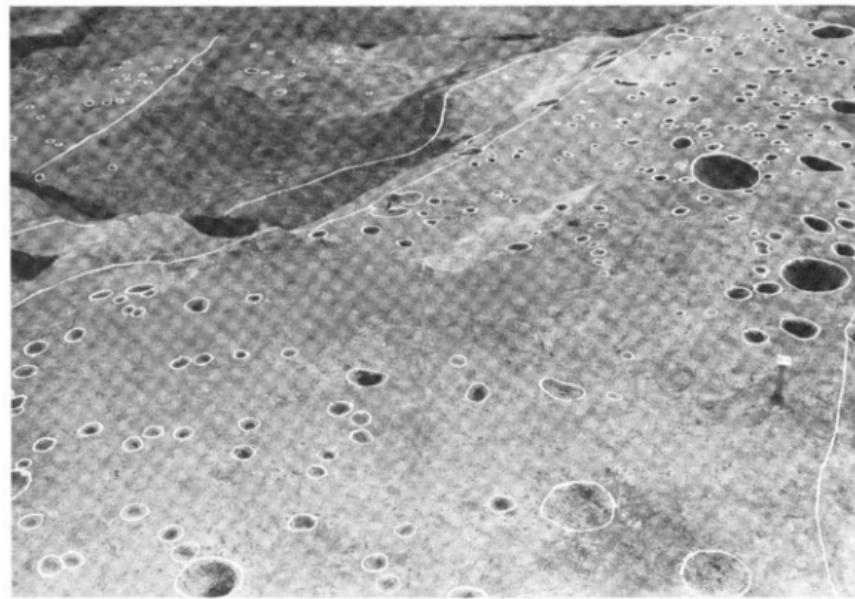
(下層遺構木器含め 南西より)



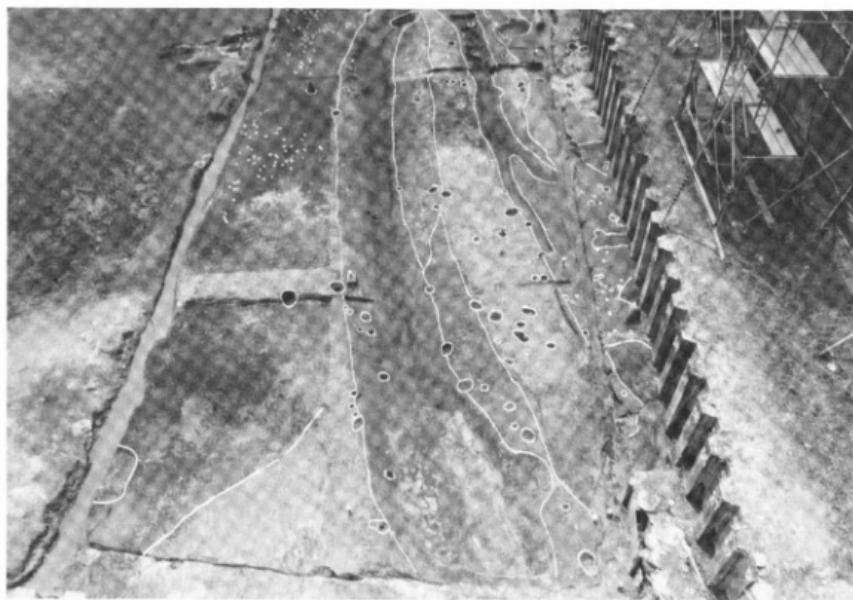
(上層遺構 東より)



(E-4区ピット群 西より)



(E-5区ピット群 北西より)



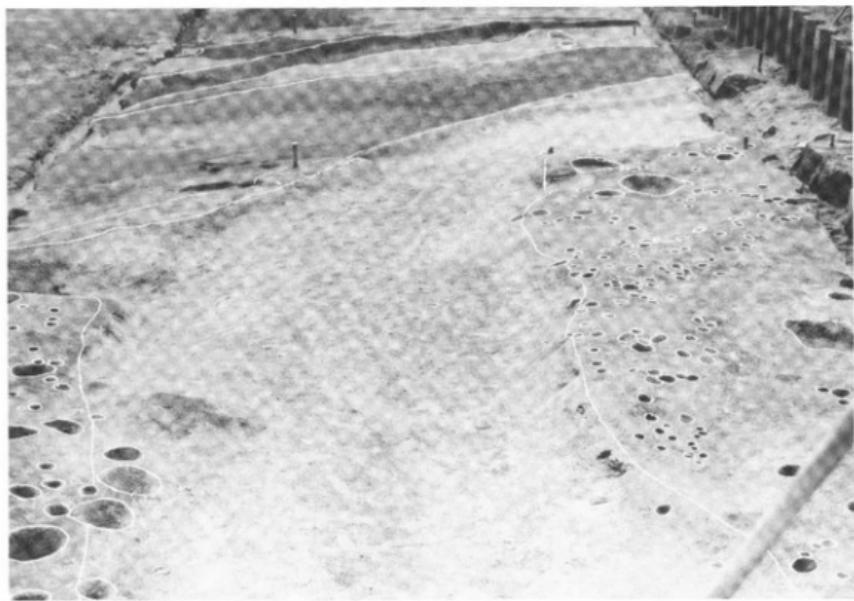
(溝238 北より)



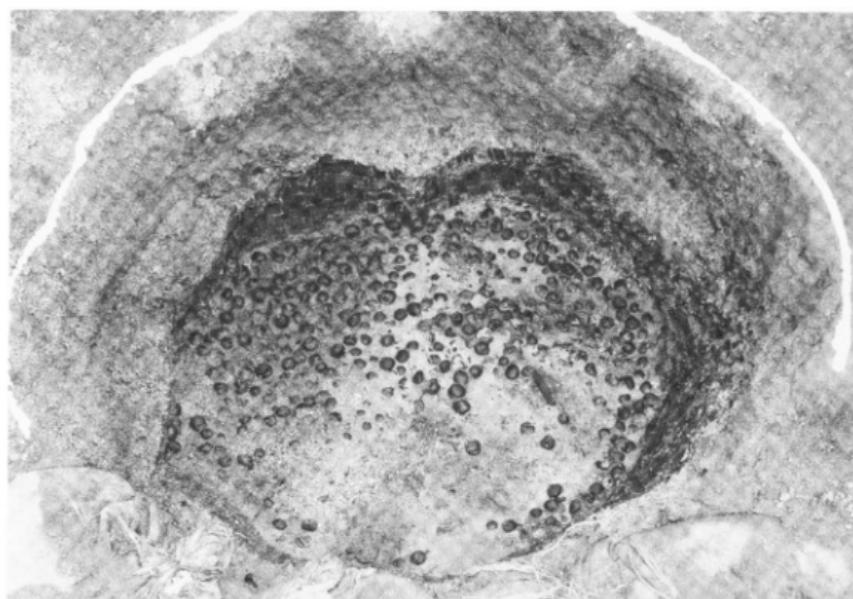
(溝238等 南西より)



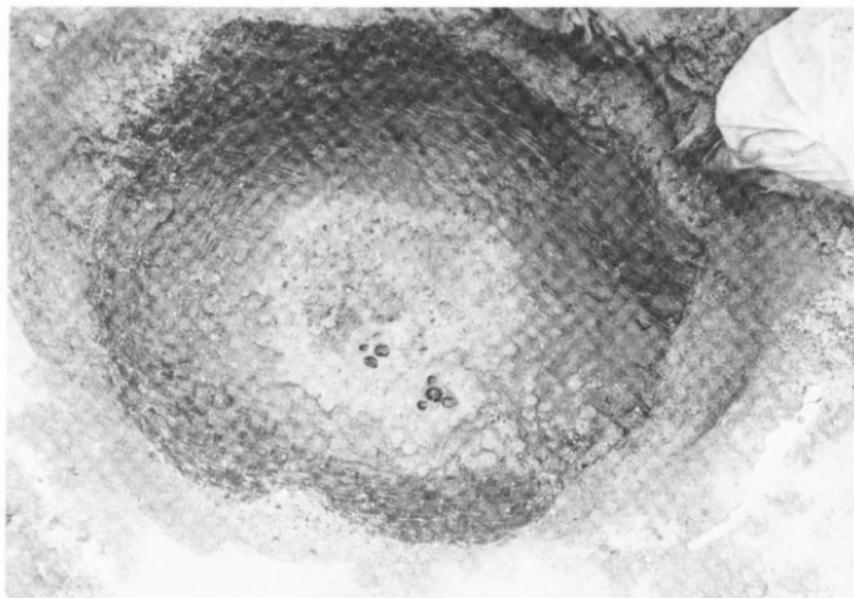
(自然河川・落ち込み214 北より)



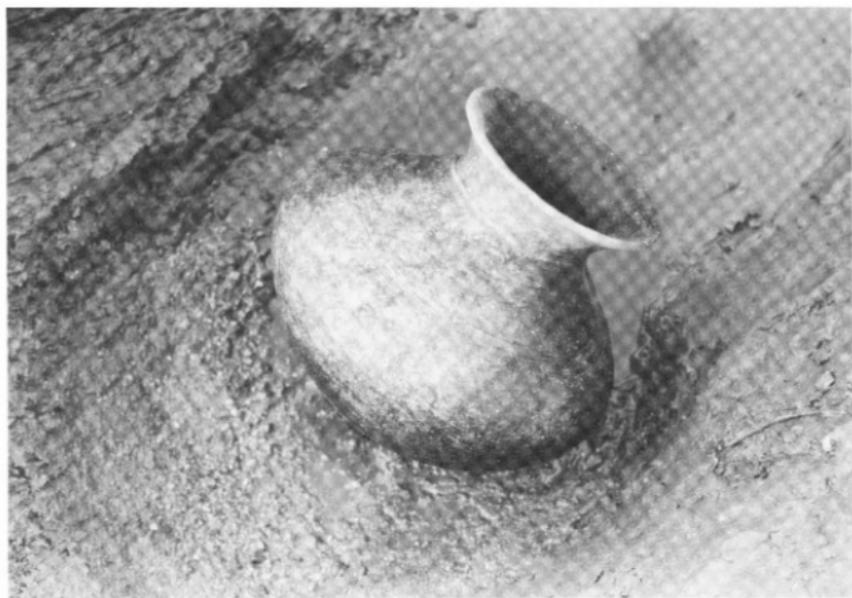
(F-6区自然河川等 北より)



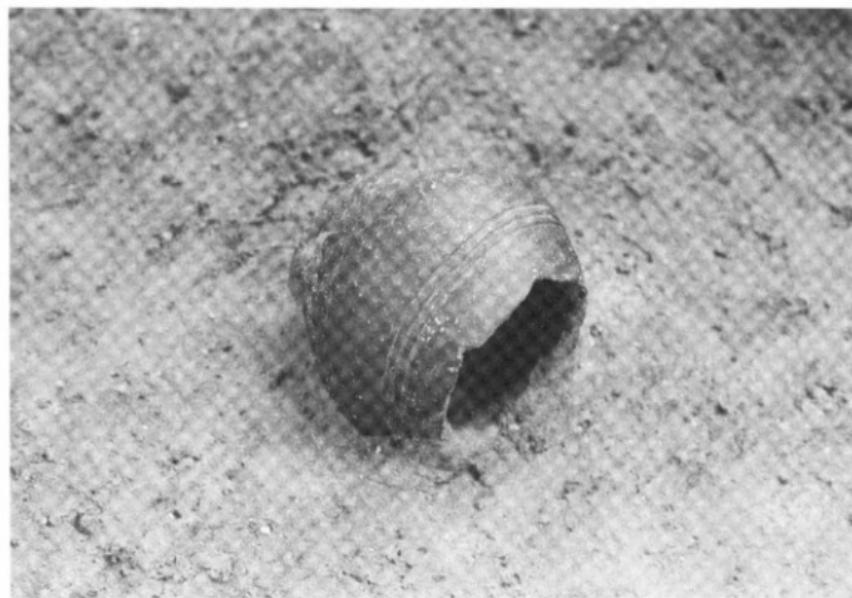
(ドングリの出土状況)



(遺物出土状況)



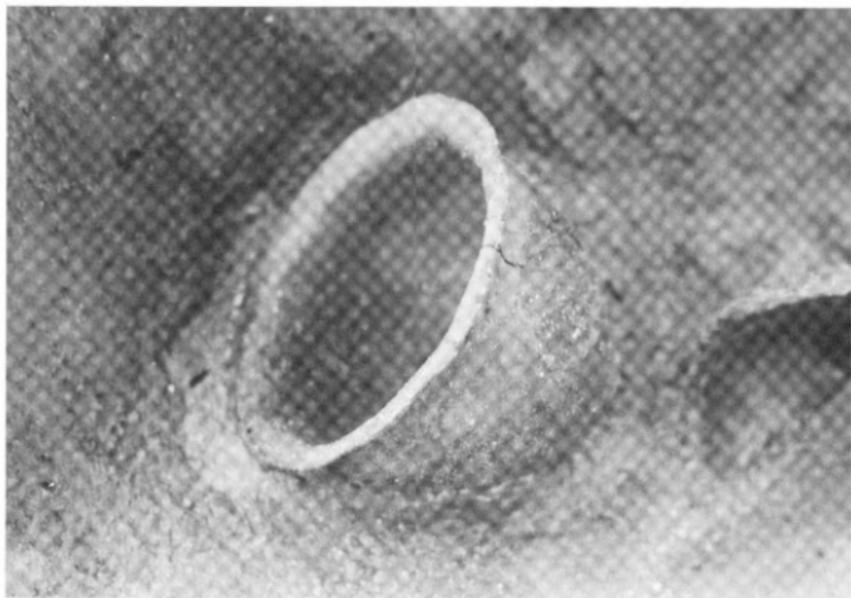
(壺)



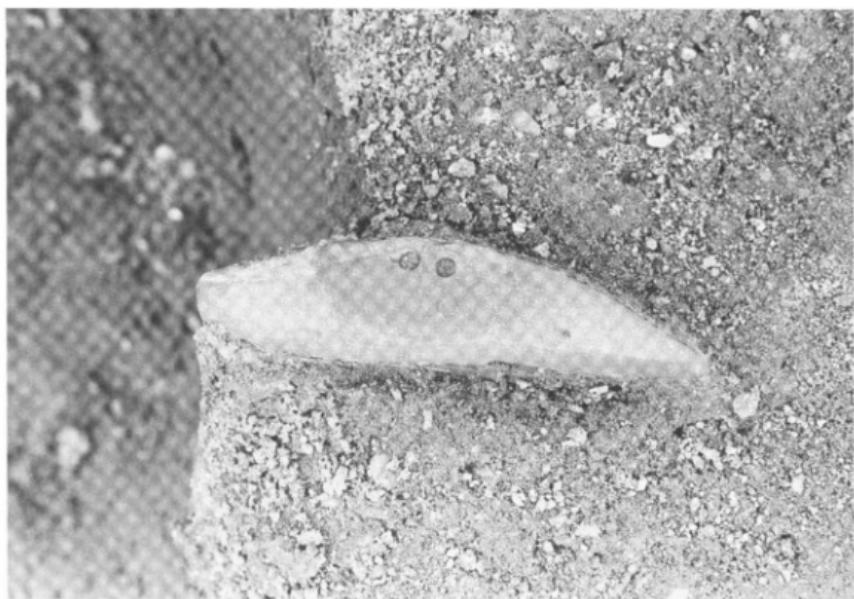
(壺)



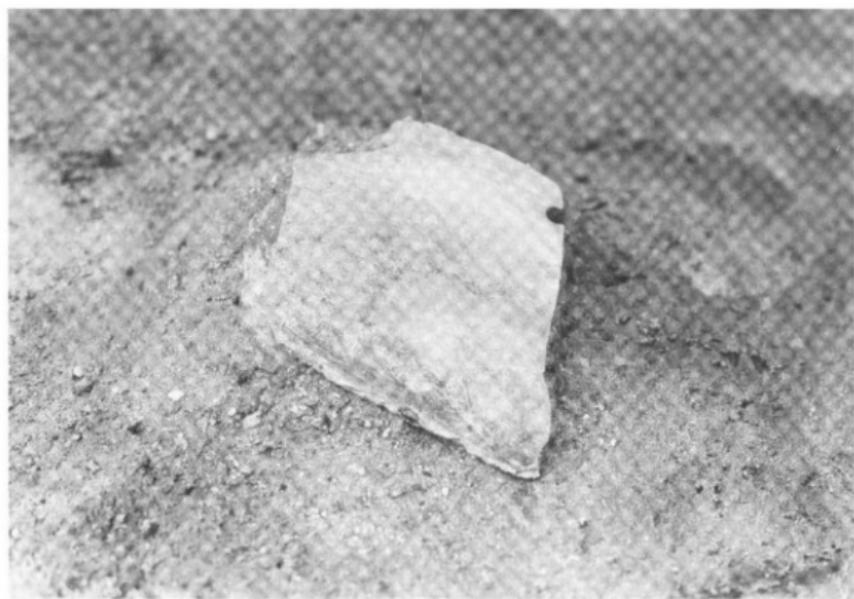
(甕)



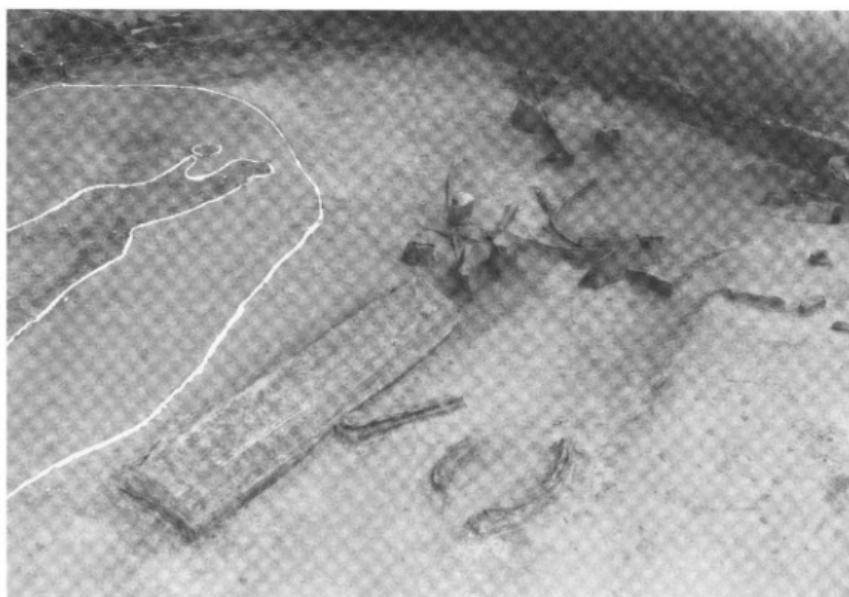
(鉢)



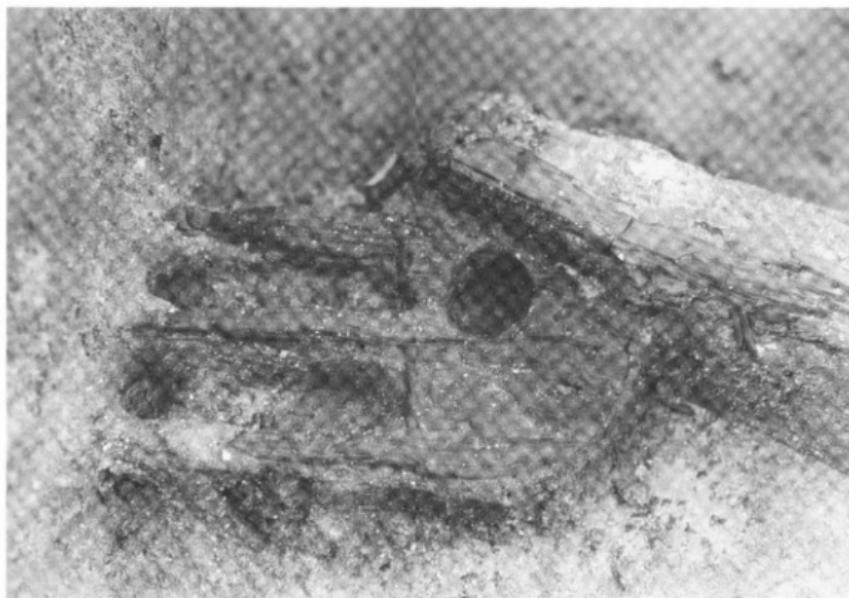
(石蓋)



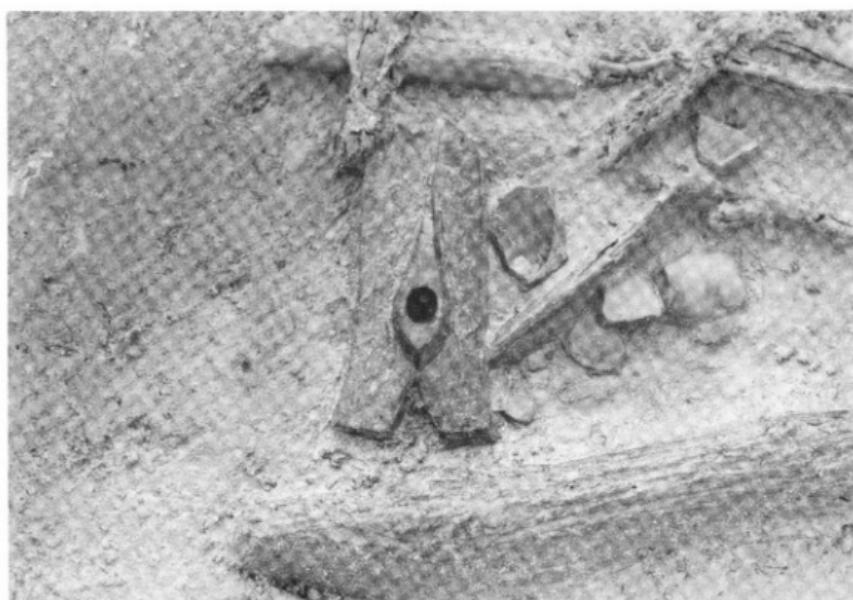
(大型石蓋)



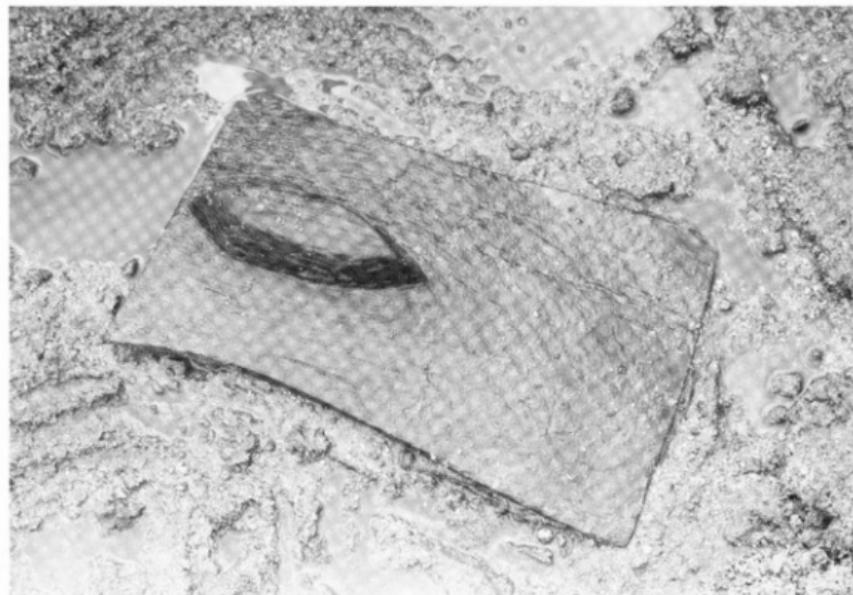
(用材等)



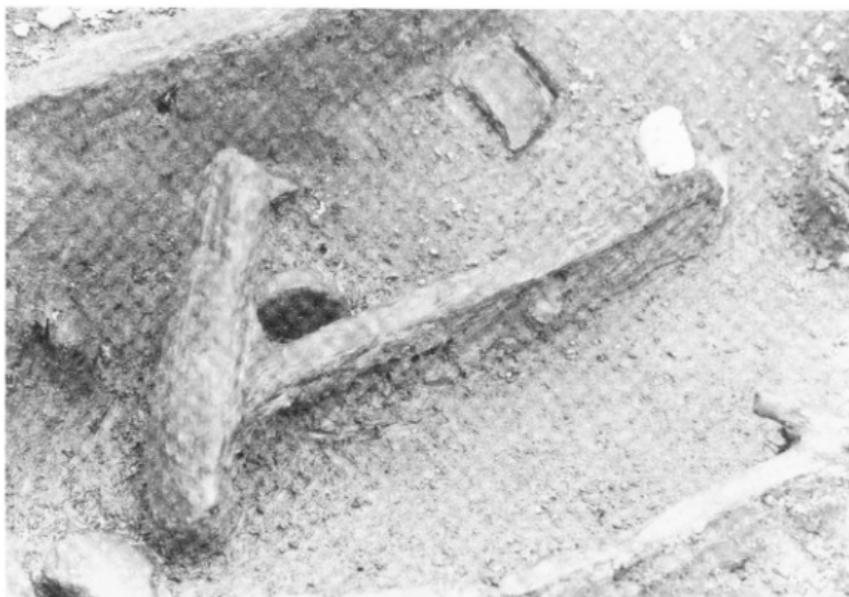
(又一枚)



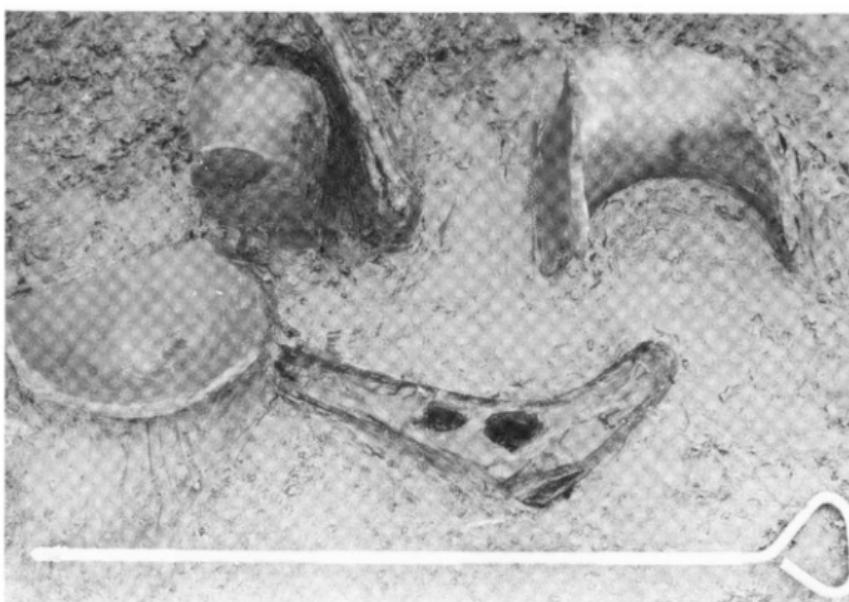
(銀)



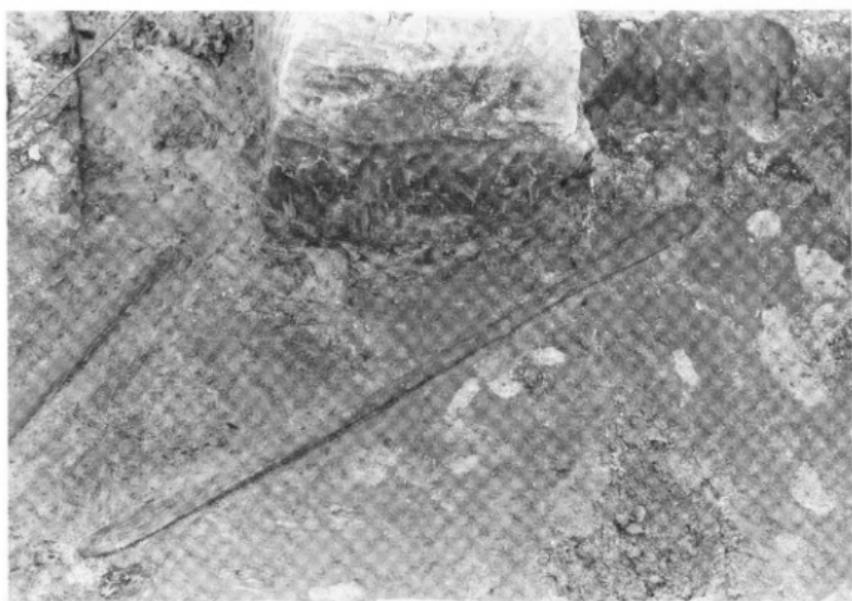
(銀の木製品)



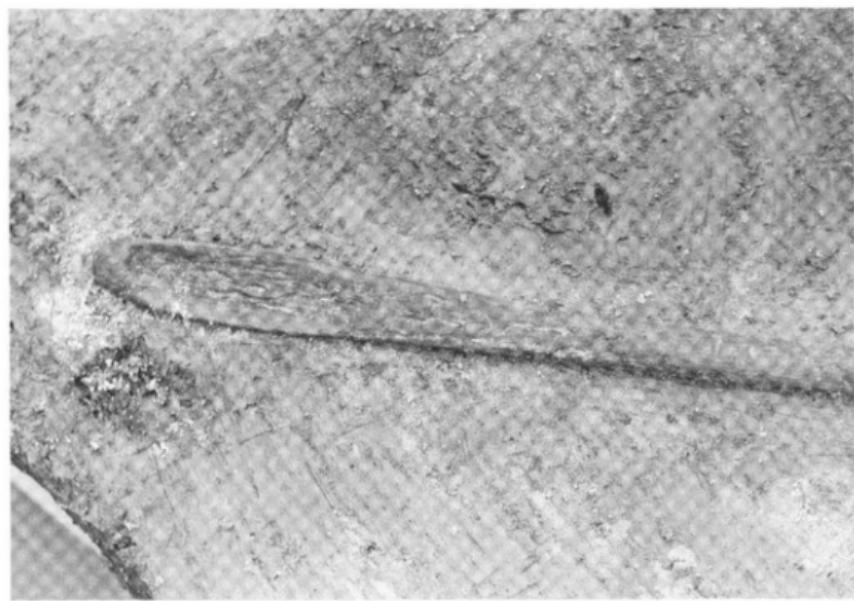
(石斧の柄)



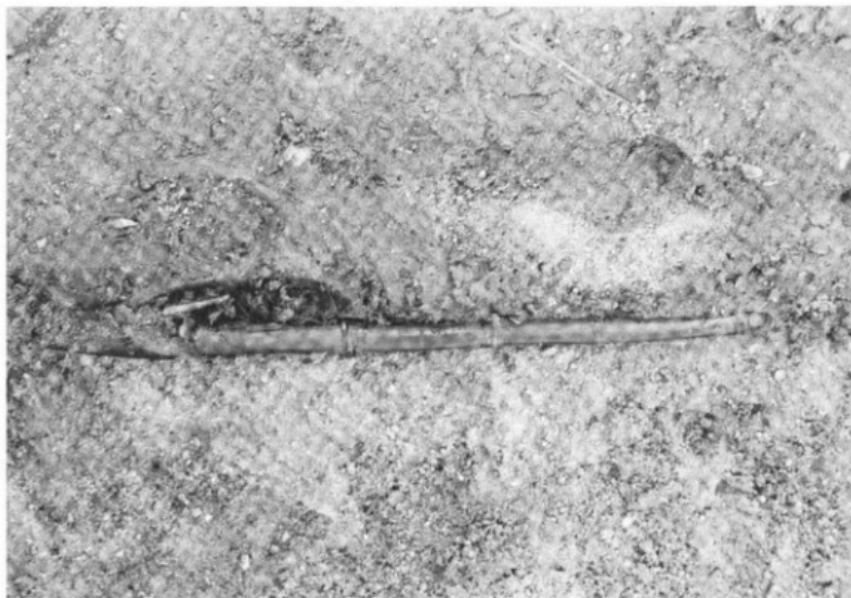
(石斧の柄)

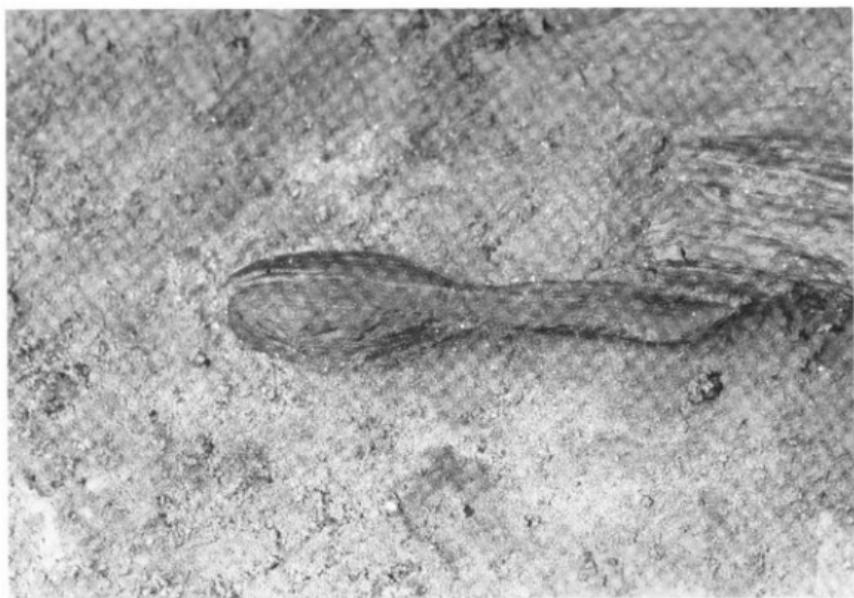


(柵・全長約180cm)



(柵・水かき部分拡大)





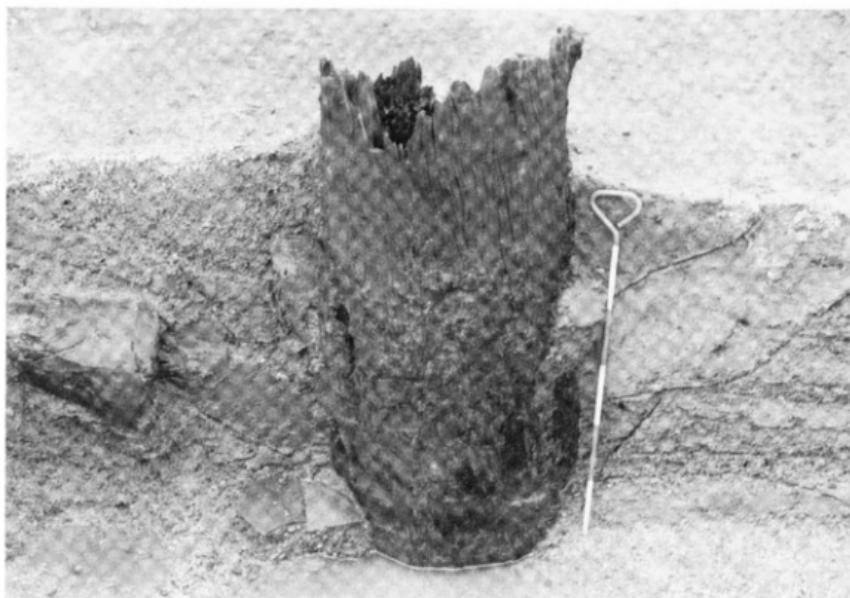
(器)



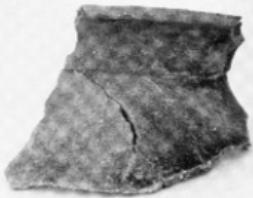
(器物)



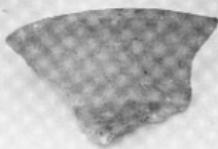
(鍔)



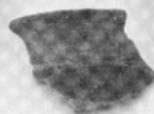
(井戸状遺構)



1



2



3



4



5



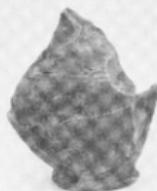
6



7



8



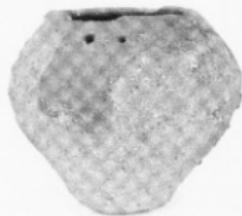
9



12



17



13



14



11



15



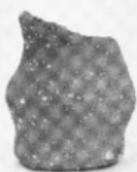
16



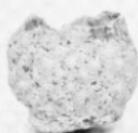
10



18



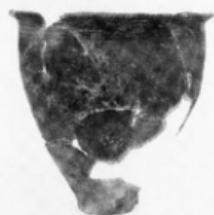
19



20



21



22



23



24



25



26



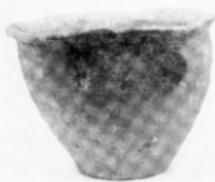
27



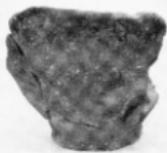
28



29



30



31



32



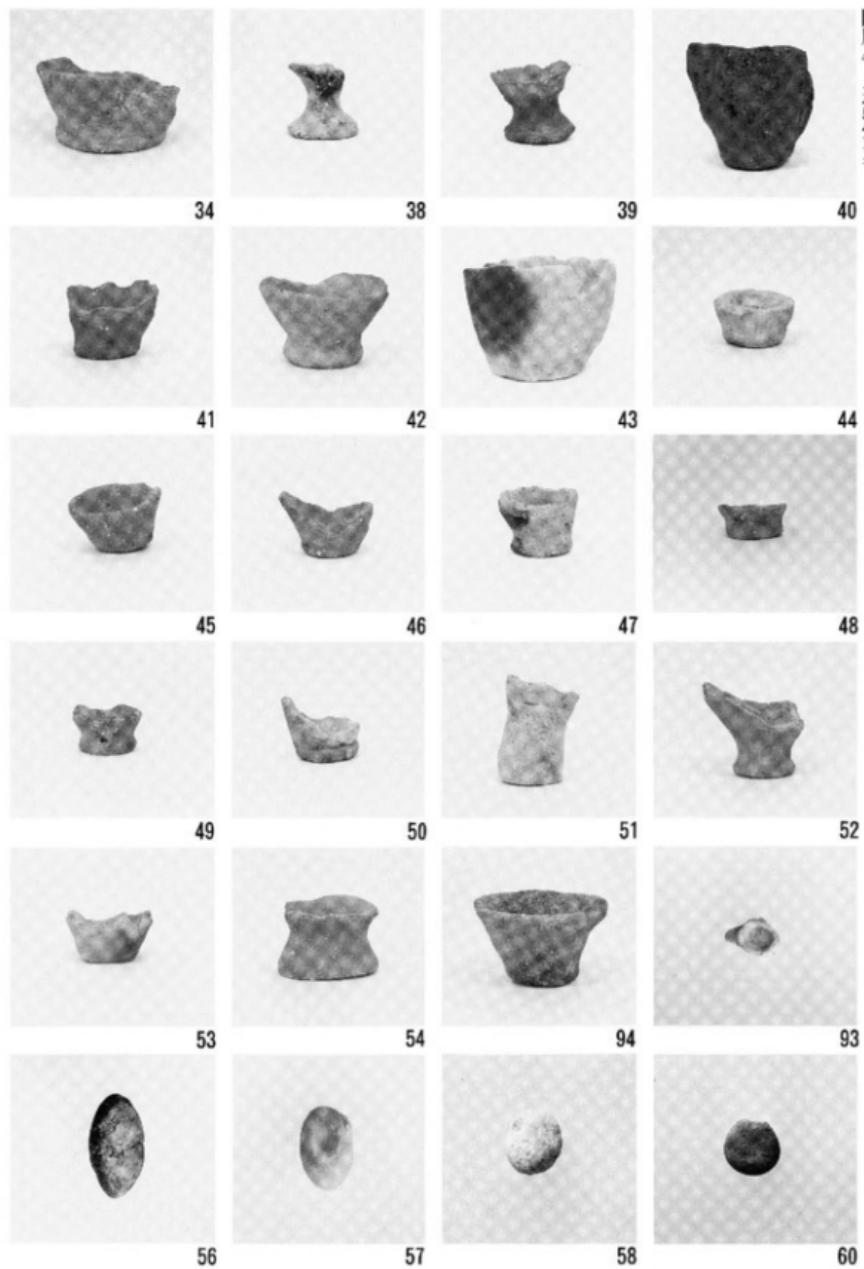
33



35



36





|



55



|



59

190

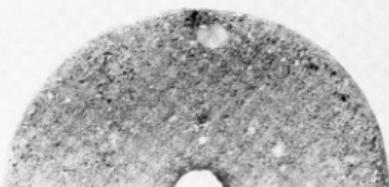


189



(羽跡の残る紡錘車)

95



(拡大)

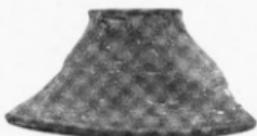
95



37



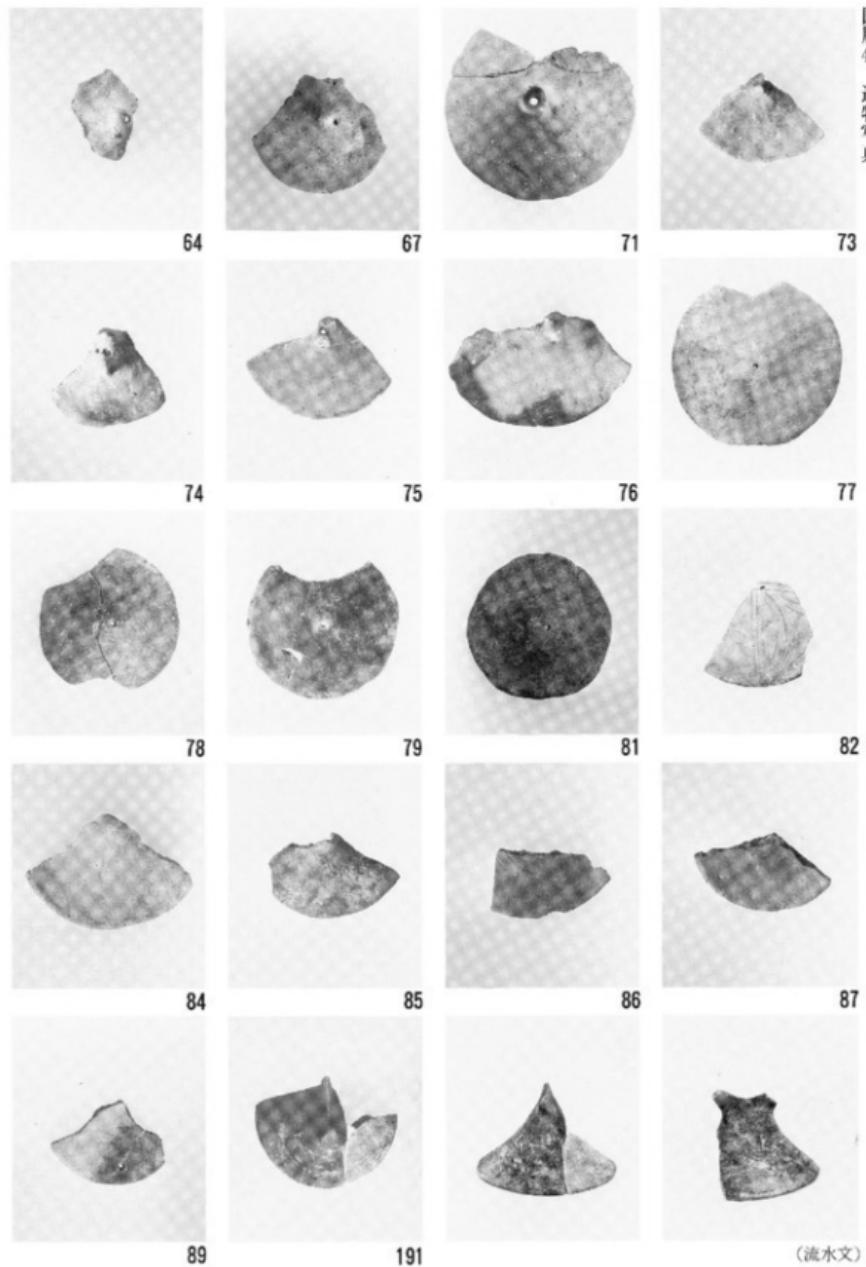
61

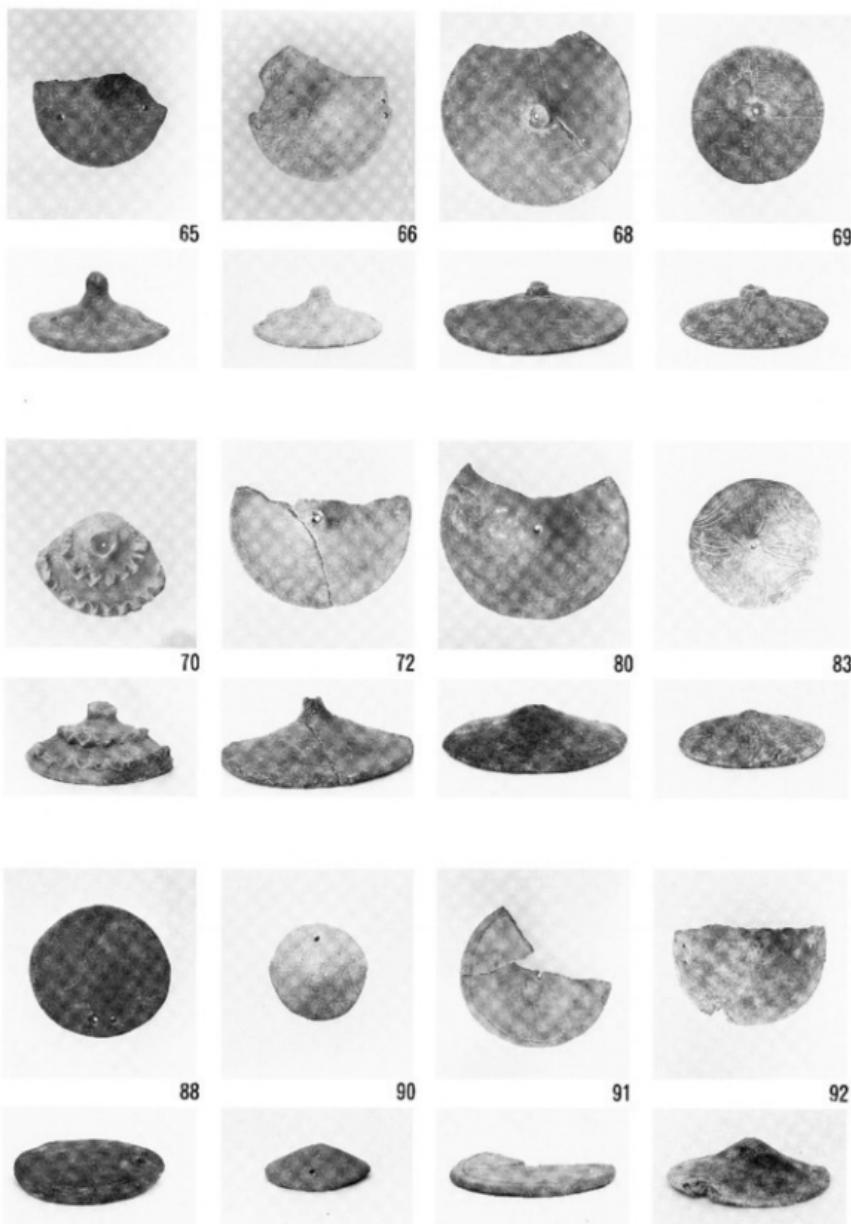


62



63







98



102



101



95



103



105



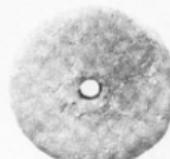
97



99



100



96



104



113



111



108



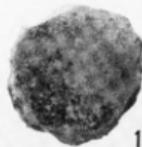
118



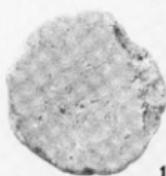
119



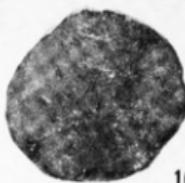
115



120



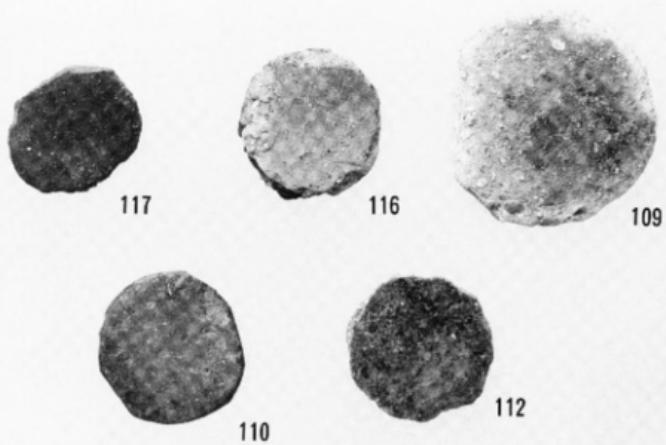
106



107



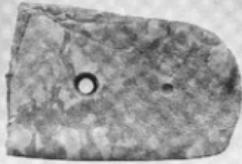
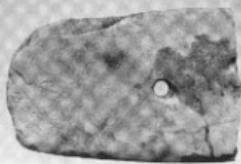
114



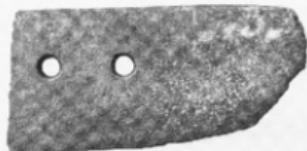
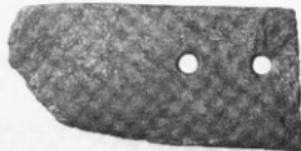
(赤彩文土器)



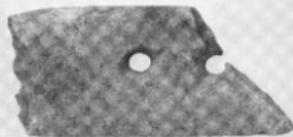
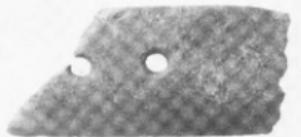
121



122



123



124



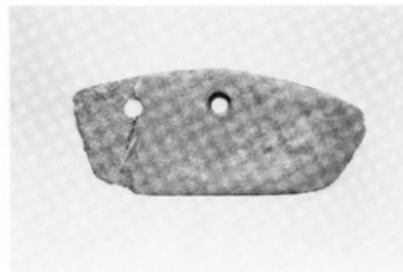
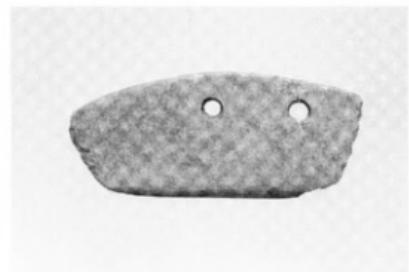
125



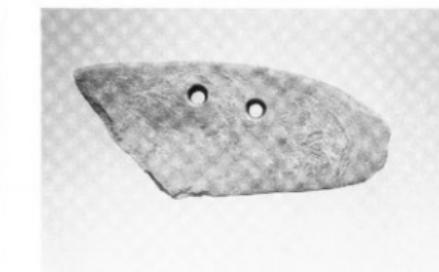
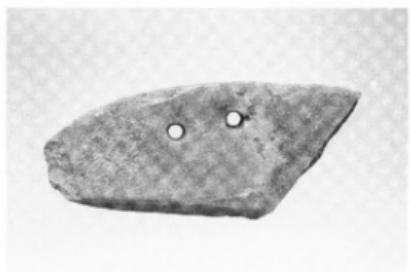
126



127



128



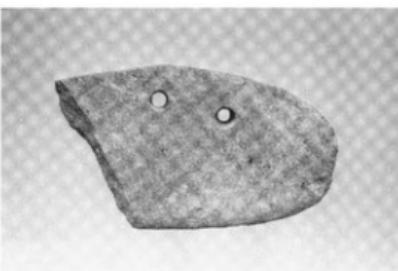
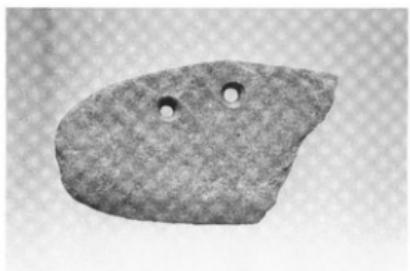
129



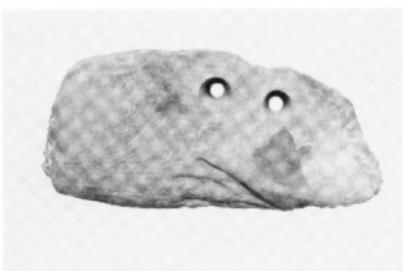
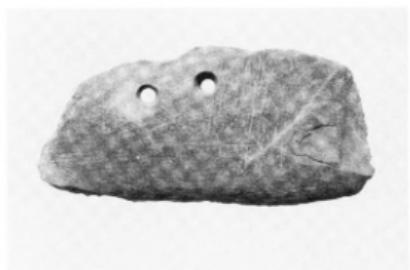
130



131



132



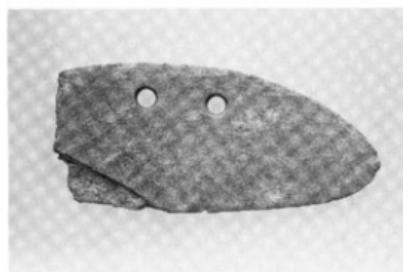
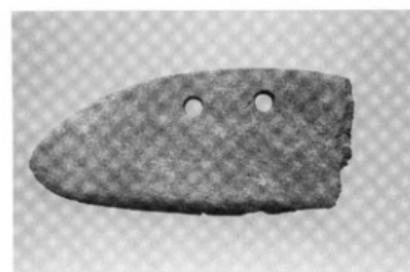
133



134



135



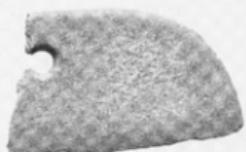
136



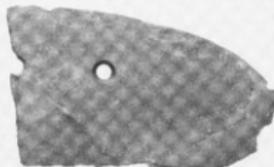
137



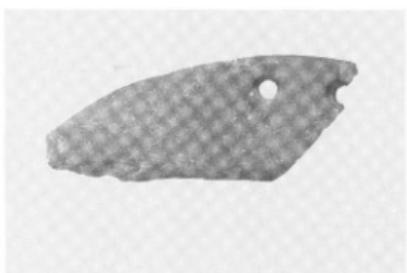
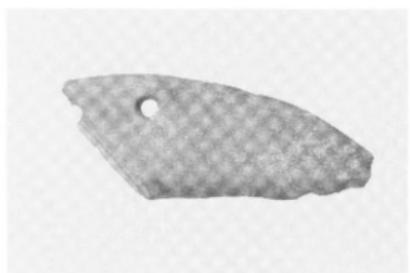
138



139



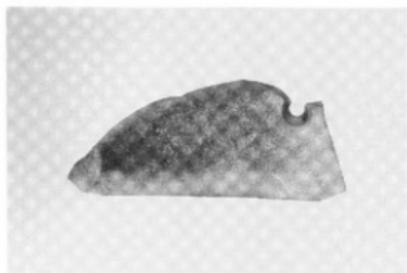
140



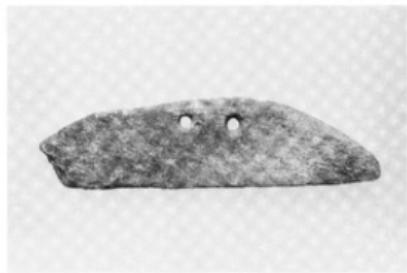
141



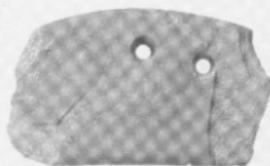
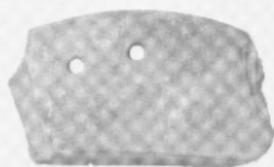
142



143



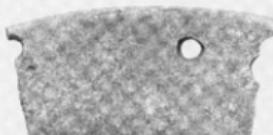
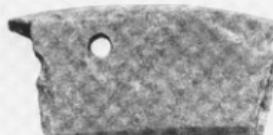
144



145



146



147



148



149



150

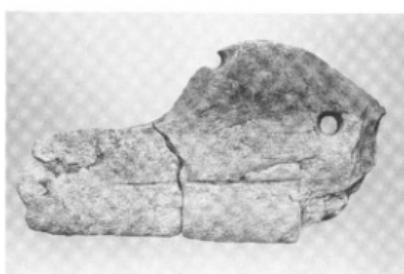
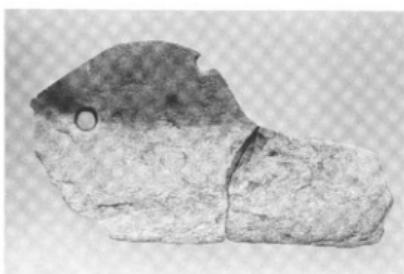


151

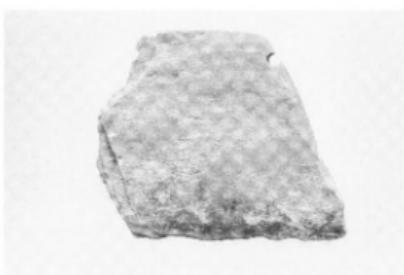


152

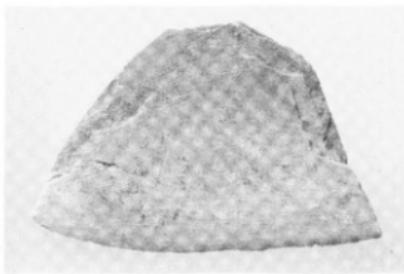




153



154



155



158



161



157



166



160



156



163



159



164



165



16



168



169



170



171



172



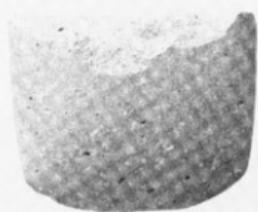
173



174



175



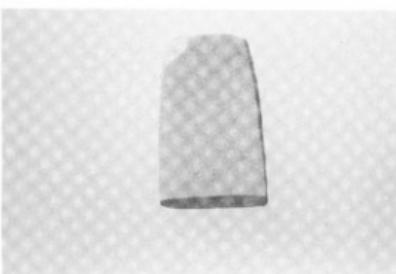
176



177



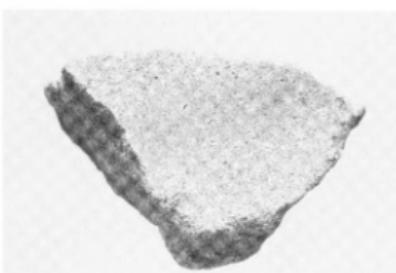
178



179



180



181



182



183



184



185



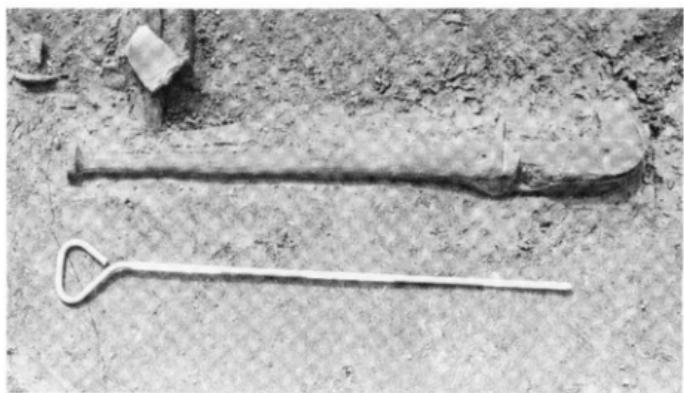
187



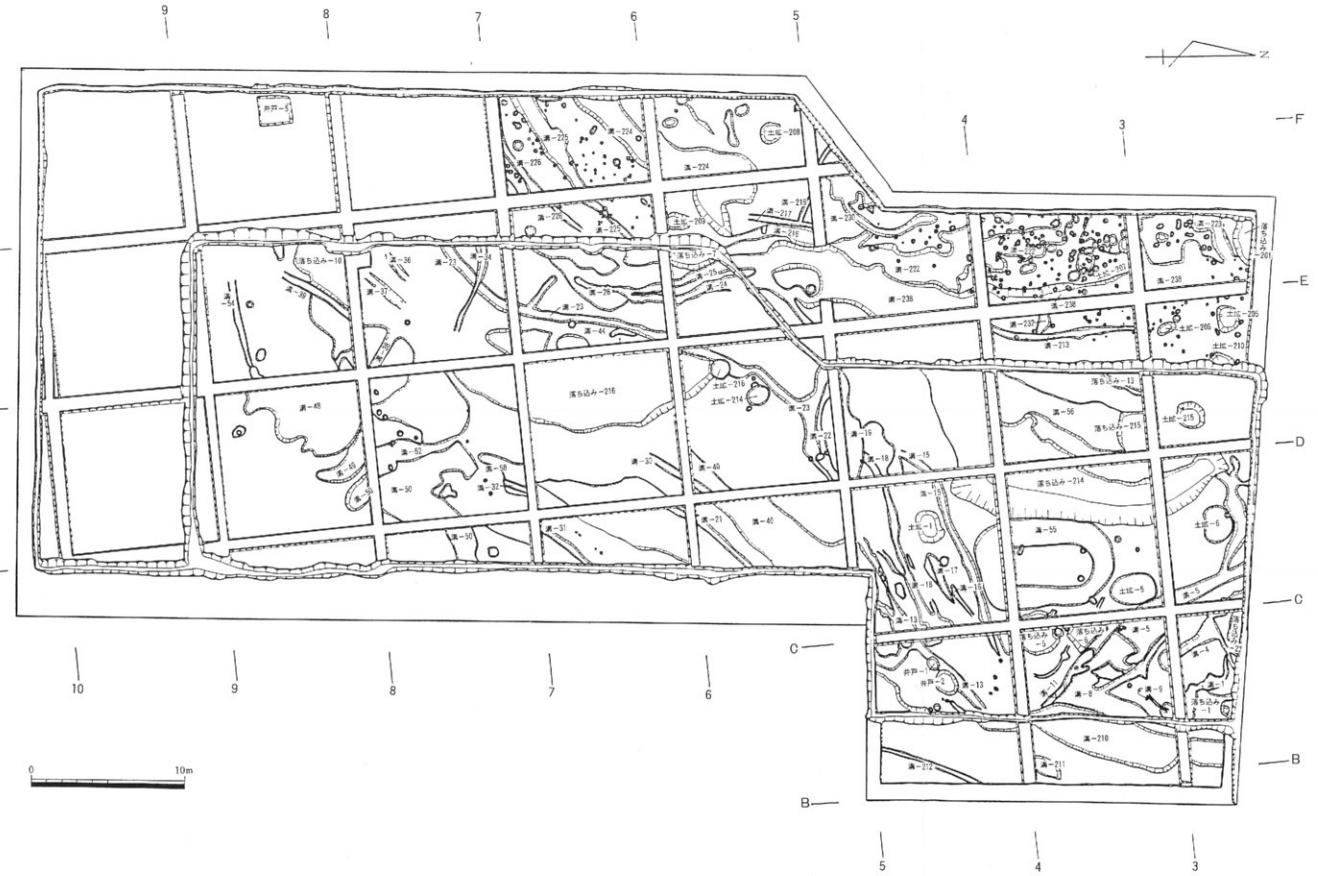
186

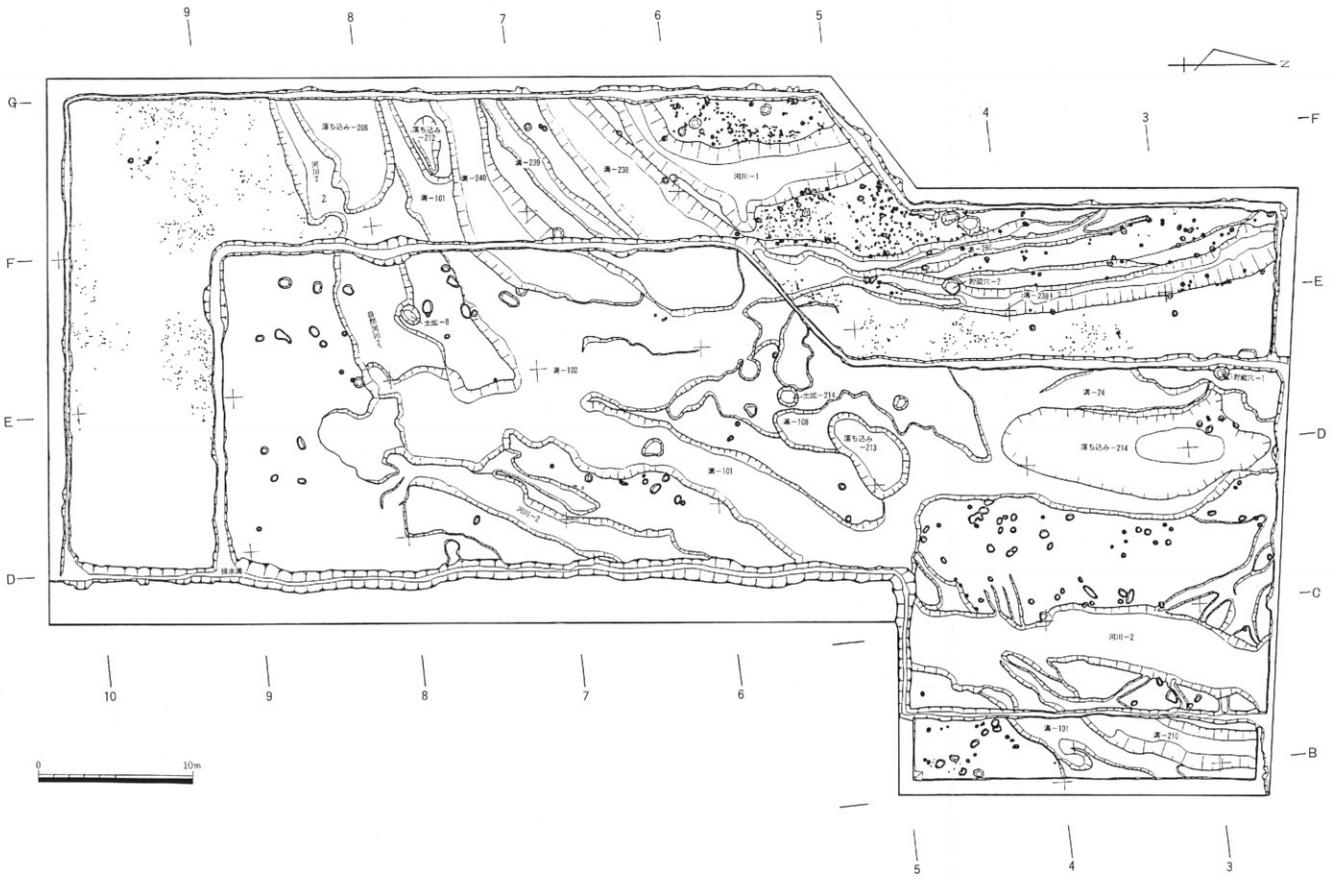


188



(用途不明木製品)





高宮八丁遺跡

—寝屋川郵便局庁舎建設に伴う発掘調査概要報告—

昭和62年3月

編集
発行 寝屋川市教育委員会

大阪府寝屋川市本町1番1号

印刷 サツキ印刷株式会社

